
WORST CRISIS -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W O R S T C R I S I S - h e a d -

【Nコード】

N 0 9 2 1 D

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

セフィロト国から城塞都市トロメオを奪還するため、手品師ゲブラとの戦いに挑む。都市奪還は成功するのか。そして戦争の結末は
(P A S T D E S I R E - h e a d - 続編)

SECT・1 春の訪れ（前書き）

この物語は連作です。

【LOST COIN - head・】 [de.syo.setu.com/n3660c/](http://nco
de.syo.setu.com/n3660c/)
【LOST COIN - tail・】 [de.syo.setu.com/n3665c/](http://nc
de.syo.setu.com/n3665c/)
【LAST DANCE - head・】 [ode.syo.setu.com/n4082c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n4082c/)
【LAST DANCE - tail・】 [ode.syo.setu.com/n4617c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n4617c/)
【PAST DESIRE - head・】 [ode.syo.setu.com/n6324c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n6324c/)
【PAST DESIRE - tail・】 [ode.syo.setu.com/n7899c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n7899c/)
【WORST CRISIS - head・】 （本作）
【WORST CRISIS - head・】 [ode.syo.setu.com/n0973d/](http://nc
ode.syo.setu.com/n0973d/)

順にお楽しみください。

SECT・1 春の訪れ

春の草原は雪が溶け、淡い色をした芽が一面に広がって風に揺れている。まだ少し冷たさが残る空気は、花の蕾をいつせいに刺激した。

色とりどりの花弁が草原を彩る中、東の都トロメオを占拠したセフィロト軍と、商業都市カシオに撤退したグリモワール軍の睨み合いが続いている。

新しい命が芽生えるはずの春、グライアル草原からは争いの序章が鳴り響いていた。

目的はまず、東の都トロメオの奪還。

新たに一人レメゲトンと翠光玉騎士団員^{エメラルド}200名を加え、一気に奪還する作戦を取るようになった。

悪魔を召還し戦う国家天文学者レメゲトンの戦闘能力は一般兵100人分以上の戦闘力は見込まれる。一人である機動性を考えると効果はそれ以上だ。

ただし、セフィロト国にも天使を召還し戦う神官、セフィラがいる。

一般兵よりもセフィラを相手にする事が先決だった。

ベアトリーチェさんを加えた4人だけで戦況報告が行われた。

「これまで戦闘に参加したセフィラは5人、そのうち2人は既に力を引き剥がした」

「力を引き剥がす……？」

よく分からない言葉が出てきて、思わず眉を寄せた。

「私たちがコインを持つようにセフィラも体のどこかに天使と契約した印を刻んでいるの。それを失わせる事が出来れば彼らは天使の加護を失うわ」

ねえちゃんが簡単に説明してくれた。

「なるほど」

「現在戦闘に出ているのはあの手品師^{マジシャン}ゲブラ、死霊遣いホド、それに最近出てきたセフィラの長ケテルだ」

「ゲブラは峻厳の天使カマエル、ホドは栄光の天使ラファエルを、ケテルは王冠の天使メタトロンを召還します。3天使とも非常に高い能力を有していますが、中でも長のケテルは飛びぬけています」

「今回のトロメオ陥落もほぼケテル一人の力で成し遂げたようなものよ。あいつ……本当に腹立たしい！」

ねえちゃんがどん、と机を叩いた。

がたがたと窓まで揺れる。

思わず身を引いて硬直した。

「あら、ごめんなさい。驚かすつもりはなかったのよ」

やっぱりねえちゃんは怒らせちゃ駄目だよ！

ふう、と一息ついてから訊ねた。

「2人は力を剥がしたって言ったよね。んで、いま戦闘に出てるのが3人、ていうことはまだ5人も残ってるんだ」

「そうだ。だが温厚な慈悲の天使ツアドキエルを守護に持つケセドが戦場に出てくるとは考えにくい。戦闘能力的にはネツアクも出て込んだろう。基礎の天使ガブリエルを役するイエソドは不明だ。

まだ幼い少女だという噂もある。総指揮を執るマルクトも戦闘に参加しないと見て、残りは……」

アレイさんはいったんそこで言葉を切った。

続きを彼が言う前に出来る限り自然に言った。

「あのヒトだね。ミカエルさんを召還する銀髪のヒト」

声が震えそうになったのを何とか制御した。飛び出しそうになる気持ち無理やり押さえつける。

「王都ユダへの乱入後拘束されているらしいが、いつ戦場に出てくるか分かん。用心に越した事はない」

「うん」

こくりと頷いた。

「他の天使が戦場に出ることはないと仮定して、残りはゲブラ、死霊遣いホド、セフィラの長ケテルの3人を倒せばいい」

「ラックを入れて3人、ようやく1対1で対応できそうね。ケテルはアレイに任せるわ。あいつを倒せる可能性があるとしたらあなただけよ」

「分かっている。前は軍の事があつて退いたが、今度は完全に叩き潰してやる」

「死霊遣いは私が引き受けるわ。大人数を相手にするのは得意だから邪魔さえ入らなければあんな奴敵じゃない」

と、言う事は必然的に。

自分の相手はあの手品師^{マジシャン}ということになる。

半年前まで手も足も出なかった相手だ。散々手を抜かれて、拳句食らわせたのは一撃だけ。

「できるわね、ラック」

「うん」

自分がどれだけ強くなれたか知るにはいい機会だ。

負けない。

「あいつはおそらく見たことのない剣術を使ってくるだろう。千里眼を使えばいいのだが、墮天のアガレスは召還できない。あいつの召還するカマエルとお前の使うフラウロスが同等だとしたら、あとはお前自身の力が重要になってくるだろう」

「無茶はしちゃだめよ。負けそうだと思ったらすぐに言うこと！

王都で一人レラージュと戦った時とは違ってここには私も、アレイだっているんだから」

「うん、分かった」

「何より、戦場で私たちレメゲトンの使命は一つ。一般兵をセフィラとの戦闘に巻き込まない事よ。天使を召還した状態のセフィラと互角に戦闘できる単騎兵はいない。いるとしても騎士団長クラスでサブノックの武器を持つ『^{アウェイク}覚醒』という部隊のトップメンバー数名

だけ。でも、私たちは悪魔を召還することでセフィラを押し留める事が出来るわ」

「普通の兵士さんには手を出さずに、セフィラのヒトだけ相手にしたらいいんだね」

「そうよ」

ねえちゃんはにこりと微笑んだ。

でもどこか悲しそうだった。

「最初の目的はトロメオの奪還。それ以上はまだ何も考えなくていいわ」

真直ぐな金色の瞳。

ずっとずっと探し求めていたものだった。

「うん」

自分の中に欠片が揃う。

隙間を埋めるようにはまり込んだそのピースは確実に足りなかったものを埋めた。

ようやく自分の居場所に帰ってきた。半年の時間をかけて自分の力で手にする事が出来た。

大きな自信と共に、安堵感に包まれていた。

打ち合わせが終わったところでねえちゃんを呼び止めた。

「どうしたの？」

不思議そうな顔をしたねえちゃんに、腰に差していた小太刀を抜いて出した。

「ずいぶん使ってたから、ぼろぼろになっちゃって」

鞘から抜いた刀は刃こぼれしており、また峰の方からひびが入っていた。

「もう、そういうことは早く言わなくちゃ駄目よ。武器はとても大切よ。ちゃんと手入れしなくちゃいけないわ」

「はあい」

「でも……困ったわね」

ぼろぼろになった小太刀を指でなぞりながら、ねえちゃんは眉を寄せた。

「小太刀なら一本や二本軍に余っているかしら。それよりも……」

小太刀を鞘に納めて、ねえちゃんは微笑んだ。

「アレイに頼みなさい。きっと第49番目の悪魔サブノックがあなたに武器を作ってくれるわ」

部屋を出て、早足で長身黒髪の男性に追いついた。

「アレイさん」

「どうした」

紫の瞳を嵌め込んだ切れ長の眼がこちらに向けられた。

「あのね、実はね……」

ねえちゃんに言った事をもう一度繰り返してぼろぼろになった小太刀を差し出すと、アレイさんは大きなため息をついた。

「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ。武器はこまめに手入れしろ。小さな亀裂が戦闘では致命傷を招く事もあるんだ。コインと同じだ。お前の命を預かるものだ。もっと気を配れ、このくそガキ」

珍しく力を込め口数多く力説するアレイさんを見上げながら、素直に頭を下げた。

「ごめんなさい」

「……まあいい。いい機会だ、戦場に出る前にお前の武器を作ってもらえるかサブノックに頼んでみよう」

「ほんと？」

「ああ」

アレイさんは無愛想に頷いた。

「これからお前は軍の前で紹介されるのだったな。その後だ」

「アレイさんも一緒に行くんでしょ？」

「一応出席する事になっている」

「んじゃ、一緒に行こう！」

ぱっと左手でアレイさんの手をとった。

一瞬はっとして離そうとしたが、アレイさんなら平気だ。悪魔耐性が半端じゃないから。

それに気づいて嬉しくなり、ぎゅっと手を握った。

「やめろ、恥ずかしい。ガキじゃないんだ」

「いつもガキって言うくせに」

「お前は自分の見た目を気にしなさ過ぎなんだ！」

アレイさんは嫌がったが、手を振り払う事はしなかった。

とても嬉しい。この人が隣にいてくれる事が。悪魔の気を放つ自分を何の臆面もなく晒す事のできる数少ない相手だ。

この人の手を離したくない。

そう思うようになったのはつい最近だった。自分の中の気持ちの変化に気づいて、少し考えてみたけれどすぐ分からなくなってしまうた。

一緒にいると満たされる感情はねえちゃんの隣にいたときは少し違う。

自分に分かるのはただそれだけだった。

SECT・2 サブノック

しばらくは手をつないだまま歩いてくれたのだが、廊下で炎妖玉騎士団のヒトに会った時にぱつと振り解かれてしまった。

ひどいなあと思いつつも笑顔がふんわりと優しそうな炎妖玉騎士団のヒトを見つめた。あんまり特徴のない顔だったけれど、ダイアナさんを想起させるような温かい空気はとても気に入った。

アレイさんと同じ年くらいだろう。優しそうな騎士団員さんにはこりと微笑んだ。

「ウォル先輩、そちらが新しいレメゲトンの方ですか？」

「ああ。これから軍の前でお披露目がある」

「初めまして。私はフェルメイ^{フラウス}「バグノルドと申します。炎妖玉騎士団アルマンディン部隊長と対^{アウェイク}幻想部隊『覚醒』の副隊長を兼任しています」

その優しそうなヒトは軽く礼をした。

部隊長さんということはライガさんと同じ位置にいるということ

優しそうな笑顔だけれど、とても強いヒトなんだろう。

「初めまして。レメゲトンのラック^{グリフィス}です」

にこりと笑って握手しようと手を差し出した。

が、フェルメイさんという優しそうなヒトはその手をとって軽く甲に唇で触れた。

「どうぞよろしく願います。ミス・グリフィス」

驚いて目をぱちくりさせていると、アレイさんは後ろでため息をついた。

「手の甲への口付けは敬意を表す。そのうち必要になるかも知れん、覚えておいた方がいい」

「ああ、そうなんだ。おれは握手しようと思ったんだけど」

「俺やねえさんがいる前ではフォローしてやるから構わんが、一人である時は身分の上下に気をつける。レメゲトンが下手な事をすれ

ば問題になる」

「面倒なんだね」

ひよい、と肩をすくめると、今度は目の前にいたフェルメイさんが驚いたように目を見開いた。

その様子を見てアレイさんは当たり前のように言った。

「フェルメイ、公式の場以外でこいつに敬意を払う必要はない。見た目はこうだが、分かれるとおり中身はガキだ。王都で貴族として育ったわけでもないから礼儀もない。その上鳥頭の阿呆だから苦労する事になると思うが、よろしく頼む」

「またガキつて言った!」

唇を尖らせると、アレイさんの手がぴしゃりと額に当たった。

一瞬何が起きたかわからなかった。

あれ?もしかして今おれ叩かれた?

「えええ?! アレイさん今、叩いた? おれのことぶった?」

「黙れ、うるさい、このくそガキ」

「ねえちゃんに言いつけてやる!」

「勝手にしろ。余計な事言っでないで行くぞ。遅れる」

「もう!」

優しそうなフェルメイさんにバイバイ、と手を振ると振り返してくれた。

とても微妙な表情をしていたのは気のせいなんだろうか、慣れない靴でアレイさんの早足に追いつくことのほうに必死で考える暇はなかった。

軍でのお披露目も終了し、アレイさんに連れられて外に出た。

すでに日は沈んでいて、兵士たちはそれぞれ当てられた家またはテントで就寝の準備を始めている。松明に彩られたカシオの街は不気味に静まり返っていた。

アレイさんと二人でカシオの街を通り過ぎたのだが、すれ違うヒ

トはみな自分たちに軽く礼をしていく。例外は炎妖玉騎士団長のフ
オルス^{ダイヤモンド}、バーディア卿、輝光石騎士団長のサンアンドレアス^{アンバー}、ヴァ
ルデイス卿、琥珀騎士団のクライノ^{エメラルド}、カルカリアス卿、翠光玉騎士
団長のクロム^{グリニー}卿　4人の騎士団長さんくらいのものだ
った。

改めてレメゲトンの地位を確認する。それでもライディーンが、
メルルがこの場所を欲しがった理由は今も全く理解できないのだっ
た。

到着したのはカシオの外れにある古い小屋だった。

軍が来る前、街のヒトがいた頃は剣術か何かの道場だったのだろ
う、天井は高く柱もほとんどない広い空間があるだけの粗末な小屋
だった。隅には武器と思われるものが寄せてあり、その中には木刀
や木槍の姿もあった。

「サブノック」

静まり返った道場に深いバリトンが響く。

ざわりと周囲の空気がざわめくのが感じ取れた。

ああ、今まで気づかなかったけれど、悪魔さんには特有の気配が
ある。それは召還のときだけでなくコインそのものからも発せられ
ている気だ。

一度気づくとその気配は拭おうと思っても纏わりついてきた。

視覚でも聴覚でも触覚でもない感覚で自分の中に入り込んでくる。

「珍しい者を　連れてきたな　クロウリーの若造」

その悪魔さんからは、見た目通り壮年男性の声がした。

獅子の頭を象った兜で顔は見えないが、くすんだ青のマントが揺
らめいて同じ色の胸当てと脛当てが見え隠れした。騎士の服装に近
い格好で、腰に差した剣からは禍々しい何かが漏れ出していた。

第43番目の悪魔サブノックの剣は傷口を腐らせるという。

それを思い出してぞくりとした。

「黄金獅子の末裔　グラシャ・ラボラス以外にも　多くの支持を得
ているようだ」

気難しそうではあったが、敵意の感じられない声だった。

「初めまして、サブノックさん。レメゲトンのラック・グリフィスといえます。よろしく願います」

ぺこりと頭を下げると、武器の悪魔と呼ばれるサブノックさんは静かに問いを口にした。

「何を願う 黄金獅子の末裔 最凶の名を冠す悪魔を持ちながら他に何を欲する」

「最凶の悪魔っていうのはラース……グラシャ・ラボラスのことでいいかな？」

そう言うサブノックは訝しげな声で呟いた。

「名を渡すとは どういうつもりだグラシャ・ラボラス」

「おれには分からないよ。契約の事は覚えていないんだ」

真直ぐにサブノックさんを見た。

この人の瞳はどんな色をしているんだろう。どんな表情で言葉を紡いでいるんだろう。

「ラースは確かに強い。でも、攻撃したいものもおれの大切なものも区別なく破壊してしまうよ。だからおれは自分の力を使いたい。自分の手で大切なヒトを守りたいよ」

アガレスさんもフラウロスさんも、頼めばいくらでも力を貸してくれる。それはとても嬉しい事だけれど、少し怖い事でもあった。

あれは自分自身から湧き出る力ではない。

「悪魔さんの力を借りるだけじゃなくて、自分の力を磨きたい。だから武器を取って自分を鍛える道を選ぶよ」

自分はこれまでいつだってそうしてきた。

悪魔さんたちの力を借りた事はあっても、それだけに頼ろうと思つたことは一度だってない。

「もしサブノックさんもおれに力を貸してくれるなら……」

真剣な目で目の前の悪魔さんを見た。

「おれに、武器を作ってくれないか」

その場に沈黙が訪れた。

アガレスさんと話す時もそうだけれど、悪魔さんは考えるのに黙って時間をかけるようだ。

しばらくして、サブノックさんは口を開いた。

「その先に 世界を導く事が出来るなら」

「……え？」

そして、サブノックさんの姿は闇に掻き消えた。

「あれ？ サブノックさん、帰っちゃったよ？」

「心配するな、明日には武器が出来上がる」

ずっと隣で黙っていたアレイさんが言った。

「そうなの？ あれでいいの？」

「悪魔が見るのはお前の姿形でなく魂だ。サブノックはお前の心を感じ取ったに違いない」

「へえ」

よく分からなかったけれど、アガレスさんも似たような事を言っていた。

今でも自分は3歳くらいの子に見えるんだろうか。

今度聞いてみよう。

SECT・3 告白

みな寝静まったカシオの街を通り過ぎながら、アレいさんに漆黒^{ブラック}星騎士団^{ルビ}での話をしていた。

ヴィツキーのこと、ライディーンのこと……コインを盗まれた話になると、アレいさんはきゅっと眉を寄せた。当たり前だ。レメゲトンがコインを盗られるなど、前代未聞の話だった。

ルークと、騎士団を辞めたメルルのことを思い出して胸がきゅつと締め付けられた。

「ねえ、アレいさん。レメゲトンってさ、やっぱすごいのか？ みんながなりたいて憧れるくらい？」

「そうだな、事実上王に次ぐ位だからな」

「おれやつぱりまだよくわかんないよ」

もしかすると、もしかしなくても大好きなねえちゃんやアレいさんと同じ位を持つ事が出来た自分はとても恵まれているんだろう。

そんな理不尽なもので引き裂かれることだけは避けられたから。いつものように表情に乏しいアレいさんの瞳には少し悲しそうな色が灯っていた気がした。

「でもおれはもうヒトに触れないよ。きつと……迷惑かけちゃう」ポツリとそう呟くと、アレいさんははっとしたように紫水晶^{アメジスト}の瞳を向けた。

「だっておれは生きている限り悪魔の気を発し続けるんだから」コインの埋め込まれた左手をぎゅっと握り締めた。とても辛かった。

大切なものはもうねえちゃんとアレいさんだけじゃなくなっていたから。守りたいものもたくさんに増えたから。

悪魔の気で倒れたヴィツキーの姿が瞼の裏に焼きついて離れない。立ち止まってしまった自分に続いてアレいさんも立ち止まる。

春とはいえまだ冷やりとした風が吹き抜ける夜の空気の中で、二人静かに佇んだ。

アレイさんは何も言わなかった。

ただ、握り締めていた左手に大きな手が重なった。

はっと見上げると、アレイさんはとても優しくてもどこか悲しげな瞳で見下ろしていた。そこに映された感情が何なのか、自分には分からない。

でも触れたところからとても温かで優しい心が流れ込んできた。

ふと、気づいた。

「アレイさん。もしかしてアレイさんも」

クロウリー家は悪魔の末裔なんだってライディーンが言っていた。もし本当にマルコシアスさんの子孫なら、その体には悪魔の血が流れている事になる。それはもしかするとヒトに害を与えるのではないか？

アレイさんの指がそつと唇に触れた。

まるで続きを言わせようとしなかったかのように。

そうして自分の左手を握り、また街を歩き出した。

大きな手で引かれて大きな背中を追いながら胸が熱くなるような感情に包まれた。

とても優しいヒトだからおれみたいに口に出さなくても深く深く傷ついているんだろう。その傷を誰にも見せないように表情を乏しくして生きてきたんだ。

その心と生きてきた道を思って、泣きそうになった。

このヒトはこの優しさの裏でどれだけの血を流してきたんだろう。表情を忘れるまで、どれほど傷ついてきたんだろう。

こんなにも苦しい気持ちは初めてだった。

痛い。

でもきつとアレイさんはもっと痛いはずなんだ。

自分に何ができる？

このイジワルで、底抜けに優しいヒトが少しでも痛くないように。
「傍にいて、いい？」

唐突に口から零れ落ちた言葉。

アメジスト
振り向いた紫水晶の瞳には驚きが現れていた。

「おれはアレイさんに傍にいて欲しいよ。隣で戦いたいよ」

ねえちゃんに望まれなくても自分はずっと隣にいるだろう。

でも、アレイさんには　　傍にいて欲しい、と言って欲しかった。
自分が想うように相手にも想い返して欲しいと思ったのは生まれて初めてだった。

いつから自分はこんなワガママになってしまったのだろうか。

「おれはあなたの隣にいていいのかな……？」

この感情は何だろう。胸の奥で足掻く、とてもどろどろした熱い感情。

好きとは違う、もっともつと熱くて深くて……優しい感情。

自分はこれを知っている。

ずっとずっとアレイさんが自分に向けてくれていたものだ。普段はイジワルで、思い出したように優しく包み込んでくれるこの紫の瞳のヒトが。

アメジスト
夜明けの空のような紫水晶が揺れている。

その顔はまるで泣くのを我慢しているように見えた。

「……ラック」

深いバリトンが自分の名を呼ぶだけで特別に聞こえる。

アレイさんは少し躊躇うように言った。

「俺はお前の父親にはなれない。もしそれを望むなら隣にいてやることは出来ない」

「違うよ」

言葉にするのはひどく難しかったが、伝えたかった。

心に傷をたくさん負ったこのヒトに、どれだけ自分が大切に思っているかを知って欲しかった。

「傍にいて欲しいと思うのも触れて欲しいと思うのも……こんなに

もワガママを言うのはアレイさんだけだよ」

ねえちゃんには絶対に言わない心の底まで吐露できるのも。

メルルがルークと共にいたいと思っていたように、自分はきっとアレイさんと一緒にいたいと思っている。

この感情に名前をつける術は知らなかったけれど。

アレイさんの手が頬に触れた。

「もし違うと言うのなら」

バリトンが途切れる。

そこで口を閉じたアレイさんは、なぜかとても怒っているように見えた。

「どうしたの？」

首を傾げて見上げると、アレイさんは大きなため息をついた。

「続きは、また今度だ」

「え？」

「邪魔が入った」

すると、闇の中から誰か飛び出してきた。

「ウォル先輩っ！」

その人影はそのままアレイさんに飛びついた。

ぴょんぴょん跳ねた茶髪の、とても大きなヒトだった。身長はア

レイさんと同じくらいある。衣装からして炎妖玉騎士団のヒトらしかった。きつと年は自分と同じくらいだ。

「離れる、ルーパス」

アレイさんはその大きなヒトを引き剥がして、大きくため息をついた。

「邪魔しやがって」

「邪魔でした？」

「当たり前だ！」

アレイさんの頬は怒りのせいかわかに上気していた。

しかし、この大きな犬みたいなヒトは一体誰なんだろう。

「ねえ、アレイさん。このヒト、誰？」

「こいつは対 幻想部隊『フラウス覚醒』のメンバーの一人、ループスだ」

ループスというヒトは、獵犬みたいな目をきつとこっちに向けた。もしかして睨まれた？

「ウォル先輩は渡さん！」

「??」

いったいループスは何が言いたいんだろう。

アレイさんの答えも聞きたかったし自分の中の感情も分析したかったんだけど、一瞬で全部吹き飛んでしまった。

「ウォル先輩ってアレイさんのこと？ 渡さんって、別にアレイさんはお前のものじゃないんだろ？」

なぜかむかむかした。

アレイさんに抱きついた事も、まるでアレイさんを自分のもののような言い方をしたことも。

「うるさい！ これ誰なんすか。騎士にも見えないし、やたら先輩になれなれしいし……」

「お前は今日のお披露目にいなかったのか？ こいつは新しくレメゲトンとしてやってきたラック・グリフィスだ」

ため息をつかんばかりの勢いでアレイさんが言つと、ループスは目をぱちくりとさせた後さつと青ざめた。

「不敬罪は勘弁してやる。どうせこのくそガキもそんな事など気にしていない」

「えと、ループスだっけ？ おれはラック。よろしくな！」

にこつと笑って手を差し出すと、ループスは膝について頭を深く下げた。

「失礼しました！ ご無礼をお許しください！」

どうしようか困ってアレイさんのほうを向くと、紫の瞳の彼はもう一度大きくため息をついた。

SECT・4 恋・愛

次の日の朝になって自分の手元に届けられたのは、これまで使っていた小太刀よりさらに一回り小さい短剣に近い形状の刃物が二本だった。ナイフより刃渡りはあるが片刃で、刀身は真直ぐ。柄の先には殴打に耐えるよう金属の半球がついている。

持ち手に刻まれた悪魔紋章はサブノックのものだった。

「ふふ、なるほどね。最初に覚えたのが短剣を使う戦闘だってこと、サブノックにはお見通しなのかしらね」

ねえちゃんに見せると、そう言って笑った。

カシオの中でも中心部にある屋敷がレメゲトン用としてあてがわれていた。ねえちゃんの屋敷とは比べ物にならないが部屋数はかなり多く、食事用の大きなテーブルのある部屋を会議用に使っていた。会議用の部屋で炎妖玉騎士団のヒトが準備してくれた朝食をいただいた後だった。

今しがた貰った武器をしげしげと見つめる自分にねえちゃんは言う。

「両手で使いなさい。あなたの素早さとフラウロスの炎があればかなり強力な武器になるはずよ」

「おれ、でも左手で武器を使うのはあんまり慣れてないんだ」
するとアレイさんがぼそりと言った。

「後で空いた時間に稽古を付けてやろう。戦闘の事ならマルコシアスにも聞くといい」

「ありがとう！」

マルコシアスさんに会うのも久しぶりだ。
とても楽しみだった。

「この後はすぐ会議になります。トロメオ奪還計画についてヴァルデイス卿から提案があるとのことですよ」

ベアトリーチェさんが言うのと、ねえちゃんはあからさまに不機嫌

な顔をした。

「あの人の提案はいつもロクなもんじゃないわ……でも、仕方ない行きましょう」

騎士団長とレメゲトンの間で行われる会議を行う部屋には、大きな円卓が用意されていた。他のメンバーは既に揃っている。

慌てて席に着くと、資料を手にした司会役のフェルメイさんにこりと笑った。

「それではあまり時間ありませんのでこのまま始めさせていただきます。まず、ヴァルデイス卿から提案があるとのことなのでお願いします」

フェルメイの言葉でダイヤモンド輝光石騎士団長サンアンドレアス「ヴァルデイス卿が立ち上がった。

「既に決定しているトロメオの奪還作戦だが、レメゲトンの人数も増えた事で、ぜひ一部改定を申し出たい」

厳格そうな声に圧倒された。

ヴァルデイス卿はぐると自分たちを見渡して言った。

「レメゲトンの方々には門を開いてもらいたい」

「……どうということかしら」

「トロメオは城塞都市だ。堀を越えるのは得策ではない。だからその人知を超える力で持ってトロメオの門を開き、軍を城内に導きいれてもらいたいのだ」

鋭い眼光にびくりとした。

「今回トロメオが陥落した裏には敵国のセフィラが大きく関与しているという。それならば、もう一度取り戻すためにレメゲトンの力を使うのは道理」

「お言葉ですがヴァルデイス卿、開門は内部に忍ばせた密偵が行う予定では？」

フェルメイが慌てて止める。

提案の内容は聞かされていなかったらしく、狼狽した様子があり

ありと見てとれた。

「強大な力を持つているのだ、彼らに託した方が確実だろう」

「……ヴァルデイス卿、紛れ込ませた密偵に何か起きたのですか？」
ねえちゃんの押し殺した声が響いた。

裏から怒りが漏れ出している　怖い。

「報告を怠らないでください。些細な事が崩壊のきっかけになるのですよ」

一切の妥協を認めないきっぱりとした口調でヴァルデイス卿を追い詰める。

卿は息をつくとぶつきらばうな口調で言った。

「密偵が一人捕まった。今下手な動きを取らせれば全員が捕虜になる危険がある」

「……っ！　そんな重要な事を今まで隠していたのですか！」

フェルメイが言葉を失った。

話に入らず、呆然と目の前で繰り広げられる言葉の合戦に見入っていた。

「みな落ち着け！」

フォルス団長の一喝でようやくその場が落ち着いた。

ねえちゃんは席をがたりと立ち、吐き捨てるように言った。

「なんとか方法を検討してみます。今日はこれで失礼するわ」

「そ、それでは今日はこれで……」

フェルメイが慌てて閉会を告げ、不機嫌なねえちゃんに続いて自分分は部屋を出た。

「ああもう！　信じらんないっ！」

ねえちゃんが怒っている。

当てられた屋敷のダイニングで眉をしかめてソファに座ったねえちゃんは、それでも考えているようだった。

自分たちの力でトロメオの門を開ける方法はないか、と。

開けるだけなら簡単だ。開戦前に飛んでいって、開門し、そのま

ま逃げればいい。しかしそれでは軍が到着する前に門を閉められてしまっただろう。

戦が始まってからでも同じことで、結局は軍が門まで辿りつかなければ全く意味がないのだった。

その上セフィラを相手にしなくてはいけない。

手が足りない。

人数的に後れをとっているレメゲトンの最大の弱点だった。

「私が戦えたらよかったのですが」

ベアトリーチェさんが困ったように微笑む。

「そんなことないわ、アリギエリ女爵。あなたが後方で控えていてくれるから私たちも全力で戦えるのよ」

「しかし本当に、もう一人いれば何とかなるんだがな」

もう一人いないことはない。

遠く離れた王都に、最近レメゲトンに就任した少年騎士がいる。

が、距離的に時間的に、彼を呼び寄せるのは不可能だった。

「んじゃあやつぱり、倒すしかないんじゃないかなあ？」

人数が足りないのならば。

「自分たちを増やすのが無理なら、向こうを減らせばいいよ」

「まあ、要するに……そういうことなのよね」

ねえちゃんは軽く息を吐いた。

「んじゃ、そういうことで。自分に割り当てられた敵を可及的速やかに倒す事。倒し次第トロメオの門を開く事 作戦は、以上！」

なんとも明快な作戦会議を終えて、ねえちゃんはソファから立ち上がった。

「なんかむしゃくしゃするわ。外で体動かしてくるわね」

颯爽と去っていったねえちゃんの後姿を見送って、続いて同じような理由で出て行くアレイさんの腰まであるストレートの黒髪を見送った。

「どうか、されましたか？」

ベアトリーチェさんの声ではつとする。

どうやらぼんやりとアレイさんの後姿を追っていたようだ。

「あ、うん、いや、そのね……」

少し迷ったけれど、ベアトリーチェさんに訊ねてみる事にした。

この間から胸の奥で燻っている気持ちの正体。

「ええと、うまく話せないかもしれないんだけどね」

前置きして、少しずつ話し始めた。

共にあることを願ったルークとメルルのこと、アレイさんの優しさとその裏で傷ついていると気づいた時の気持ち。

もう傷ついてほしくなくて、少しでも痛くないように一緒にいたくて、でもアレイさんは自分と一緒にいたいと思ってくれているのか分からない。

それがとてももどかしい。もし一緒にいたいわけじゃないといわれたら

「おれ、すごく……泣くと思う」

拒絶される事が怖かった。嫌われるのがねえちゃんの比でなくらいに恐ろしかった。

ベアトリーチェさんは優しく微笑んだ。

「そうですね、ミス・グリフィス。『愛』という言葉をご存知ですか？」

「うん。すごくすごく好きだってことだね」

「はい。でも、『愛』には二種類あるんです。一つ目は自分が勝手に相手を想う気持ちです。おそらくあなたがファウスト女伯爵に対して抱くのはそんな気持ちでしょう。傍にいたとしても安心します」

「もう一つは？」

「自分が相手を想うのと同時に、相手にも思い返して欲しいと願う気持ちです」

「あつ……」

とても素直に納得できる感情だった。

「こちらはとても複雑で、傍にいたいのに隣にいと落ち着かなか

ったり、触れたいのに触れられるとドキドキしたり、大変なんですよ」

ベアトリーチェさんの言う事がびっくりするくらいに理解できた。

「人はそれを『恋』と呼びます」

「『コイ』……」

自分はようやく芽生えた感情に名前をつけた。

「お相手はクロウリー伯爵ですか？」

「うん」

少し頬が紅潮したのが分かる。

どうしてだろう。少し、恥ずかしい感じがした。

「きつとあの方もあなたのことをとても大切に想っていますよ」

「ほんとかな？」

「機会があつたら聞いてもらなさい」

ベアトリーチェさんに言われてそうしようと思っていたのに、すっかりと忘れていた。何しろ新しく貰った武器を使えるようになる事に必死で、他のことを考える余裕などなかったからだ。

この先何が起こるか分からないということが分かっていたはずだったのに

- - - はじまり - - -

初めて見たときは怖そうなヒトだな、と思った。とても闇色のマントが似合うなと思っていた。まだ表情の違いを読み取れなかったから、何を考えているのかあんまり分からなかった。

でもアガレスさんと契約する時に心配してくれた。死ぬな、って言ってくれた。

ラースに左腕を喰われた時も優しく包み込んでくれた。

きつとその頃にはすでにアレイさんが特別だったんだ。

セフィラと戦闘したねえちゃんが消えた時も、ずっと傍で支えてくれた。震えるほど怖かった時も喪失感で消えそうになってしまった時も。

フラッシュバックに遭ってもアレイさんが名前を呼んでくれるだけで現実世界に帰ってこられた。

それはアレイさんがおれの新しい世界の象徴だから。

他に代わりなんていない。

傍にいて欲しいと思った。ねえちゃんの隣にいる自分の傍にずっといて欲しかった。

その時はまだ傍にいて欲しいというばかりで、自分がどうしようとも思っていなかった。

でも、今は違う。

半年以上離れて、再会した瞬間に気づいた。

アレイさんから『傍にいて欲しい』と言われたい初めての感情だった。

自分が想うように、アレイさんにも想って欲しい。

アレイさんがその優しさゆえにたくさんの傷を心に刻んできたことに気づいた時、胸が苦しくなって、その苦しみに押し出されるように傍にいていいか、と聞いた。

イジワルで、でも底抜けに優しいあのヒトの隣で少しでも傷を癒したかった。望まれて傍にいたかった。もう二度と……離れたくなかった。

でもその時は邪魔が入ってしまったって答えを聞けなかった。

ベアトリーチェさんはこの感情に『恋』という名前をつけてくれた。

もう一度聞けるだろうか。

でもそれはとても勇気のいる事だった。

だって、拒絶されてしまったらきつと自分はもう

SECT・5 果てしない不安

トロメオ奪還作戦を決行する日がやってきた。

春を少し過ぎた季節、つまり自分の一番好きな時期だ。もうアレ伊さんと会って1年が経つという事だ。早かったようなとても長かったような……不思議な感じだった。

動きやすいようにとレメゲトンの正装をやめ、着なれた服に替えた。短衣とショートパンツ、それに籠手と首から提げたコイン。髪がだいぶ伸びていて邪魔だったからねえちゃんに頼んでポニーテールに括ってもらった。

数日の特訓でかなり使えるようになった2本のショートソードを両腰に下げた。

まだフラウロスさんを召還した状態で使った事はなかったが、この2本の剣は自分の手にしっくりと馴染んでいる。

王都からずっと連れ添ってきた馬、マルコに乗って軍の中央に陣取った。

トロメオまで飛んで行ってもいいのだが、目立つ行動は避けたいとねえちゃんがいったため兵にまぎれるようにして進軍していった。東の都トロメオ「イスコキートスを実際に見るのは初めてだった。

概観は王都ユダのそれに似ている。小高い場所にある大きなお屋敷を外壁が取り巻いていた。作戦会議の時に見せてもらったトロメオの地図によると、その外を巻く壁の内側には城下町が広がっているはずだ。さらに最外郭をぐるりと堀が取り囲んでいる。

遠くからでも、堅固な要塞都市であるのは一目瞭然だった。

あの中にセフィラがいて、たくさん兵隊さんたちがいて……それを奪いに行くんだ。

トロメオ内の地図は大体頭に入っていた。密偵からの情報だとい

う兵の数やセフィラの潜伏位置も覚えていた。
でも、何だろう。

この果てしない不安感は。

「どうしたの、ラック」

ねえちゃんが優しい目を向ける。

金の瞳にどきりとした。

どうしてだろう。

体が震えそうなくらいに怖い。

「うっん、だいじょうぶだよ」

心配させたくない。そう思って笑ったけれど、たぶんねえちゃんには気づかれた。

きつと隣に並ぶ紫の瞳のヒトにも。

それでも今は先のことだけ考える。そうしなければ、あのシルクハットの^{マジシャン}手品師と対等に戦うことなど不可能だろうから。

半年以上の特訓でずいぶん強くなったのは実感している。

本当に稀にだけれど、^{ブラックルビー}漆黒星騎士団鷹部隊長のライガさんに勝てたこともある。もっとも、騎士団長のクラウドさんにはどうがんばっても一度だって勝てやしなかったけれど。

以前ゲブラと相対したときは、自分がフラウロスの加護をつけていて、かつ相手がノーマルの状態で何とか勝てた。

今回は昼間だからゲブラも峻厳の天使カマエルを召還してくるだろう。

フラウロスさんはなぜかカマエルさんを敵視しているから、もしかすると自分に加護を与える余裕などないかもしれない。

自分は加護を受けたゲブラ相手に生身で戦うことになる。

そんなこと、できるのか……？

嫌な想像を打ち払って、周囲を見た。

サブノックの武器を手にした騎士団員、^{アウェイク}『覚醒』のメンバーに護衛されるような形で馬を進めている。

隣にはねえちゃんがいる。アレイさんもいる。

これ以上何を望む？

この世界を守る、とそう決めたはずじゃないか。

強い気持ちで目の前に迫ったトロメオを見つめた。

「マルコ、ここで待つてるんだぞ」

馬を下りて横顔をなでてやると、マルコは嬉しそうに首を振った。

「その馬、マルコって言うのね」

「うん。マルコシアスさんみたいに強くて優しい子になれるように
と思って」

「いい名前ね」

ねえちゃんもマルコの鼻先に手を当てた。

少しだけ哀愁を含んだ声でふっと呟いた。

「ラックをよろしくね、マルコ」

マルコはそれを聞いて首を傾げ、ねえちゃんはもう一度微笑んだ。
何故かその姿が瞼の奥に焼きついてしまって、何度瞬きしても消
えなかった。

ねえちゃんの背に漆黒の翼が広がる。同時にアレイさんもハルフ
アスさんの加護を受けて耳に小さな羽根が生えた。

触ろうとしたら阻まれた。

非常に残念だ。

あの黒髪の間隙からのぞく羽根の手触りは極上なのに。

「さあ行きましょう、ラック」

墮天のアガレスさんは天使さんに前で召還できないから、ねえち
ゃんが使役するデカラビアさんの加護を受けた。

背にむず痒い感触があつて、視界の隅を黒い羽根が横切る。

空を飛ぶのは楽しかった。最初にアガレスさんの加護を受けて空
に飛び立った時には既にこの感覚を知っている気がしたのだ。

ポニーテールが翼に揺れる。

レメゲトンの正装である黒いマントを脱いで完全に戦闘スタイル

になった。

唯一の『覚醒』^{アウェイク} 女性騎士のアズがマントを受け取ってくれる。

「お預かりしておきます ご武運を」

「ありがとう、アズもね」

にこりと笑うと、アズも笑い返してくれた。

大きな黒い翼を一振りして、空で待つアレイさんとねえちゃんの元へ向かった。

一年のうちで一番好きな季節。

大好きな暖かで柔らかな風が耳元を駆け抜けている。新緑を含んだ匂いが胸いっぱい広がって、暖かな日差しが包み込んで、淡い青の空が周囲に広がっている。

いつも見上げていた空は、すぐ隣にいた。

城塞都市トロメオを見下ろすと、カシオで見せてもらった平面図と全く同じだった。

よく見ると城下町の建物のおちこちが焦げていたり破損しているのが分かる。

門自体もかなり破壊が進んでおり、急ごしらえで修復したのは一目瞭然だった。

「事前にたてた作戦通りよ。セフィラを一人ずつ軍から引き離してから戦うこと。マルクトが出てくるかもしれないから、トロメオ城内に入らない方がいいわ。できれば外で、集中するために地上戦に持ち込むのがベストよ」

「うん、わかった」

「とりあえず自分の相手を戦闘不能にしたら、トロメオの城門を破壊して軍に合流して。一気にトロメオを陥落するわ」

猫の眼に黄金のきらめきが灯る。

なんとかトロメオを奪還し、逃げ遅れて捕虜となった兵や備蓄されていた武器、食料などを早急に取り戻す必要があった。なにより、

城砦であるトロメオを拠点にできないでは戦局にかなりの差がでる。

首に下げた二つのコインをぎゅっと握る。

アガレスさん、フラウロスさん、それに羽根をくれたマルコシアスさんとクローセルさん。それから……滅びの悪魔と呼ばれるラーズ。

ラーズのコインは使わないつもりだった。

ミカエルさんを退けたあの時、よく自分の左腕だけですんだものだと思う。

殺戮の牙を閃かせる滅びの悪魔グラシャ・ラボラスの力はその程度のものではない。彼から受ける威圧は、他の悪魔さんたちの比ではない。地獄の業火を操り恐れられたフラウロスさんでさえラーズの前では手も足も出ないだろう。

きつと何もかもを破壊してしまうだろう。自分の大切なものも、誰かの大切なものも。

もしかすると、このトロメオをまるごと破壊する力だって持っているかもしれない。

「ラック」

ぼんやりと考えているとねえちゃんの声ではつとした。

ねえちゃんはまだでサンのように優しい笑顔で覗き込んでいた。

「大丈夫よ、あなたは強い子だわ。きつと大切なものを自分の手で守る力を持っている」

白くて細い指で頬を撫でて、ゆっくりと頭に手を置いた。

「でも、忘れないで。私はあなたをずっと近くで守る。辛いときは言いなさい。あなたが望む限りずっと助けるわ」

その笑顔は何故か胸の奥底を締め付けた。

「心配しないで。ここには私もアレイもいるのよ」

最後にもう一度ぼん、と頭に手を置いてねえちゃんはトロメオを指差した。

「行きましょう。グリモワール王国の、未来のために」

城塞都市トロメオからは整列したセフィロト軍が進軍してくるところだった。

セフィラから加護を引き剥がすには体のどこかにある印を消すしかない。炎で焼き付けて消すか、最悪その部分を体から切り離せ、といわれた。

もしアガレスさんの加護が使えたならば、千里眼ですぐに印を見つけ出せるだろう。

ほんの一瞬でいい。それは自分にとって一瞬じゃない。千里眼発動中は時間の流れがひどく遅くなる。他の人にとっては一瞬でも自分にとっては長い時間だった。

少しの間だけでいい、天使の加護を消す事が出来たなら。「デカラビアはフラウロスと共存できないかもしれないわ。フラウロスを召還するときは気をつけて」

ねえちゃんが緊張を含んだ声で言った時だった。トロメオから関の声が上がった。

SECT・6 風燕

戦争の空気に圧倒された。

地響きをたつてながら2国の軍が進んでいく。多くの矢が乱れ飛び、ぶつかった兵団は怒号と悲鳴を交えながら打ち合い始めた。

金属音と何を言っているかわからない人々の声が空高くある自分たちのもとにまで届く。

背筋がぞくぞくした。

震えるような戦場の大気は見たこともないほどに凄惨で激しかった。

思わず震えた肩を両手で抱く。

「う……わ……」

これが戦争。

王都にいる限りは感じる事などなかった激動の震え。

大気全体が悲鳴を上げている。

大地がうなりをあげているようだ。

硬直して動かなくなった肩に温かい手が触れた。

「行くぞ」

アメジスト

見上げた紫水晶には強い光が灯っていた。

こくりと頷いてトロメオに向かって飛んだ。

下に広がる戦闘場面から目を逸らしながら真直ぐに向かう先はトロメオの城門。

ここを破壊しようとするれば、確実にセフィラが止めに出てくると踏んでの事だった。

「下がれ」

アレイさんに言われて少し退くと、彼は両手を城門に向けた。

「ハルファス！」

「ひひ！ あれ壊していいんだな！」

ハルファスさんのものと思われる甲高い声がして、周囲の空気が渦巻いた。

その渦は空を裂くかまいたちとなって真直ぐ城門へと向かう。が、それは横から飛んできた炎の塊と相殺されて消え去った。

「来たわね」

炎の主は言わずと知れた手品師^{マジシャン}ゲブラ。

その瞬間、フラウロスさんのコインが熱くなる。

「まずはおれからだ！」

両腰のショートソードを抜き放ってゲブラに飛び掛っていった。

空を飛び始めてからそれほど経っていないのだが、なぜか地上よりもずっとスムーズに動けた。まるで最初から自分には羽根が生えていたかのように。

空中戦では小柄な体が地上の数倍生かせる。さらにそこに速度を加えればその効果は計り知れない。

数日前、自分が空中でアレイさんと打ち合うのを見たマルコシアスさんは、こう言った。

^{ケリドーン}
「燕だ　空を裂き　舞う　鋭い風」

燕は夏の間この地方で過ごし、冬になるともつと暖かい地域へと移動する渡り鳥だ。空を飛ぶ姿は吹き抜ける一陣の風にもたとえられる小柄な鳥だった。

そしてマルコシアスさんは、悪魔の加護を受け空中で戦う自分の姿に名前をつけてくれた。

カマエルの加護を受けているはずのゲブラを、トロメオから遠ざけるようにして押していく止む事のない怒涛の攻撃。ゲブラはステッキ一つで対応しているが、まだ炎は使ってこなかった。

「ずいぶん強くなりましたね」

一旦距離をとると、ゲブラはにこりと微笑んだ。

「最後に会ってからどれだけ経つてると思うてるんだ。おれだって

強くなるさ！」

「しかし本当に素晴らしい成長です」

息一つ乱していないゲブラは、それでも額にうつすらと汗をかいていた。

それ以外ほとんど余裕に見えるのはこの行動と表情だけか？それとも本当に何か奥の手を隠し持っているのか？

両手にショートソードを逆手に構えてゲブラを睨みつけた。

ちらりと確認すると、トロメオからはずいぶん離れたようだった。地上に兵の姿もまばらなこのあたりならもういいだろう。そう思っ

て少しずつ高度を下げていく。

フラウロスさんのコインはすでに燃えるように熱くなっていた。

「おや、空中戦の方が得意そうですが、わざわざ地上に降りるので
すか？」

「仕方ないじゃん、お前のせいでアグレスさんを召還できないんだから。デカラビアさんとフラウロスさんは一緒に召還しちゃだめつ
て言われたよ」

「それは失礼しました」

ゲブラはさもおかしそうにくすくすと笑った。

どうやら自分に付き合ってくれる気らしい。高度を下げ始めた自分に従うようにして地上に向かって降下し始めた。

とん、と地面に足がついた瞬間、背の翼が消え去る。

同時に悪魔の加護による身体能力の向上も消えうせた。

代わりの悪魔を召還しなくてはいけない。

「……フラウロスさん、力を貸して」

小さく呟くと、爆発するエネルギーが自分のうちに燃え滾った。

「カマエル カマエル カマエル」

「う……っ」

フラウロスさんの声が頭の中でがんがん響いている。

激しい闘争本能がむき出しになって、自分の内側を焼いていく。

「フラウロスさんはカマエルさんと戦いたいんだね……」

「カマエル 倒す」

「いいよ、でも少しだけ力を借りるよ？」

そう言った瞬間、自分の中から灼熱の獣が飛び出していった。

ゲブラのほうからも鏡のようにそっくりなオレンジの毛並みの豹が飛び出してくる。

二体の獣は取っ組み合って鋭い牙と爪で互いを傷つけ始めた。

その迫力は並ではない。

先ほど上空から見下ろした何万もの兵の衝突に負けぬ勢いで組み合い、そこから灼熱の炎が噴出している。クローセルさんの羽根がなかったら、すでにここにいるだけで大火傷していたことだろう。フラウロスさんが出て行った後も全身を支配する加護を確認し、もう一度ゲブラに向かって構えなおした。

「もう空中では戦わないのですか？ とても美しい型だったのに」

「……あれは『風燕』^{ふうえん} っていうんだ。おれの持つてるコインの中ではアガレスさんの加護がないとできない」

もっとも、膜翼を持つラーズの加護があれば出来るかもしれないが。

^{ウェントス・ケリドーン}

「ふふ、風燕ですか。良い名です」

当たり前だ。マルコシアスさんがつけてくれた名なんだから。

ゲブラももう一度ステッキをこちらに向けた。

ここからは手加減なしだ。先ほどのように方向を誘導する戦いでなく、今度は相手を完全に地面に沈めるために打ちかかる気だった。

ショートソードを持つ両手に力を込める。

ゲブラから打ちかかってくる気配はない。

ならばこちらから打って出るまでだ。

「行くぞ！」

細身の手品師に向かって、地を蹴った。

アガレスさんの加護で使えるようになる千里眼とまではいかない

が、フラウロスさんの加護を受けた感覚は最大限に開かれていた。相変わらず灼熱の空気を撒き散らしながら吼える2頭の豹から焼け付く熱さを感じる。

それでもゲブラの振り下ろすステッキの切っ先はよく見えたし、そのステッキが炎をまとうのも見えた。

千里眼なしでもそれなりに戦えることを確信する。

内側から燃え上がるような感覚に任せてゲブラの間合いに一気に飛び込む。

突き出す一撃はステッキで抑えられ、反対側から放った打撃は体勢を低くする事でかわされた。

さらにそこへ炎を纏った蹴りをお見舞いする。

「くっ……」

初めてゲブラから苦しそうな声が漏れた。

そのまま背を向けるように回転し、その遠心力でさらに蹴りを放った。

すれすれでかわしたゲブラは両手から炎球をいくつもこちらに飛ばす。

これは避けるしかないか、と思った瞬間、左手の籠手から光が漏れた。

その光を纏ったショートソードは、難なくその炎球を叩き落した。マルコシアスさんの羽根の加護だ。自分はある褐色の肌の戦士から思った以上に強い加護を受けているらしい。

また次に会った時にお礼を言わなくちゃいけないな。

「信じられませんね。いったい何人の悪魔の加護を受けているんですか」

ゲブラが困ったように笑う。

「おれはミジクモノだからみんなに助けてもらうんだ。アガレスさんにも、フラウロスさんにも、マルコシアスさんもクロールセルさんもサブノックさんも……おれは、自分一人で戦ってるわけじゃないんだ」

そう。それこそ自分が強くなれる理由だと信じている。

守りたい大切なものがある。それを助けてくれるヒトたちがいる

その世界を傷つけることは絶対に許さない。

自分ひとりじゃ無理な事はわかっている。

大切なものを守るのに、この手は小さすぎるから。

それでも。少しでも一緒に戦ってくれるヒトがいれば。

自分をレメゲトンにしてくれた王様。いつも逃げ道を作って待ってくれているサン。後方で支援してくれるベアトリーチェさん。剣術、馬術、体術にいたるまで様々な事を教えてくれた漆黒星騎士団のヒトたち。
ブラックルビー

そして誰より、肩を並べて戦うねえちゃんとアレイさん。

一人だって欠けたらおれの世界は成立しないんだ。

「絶対におまえなんかには負けない。グリモワールのヒトたちを傷つけるのだって許さない！」

SECT・7 ロストコイン

ゲブラはそれを聞いて微笑んだ。

「では、貴方と同じ理由で僕がセフィロトに帰依するとしたら、貴方はその場を退いてくれるのですか？」

同じ理由　つまり、セフィロト国に大切なヒトがいるって言う事。守りたい世界があるっていうこと。

きつとそうだろう。先ほどから少し離れた場所で打ち合う兵士さんたち一人一人にだって大切なものがあって、守りたいものがあるはずだ。

悲しい別れをどこかで経てきたはずだ。

でも、この場は退けなかった。

「ここをどいたらおまえはおれの大切なものを傷つけるだろう」

武器を構えたままで首を横に振る。

「でも、おれだって戦いたいわけじゃない。おまえが退けばおれは追わない」

それはずっと思っていたことだった。

セフィロト国さえ退けば、誰も傷つかずに済むのに。相手の国の兵隊さんたちだって怪我をしたり死んじやったりする事なんてないはずなのに。

どうして誰も望んでいないのに戦争なんて起こるんだろう？

「ねえ、ゲブラ。なんで戦争って起こるのかな？」

頭の中に浮かんだまま質問した。

アレイさんかヴィッキーがいたら「敵に聞くことじゃない！」って怒られたかもしれない。

しかしゲブラは唇の端で笑って答えてくれた。

「貴方に大切なものがあるように、僕にも大切にすべきものがあるのですよ。もしそれがぶつかり合うものだとしたら……どちらかが大切なものを諦めるしかないでしょう。それができないときは……」

両立できないものはぶつかるしかない。

どちらかをこの世界に残すため、つぶしあい戦いあうしかない。

自分の大切なものと、相手の大切なものが両方存在する事はできないんだろうか。

隣でいまでも激闘を続けるフラウロスさんとカマエルさんも、二人とも一緒に生きていく事はできないんだろうか。分かり合って譲り合うことはできないんだろうか。

きゅっと胸が締め付けられる。

二つある同じ魂は共に存在できず、互いが互いを滅ぼそうとするんだと言っていた。

グリモワール王国とセフィロト国もそうなんだろうか？

とても悲しい気持ちを抱えたまま、口を開いた。

「んじゃあさ、これは誰の『大切』なの？ グリモワール国に攻め入って手に入るものを大切に思ってるのは誰？」

少なくともゲブラではないだろうな、と思った。

このヒトはそんなものに興味なさそうだ。

「セフィロト国の王様？ それとも……」

「ふふ、それは僕の口からはつきりとは言えませぬね。ただ、まだ貴方が会ったことのない相手であると言っておきましょう」

「そう」

きつとこれ以上の問答は無意味だ。

自分とゲブラの求めるものは正反対で、それはどちらかしか通らない。

「じゃあやっぱり戦って決めよう。おれは絶対……負けたくない」

「そうですか」

ゲブラは複雑そうだった。

どうしたんだろう。

もともとこのヒトはセフィラの中でもあんまり本気で戦おうとはしていなかった。戦闘意欲剥き出しだった銀髪のヒトやネツアクとは違って、戦う限りにおいて自分が傷つけられた事は一度もな

いのだ。

ひよっとすると戦いたくはないのか？興味がないのではなく、戦いたくないというのか。

ならば、なぜこのヒトはこんなところにいるんだ？余裕なのではなく本気で戦う気がないのだとしたら、どうしてここで自分と剣を交える必要があるんだ？

「気づいてはいけませんよ」

手品師は困ったように笑った。

気づく？何に？ずっと本気で戦わなかったことに？それとも……

「あ」

思わず間抜けな声が出た。

気づくな、と言った内容があまりに意外だったからだ。

ぴりりと感覚の中に入り込んでくる意識。視覚とも聴覚とも触覚とも違う感覚で感じ取ったそれには嫌と言っほほどに覚えがあった。

気づいてしまった。

もしかしたら気づいてはいけなかったことに。

「ゲブラおまえ……」

「気づいてはいけない、と言ったのに。困った子ですね」
困惑した。

どうしておまえが。

なぜ。

天使の加護を持ちながら

「おまえ、悪魔のコイン持ってるだろ」

悪魔の方が気配を殺していたせいなのか、これまで気づけなかった。

ゲブラは答えなかった。

でもその沈黙は何より雄弁な答えだった。

「何で？ だっておまえはセフィロト国のセフィラで、おれたちの敵なんだろ？ それなのにコイン持ってるのか？」

聞きたい事が多過ぎた。

何も分からない。

どうして天使の加護を持つこの男がコインを持っているのか。どこで手に入れたのか。何のコインなのか。コインを持つ事と自分に対して本気を出さない事に何か関係はあるのか？

「困りましたね」

それでもシルクハットの下の顔に笑みを湛えながら、手品師は肩をすくめた。

頭の中が混乱している。

そう考えてみると、この手品師はこれまで天使の加護では説明のつかない能力を使ってきた。

太陽が出ていない夜にもかかわらず空間移動をしたり、天使の加護がない状態でフラウロスさんの炎を受けてもすぐにダメージから回復したり……

「どこでコインを手に入れたんだ？」

「拾ったんですよ。契約も僕一人で行いました」

「セフィロト国で？」

「ええ、そうです」

コインの中には国外へ流出したものもある、とねえちゃんは言っていた。

そのうちの一つなのかもしれない。

「じゃあ、おまえがずっと本気で戦わないのもそのせいなのか？もしかしておまえ、グリモワールの味方なのか？」

「違いますよ。僕はセフィロト国のセフィラです。だから、簡単にこの場を明け渡すと面倒なんですよ。せめて苦戦して逃げ帰った事にしないと」

この手品師のセフィロト国における立ち位置は分からないが、どうやら心から従っているわけではないらしい。

いったい自分はもうどうしたらいいんだろう？

戦いたくないヒト相手に、戦いを仕掛ける？

いや、それではセフィロト国がやっていることと同じだ。戦う気

のない相手にけんかを吹っかけるのはそもそもおかしい。

争わなくてもいいならそれに越した事はない。

そう思っ^てふつとショートソードを下げた。

「本当に困った子ですね」

ゲブラから殺気は感じられない。闘気も収束してしまった。

その場をフラウロスさんとカマエルさんが争う熱風と大気の震えだけが支配していた。

フラウロスさん以外にも感じ取れる悪魔の気配。

一度気づいてしまうとその気配は拭えず、感覚の中に勝手に入り込んできた。

「戦いを望まないところも君主に似たんでしょうか」

その気配を集中して追っていくと、ゲブラの背後にカマエルさんとは違う影がゆらめいているのが見えた。気配を最大限に抑えているようだが、凄まじい力を持つ悪魔だということはすぐにわかる。

これまで会った中でも最高位に近いはずだ。

なぜこれまで気づかなかったんだろう。

吹き荒れる熱風の中で、手品師の姿をじっと見つめた。

もしかして、このヒトと仲良くなれるかもしれない。

先ほどまで剣を交えていた相手だけれど、戦いたくないのならきつと分かってくれるはずだ。

争わず、傷つけあわず、共にある事ができるなら

そう思っ^て口を開こうとしたとき、すぐ傍に炎の竜巻が出現した。

SECT・8 天使消失

はっとしてその方向を見ると、これまでの比でない炎が天高く渦巻いていた。

「フラウロスさん！」

二体の獣の姿が確認できない。

クローセルさんの加護を受けていても目を開けていられないくらいに凄まじい熱風がその中心から吹き付けていた。

フラウロスさんが操る地獄の業火と、カマエルさんが使う天界の輝炎は互いを消しあうように絡み合い、ぶつかり、そして消えていく。

周囲の地面も草木も、何もかもを蒸発させる紅蓮は留まるところを知らなかった。

竜巻のような炎の柱となった絡まりあう二色の炎は全てを燃やし尽くしながら暴れまわっている。

このままでは一般兵にまで被害が及んでしまう！

目の前にいたゲブラのことも忘れ、炎の中心に向かって駆け出した。

が、すぐに後ろから引きとめられる。

手を掴んだ主を振り返ると、それは敵国セフィロトの神官だった。

「悪魔の加護を幾つも持っていたとしても、無事ではすみません。やめなさい」

「……なんでおまえが止めるんだよ！！」

思わず叫んでいた。

左手を掴むセフィラを睨みつけ、振りほどこうと腕を引いたが、びくともしなかった。

「おまえは敵なんだろう！グリモワールに侵入してきたんだろう？ おれを倒しに来たんじゃないのか？！」

いつたいこのセフィラが何を考えているのか分からずに苛々して

いた。

ゲブラがたまに見せる哀愁を帯びた表情や自分に向ける心配そうな表情がさらにそれを加速させている。何がなんだか分からなかった。

戦いたくないのか戦わされているのか、誰の意思なのか。このヒトは何を考えているのか。

戦いたくないならどうして敵として自分の前に立ちはだかったりしたのか。

「天使の加護があるのに悪魔と契約なんて、できるはずないだろう！ 一人で契約なんてできるはずないだろうが！ 嘘つくなよ！」
明らかにおかしかった。じい様が管理する予備資料なしに悪魔と契約するなんて自殺行為だ。それは実際に契約した自分にだってよく分かっていいる。

厳しい口調で問い詰めたが、ゲブラはやはり困ったように微笑むだけだった。

どうしてそんなに困った顔をするんだ。その裏に哀愁を秘めながら。慈愛の心を向けながら……

「おまえは」
ネブカドネツアル王の意思でなく。総指揮官マルクトの意思でもなく。

このゲブラ本人の意思が聞きたかった。

手品師にも傷を隠す習性があるように思えたから ああ紫の瞳を持つ底抜けに優しいヒトが傷を負った心を奥底に隠しているように。

だからこそ聞きたかった。

「何を求めているんだ……？」

熱風の吹き荒れる空間で、その言葉はやけに響いた気がする。

顔も手も加護を突き抜けて焼けてきた。

じりじりと痛みが広がっていたが、ただゲブラの目だけを見つめていた。

「僕が望むのは世界の安定だけです」

「世界の安定って何だよ！ アガレスさんもおまえも何言ってるのかわかんないよ！ おれは馬鹿だからもつとわかりやすく言えよ！」
自分にとって世界の安定とはねえちゃんやアレイさん、それにじい様やクラウドさんたちと過ごす日常を指している。

この手品師の言う世界の安定が自分の考えるそれとは全く異なるものだという事しかわからなかった。

「おれの大切なものを傷つけるわけじゃないならおれだっておまえの願う事を叶えてやりたいよ！ でも、おまえが何を望んでるのかわかんないんだよ……！」

叫びながら悲しくなってきた。

じわりと目の端ににじんだ涙は、ありえない熱でもって消し飛んだ。

息を吸い込んだ喉が、肺が焼けるように熱い。

「もつとわかりやすく言えよ！」

捕らえられた左腕が震えた。

痛いのか悲しいのか怒っているのか、もう自分にも分からなかった。

どうしてこんなに悔しいと感じるのかも分からなかった。

「貴方はとても優しい女性ですね。誰にでも分け隔てなくその施しを与えようとする。だからこんなに多くの悪魔を惹きつける」

ゲブラはふっと俯いた。

「コインの悪魔たちも、クロウリー伯爵も僕も……みな、その心に惹かれました。きつと、魔界の長でさえも」

「魔界の長？ リュシフェルさんのこと？」

王様に二度と口にしてはいけないと言われていたのに、驚きに思わず口をついた。

「もう気づいているでしょう、貴方の中に眠る悪魔に。魔界を創造し、統べる主がいることに」

「おまえは知ってるのか？ おれの中にいるヒトのこと」

「ええ、よく知っていますよ。僕の中にいる悪魔もまた忠誠を誓った一人です」

どきりとした。

「古の天文学者ゲーティア・グリフィスは魔界の王リュシフェルを召還し、力を借りました。それと引き換えに、とある約束をしたんです」

「約束？」

「ええ。いつか子孫を一人、リュシフェルに差し出すと」
「！」

思わず息を呑んだ。

自分の夢の中、贄として魔方阵の中央に引き出された自分の姿。召還された壮麗な悪魔。銀髪、彫刻のように整った顔立ち、そして

フラッシュバックに襲われそうになったが、フラウロスさんとカマエルさんの放つ熱風がかるうじて意識を現実に繋ぎとめた。

しかし、ちりちりと焦げていく皮膚の感触はもう痛みすら伴わなくなってきた。

「そして4年前、約束どおり『ルシファ』の名を持つ少女を魔界の王に差し出したのです」

「それが、おれ？」

ポツリと呟くと、ゲブラは唇の端で微かに笑んだ。

どうしてこのセフィラはこんな事を知っているのだろう。

過去なんて自分の夢の中にしか存在しないと思っていたのに。

「召還は成功し、古の約束通りリュシフェルは子孫の体を手に入れました。それが貴方の過去の真実です」

「……どうしてそんな事を教えてくれるんだ？」

不思議だった。

さっきまで敵だったのに。いや、構えを解いたのは自分の方が先だったけれど。

過去について聞いたわけではないのに。だって、まさかこのセフ

イラが知っていようとは思いませんでしたから。

「そんな気分だったんですよ」

そう言ったゲブラは自分と目を合わせないままにぱっと左手を離してくれた。

開放されたけれど、このヒトから逃げようとも思わなかった。

足が動かなかった。

「さあ、もう終わりです。さよならの時間ですよ、ミス・グリフィス」

「……え？」

素っ頓狂な声が出た。

その瞬間だった。

炎の柱が凄まじい勢いで暴発した。

これまでと比べ物にならない衝撃に、とっさに地面に身を伏せた。左手の籠手から飛び出した光が自分を覆ったが、ほとんど効果がなかった。クローセルさんの羽根もとつくに焼きついてしまったかもしれない。

すべての衝撃が背の上を過ぎ去った後、おそろおそろ顔を上げた。

目に入っただのは一面の焼け野原だった。

ゆっくり立ち上がると、灼熱の獣が一体視界に入ってきた。

「フラウロス、さん？」

疑問形になってしまったのは、目の前の獣の持つ雰囲気さつきと全く別のものになっていたからだ。

声に反応してこちらに視線をやった獣は、ヒトが怯える地獄の業火でも天界の輝炎でもなく、冷たいほどに青白く昇華した灼熱を超えた温度の炎を纏っていたのだ。

フラウロスさんともカマエルさんとも違う炎を纏った妖炎の豹がいったいどちらなのか一瞬では判断できなかった。

そう、まるでミカエルさんを召還した銀髪のヒトがいったいどちらなのか見分けられないように。

「……カマエルさんは？」

灼熱を超えた炎を纏う獣に恐る恐る声をかけた。

妖炎の瞳がこちらに向けられた瞬間足がすくんだ。

「消滅」

地獄から響いてきたその声に、全身に冷水を浴びたような冷やかさを感じて震え上がる。

これまでのように暴れだしそんなエネルギーをぶつけられた恐怖ではない。もつと奥底に凄まじい力を秘めた得体の知れぬものへの畏怖だ。

カマエルさんは、フラウロスさんのいうとおり戦いに敗れ消滅したのだろうか。

しかし、消滅というよりはフラウロスさんに吸収された、というのが正しそうだ。

二人分の力を得た獣がぐるる、と低く唸る。

「行こう、フラウロスさん。門を破壊しなくちゃ」

まだこの灼熱の獣が自分の言うことを聞いてくれる保証は無かった。

それでも青白いオーラを纏ったオレンジの豹は、素直に自分の下へと帰したのだった。

SECT・9 世界の崩壊

戦場を見渡したが、あたりにゲブラの姿もない。もうどこかへ逃げてしまったんだろうか。

結局あの手品師^{マジシャン}の望む事は分からずじまいだった。

もっと話してみたかった。

それでも、迷っている暇はない。感傷に浸っている場合でもない。前に進まなくては。

自分の中のリュシフェルさんのことも、ゲブラの行く末も、カマエルさんが本当に消滅したのかも……たくさん気になったけれど、いまはそれよりやらなくてはいけない事がある。

カマエルさんとの戦いで疲労したはずのフラウロスさんを魔界に帰し、アガレスさんを召還した。

「凄惨な闘い 二つの同じ魂は 惹かれあい 互いに滅ばしあう」
アガレスさんの声が心に染み渡った。

「もしかして滅ぼすんじゃないかって吸収したの？ フラウロスさんがすごく……強くなった気がするよ」

「こうして 闇は光を吸収し 安定へと向かう 最後に必要なのは 世界を支える柱」

アガレスさんの言う事は相変わらず良く分からなかった。

でも、疑惑も疑念も何もかも打ち払うようにしてアガレスさんの加護を受け、空に飛び立った。

飛び荒ぶ風が焼けた皮膚を撫でると、ぴりりと引きつるような痛みがはしる。炎の爆発を受けて地面に伏せたせいかな、背中 of 痛みが特にひどかった。

フラウロスさんに抱きついたときほどではないが、かなり広い範囲に軽い火傷を負っているようだ。ねえちゃんとアレイさんに怒られるかもしれない。

でも、自分の怪我は後でいい。

とにかく今できることをこなさなくてはいけない。

カマエルさんを消滅させてゲブラを撃退したはずなのに、不安だけが心を支配していた。雨空に広がる暗雲のように膨れ上がったそれは、苦しいほどに胸の中を支配していく。

心臓が脈打っている。

たいした運動をしたわけでもないのに息苦しい。

震えるほどの恐怖は、いったい自分に何を伝えようとしているんだ？

どうしてこんなに震えてしまうのか、その理由は分からなかったが、とにかくトロメオの門を破壊すべく飛び立った。

眼下の戦場では、黒旗のグリモワール軍が押している。いまトロメオの門を破壊すれば、あるいは勢いでなだれ込む事も可能かもしれない。

「フラウロスさん」

二人の悪魔の加護を受けると、さすがに内側から暴れだすような力に翻弄されそうになった。

が、それを押し留めて力をコントロールし方向を定める。

狙うのはトロメオの鉄門。

つい最近セフィロト国のセフィラの一人ケテルが吹っ飛ばしたと聞いた。そのせいか、修理の跡が色濃く残っている。さほど力を加えなくても弾き飛ばす事が可能だろう。

そのためにはまず、門の周辺にいる両軍の兵にどいてもらわなくてはいけない。

警告のために当てないようにつか炎球を飛ばそうか、と思つてよく見ると、トロメオの門の周辺は避けるようにヒトがいなかった。

なぜだろう？

アガレスさんの加護を受けて目を凝らすと、千里眼を使わなくと

もよく見えた。

中央にヒトが立っている。

白い神官服の二人はセフィラだろう。ねえちゃんが言っていたホドとケテルと思われた。

その向かい側。

「門の前で戦ってたのか」

見覚えのある黒髪。そして、ブロンド。

でも、何かがおかしい。

ねえちゃんがアレイさんの腕の中にいる。

さつと血の気が引いた。心臓が跳ね上がる。頭の中で警鐘が鳴り響いていた。

先ほどからずっと襲ってきた恐怖感。何日も前から消えなかった不安感。

だいじょうぶ、ねえちゃんは強いから

そんな言葉、いまは全く意味を成さない。

血が逆流する感覚で全身が震えた。とてもとても嫌な感じだった。フラッシュバックのときよりももっと、ずっと、ずっと。

天使に近づくとアガレスさんの加護が消滅した。落下するようにしてトロメオの門の前に着地する。

フラウロスさんの加護もかなぐり捨ててねえちゃんを抱えるアレイさんの下に駆け寄る。

「ねえちゃん！」

敵の前だと言うことも忘れて背を向け、アレイさんの腕の中をのぞいた。

蒼白な顔で息を荒くしたねえちゃんがいた。

心臓を抉り取られるような衝撃に襲われた。その様子から、命が危険にさらされていることは一目瞭然だったのだ。

「ねえちゃん！」

泣きそうな声で叫ぶと、ねえちゃんはうつすらと目を開けた。

「ラック……ゲブラは？」

「カマエルさんが消滅したよ。あとは門を破るだけだ」

「そう。よくやったわ、えらいわ……」

メゾソプラノが霞んでいく。

ねえちゃんに触れる手が震えた。

視界の隅に微かに映る赤いものは直視できなかった。

見てしまえば絶望の淵に叩き落される事はわかっていたから。

「危ないっ！」

バリトンが鋭く響いて、浮遊感が体を支配する。

強い風が自分を包んでいた。

いつも不敵に輝いていた金の瞳。美しく流れ落ちるストレートブ

ロンド。

「ラック、これを……」

ねえちゃんは5つのコインを押し付けた。

受け取れない。

受け取ってしまったらきつと

「アレイ、お願いよ。お願いだから……」

「そんなこと言わないでくれねえさん」

感情のこもったアレイさんの声が切迫した事態を知らせていた。

何も考えられなくなっていた。

ここが敵陣の真ん中だと言う事も、真後ろにセフィラが二人控えている事も。

「私はこの場を離れるわ。さあ、ラック。門を破壊しなさい。グリモワール軍を引き入れるの」

離れるわ、と言ってもねえちゃんの体はぐったりとしていて動かなかった。

不意にアレイさんの姿が消える。

でもねえちゃんと自分は強い風に守られたままだった。

金属音がする。

それが何の音か分からなかった。

ただ、地面に横たわったねえちゃんとなりに跪いてふるふると首を振った。

「ねえちゃん……やだよ、行かないで」

「駄目よ。あなたにはやる事があるでしょう？ 守りたいものがあるでしょう？」

「守りたいのはねえちゃんだよ！ 一番大切なのはねえちゃんだよ！」

「もう、違うでしょう？ あなたは『ひとつだけ』を見つけたはずよ」

「わかんないよ、何言ってるんだよ……！」

ねえちゃんの腹部から真紅の液体がどろどろと流れ出していた。

向こう側が見えるくらい大きく丸い口を開けた傷は生々しく、触れることすらできなかった。

致命傷だ。

頭の片隅、どこかに残っていた冷静な自分が判断する。

「大丈夫よ、私は」

「大丈夫なんかじゃない！」

目から涙があふれ出た。

もう分かっていたから。

どうすることも出来ないって分かっていたから。

「やだよ、ねえちゃん。やめて。行かないで。お願い……」

誰でもいい。助けて欲しい。

絶体絶命の時に力を貸してくれたラースのように。

誰か力を貸して。

ねえちゃんを助けて！

金の瞳が少しずつ閉じられていく。

コインを持った手から力が抜ける。

滑り落ちたコインは、鈍い金属音を立てながら地面に転がった。視界がにじんでいる。

ダメだ、泣いちゃダメだ。ねえちゃんが心配するから。ねえちゃ

んに迷惑かけるから……

「助けて……」

うめくように喉から漏れた声に、応えはなかった。

絶望の中で、世界が崩壊する音を聞いた。

SECT・10 絶望

ありえない。こんな事あっていいはずがない。
強くなつたのに。ねえちゃんと一緒に戦えるよう強くなつたのに。
どうして？どうして？

世界の全てをかけて大切なものを選んだのに。
何がなくても傍にいたかったのに。

「ねえちゃん」

落ちたコインを拾い上げた　ひどく冷たい。でも、握り返した
手はまだほんのり温かい。

信じられない出来事に、思考がうまく働かない。

白い頬に触れた。真紅の衣を纏った体も、固く閉じられた瞼も、
目に焼き付くほどに見つめた。

ああ、何だろう。

いま何が起きているんだろう？

そうか、世界が壊れたんだ。

おれの住んでいた世界。幸せな世界。温かくて優しくて　大好
きな世界が。

「もう……いいよ」

何もいらない。

ねえちゃん以外何も要らない。

白い頬から指をはずした。

ゆっくりとした動作で両腕につけていた簞手をはずすと、黒く変
色した羽根が二枚零れ落ちた。

立ち上がって振り向く。

打ち合っているのが誰なのか、そんな事すらどうでもよかった。
時折見える光の束が黒いヒトを追い詰めているのが分かったけれ
ど。

「もう何も要らない」

左手が熱くなる。

心の中を占めるのは絶望だけで、恐怖も慈悲も何も残っていないかった。

コインの埋め込まれた左手を真直ぐトロメオの門に向けた。

最後にねえちゃんが門を壊せって言ったから。

「壊して。全部」

おまえならできるんだろう？

心が完全に麻痺していた。

次に何が起こるかなんて、どうでもよかった。

「ラース……！」

世界が闇に包まれた。

目の前に降りてきたのは一年ぶりに見る殺戮と滅びの悪魔の姿だった。

闇の特殊空間に浮かぶ炎妖玉の嵌め込まれた眼、全身から噴出す殺気とも呼べる鋭い気、闇を思わせる毛並みと禍々しい膜翼……それは最凶の悪魔の名に相応しい。

自分の左隣、コインの埋め込まれた左手に擦り寄るようにして地面に降り立った悪魔は、幼い声でたどたどしく喋った。

「待つてタよ ルーク」

前に会った時はその姿が恐ろしかったのに。

今はねえちゃんを失った心の欠落に、ぴったりとはまり込むみたいだった。

「君の心が 絶望二染まる コのとキガ 待ち遠しかったヨ」

生暖かい舌が自分の左手を這ったのが分った。

どこか現実を離れた感触に心地よさを感じ、お返しに喉を撫でてやると大きな黒い狼は嬉しそうに目を細めた。

目の前には3つの人影があった。

誰なのかとか、強いんだろうかとか、敵なのかとか味方だとか……

…全部どっちでも良かった。

ねえちゃんのない世界に興味なんてなかった。

「お前なら出来るんだろ？ ラース」

「ルーク キミの望ミヲ口に出しテ そシタら僕ハ 実行するカラ」
躊躇いなどない。

他に欲しいものなんてない。

だって誰も助けてなんてくれなかった。

「壊して。全部」

望んだわけじゃない。

でも、そうなってもいいと思った。

心を占めたのはそれだけだった。

「いいヨ」

ラースは軽く返事をした。

その声もどこか遠い世界の出来事のように思えた。フィルターがかかっているように視界も音もはつきりとししない。

頭が働かない。

「ハルフアス どいてテヨ メタトロンは僕ガ貰う」

「ひひ！ 久しぶりだったのに我儕な奴だな！」

「お前も 消されタイの力？」

それなのに、ラースが声を向けた相手にはなぜか目を惹かれた。
なぜだろう。

呆然として青ざめた端正な顔に、なにより切れ長の眼に嵌め込まれた紫水晶アメジストに胸の底がかき回される思いだった。

なぜだろう。

心が……痛い。

「仕方ないな！ 譲ってやるよ！」

甲高い声を聞いて満足したのか、ラースは黒い霧と化し自分の左手に吸い込まれた。

「それがイイ 僕ニ 逆らうナ」

左手が熱くなる。

悪魔に授けられた左手は、再び悪魔の加護を受けて史上最悪の武器と化した。

全身をラースと共有している感覚が湧き上がる。細胞全部が湧き上がるように活動し、今にもはじけそうなくらいの衝動を注ぎ込まれていた。

ゆっくりと足を前に出す。まるで地に着いている感覚がない。それでも背後に金冠を負った天使　メタトロンに少しずつ近づいていった。

その途中、ラースは一度見覚えのある人影の前で停止した。腰まである黒い髪のアストレート。切れ長の眼に収まる美しい紫水晶……どうしてだろう、何故こんなにも胸が痛い。

「お前トモ　いずれ　決着ヲつけテやる　悪魔デモ天使デモ人間デモナイ　半端モノ」

ラースの発した言葉の意味を考える前に、視線が再びメタトロンに戻っていた。

闇の空間の中でメタトロンの金冠は絶対的な光を支配している。それよりずっと後ろに大きな門がぼんやりと見えた。

あれだ。

ねえちゃんはその門を破壊しろって言ったんだ。

あれを壊して

「仕方ナイな　じゃア　めたトロンハ　後ダ」

自分の体がふわりと重力から開放されるのを感じた。

金の光を放つ天使を見下ろして、在るだけで凄まじい気を放つ左手をはるか向こうに霞むトロメオの門に向ける。

何かがメタトロンの方向から飛んできたようだったが、ラースは視線を向けることすらせずに何かで撃墜したようだ。

完全に自分のあずかり知らぬところで戦いが進んでいる。

これがきつと天界の長と最凶の悪魔の戦いなんだろう。

「消　え　口」

ラースの声が闇の特殊空間に響き渡った。

今にも暴走しそうな凄まじいエネルギーが自分の中に一瞬で膨れ上がる。

一体どんな力を使ったのかも分からないまま、トロメオの門は灰塵に帰した。

門が破壊された瞬間、安堵で力が抜けた。

ありがとう、ラーズ

これでもう、いい。

後はもう何も要らないから。

ねえちゃんがない世界なんて……

そう思ったけれど、何かが引つかかった。

何だろう。

忘れちゃいけないことだった気がする。

とてもとても大切な事。

いったい何だったんだろうか？それを考えようとすると、どうしてこんなに胸が苦しくなってしまうんだろう？焦がれるように足掻く胸の奥底に何を忘れたんだろう？

紫水晶の瞳がふと浮かぶ。

どうしてそんなに悲しそうな顔をするの？

どうしてそんなに優しい瞳でこっちを見てるの？

どうしてこんなに温かい気持ちになるの？

ねえ、どうして……？

目の前の景色がくると変わっていく。

それは金の光だったり闇の色だったりする事が分かるくらいで、その変化が激しすぎて千里眼を発動しているわけでもない自分には認識できなかった。

ただたまにきいんと耳を劈くような音が響いたり、全身を大きな力で押さえつけられたような感覚を受けたりした。

「強くなったネ ルーク」

嬉しそうなラースの声に、かすかに心が動く。

そうだ。

だってねえちゃんの隣で戦うために……

動かなくなつた体を、固く閉じられた瞼を思い出してもう一度絶望に突き落とされた。

「いいネ その絶望ハ 僕を強くスル」

抜け落ちた心にラースが入り込んでくる。

欠落した部分は殺戮と滅びの悪魔が埋めていった。破壊と言う衝動と滅びを願う心で。

その度にどんどん自分の意識がなくなっていくのは分かっていた。でもどうすることも出来なかった。

だってそれに抵抗する力は残っていなかったから。抵抗するには強い願いが必要だったけれど、ねえちゃんがいなくなつた世界で願う事なんて一つもなかったから。

絶望で欠けていく心。

埋めるように入り込んでくる衝動。

強まっていくラースの力。

その連鎖をとめる術はなかった。

そしてとめるつもりもなかった。

あの声を、聞くまでは。

SECT・11 光の差すほうへ

闇の中で飛び回るラーズは確実にメタトロンを追い詰めているようだった。

ほとんど残らない意識の中でかろうじてそれだけが分かった。欠落した心ではもう悲しみも薄れていた。

「凄いヨ ルーク！ こんなに体が軽い！」
ラーズの声がひどく遠い。

フィルターがかかったようにぼんやりとした意識は風前の灯だった。

視界も薄れてきた。体の感覚もほとんどない。感覚の全てを明け渡してしまいそうになっていった時だった。かすかに残った音の世界に、響く声があった。

ラック

誰？

ラック？

名前？

自分の名前？

ラーズはおれのことをルーク、と呼んだ。それは『L・U・C・I・F・E・R……ルシファ』の愛称、『光』の意味を持つ『L・U・X』……ルーク。

幼い頃からずっと呼ばれて来た名だ。ラーズもリイも、リュシフェルさえそう呼んだ。

じゃあ誰？

ラック、は何？

知らないはずの名前は麻痺した心を揺り動かした。

絶望の中に消え入りそうになっていた心がほんの少しだけ光を取

り戻す。

一瞬、ラーズの支配が緩んだ。

失われたはずの心が叫んでいた。

思い出せ、と。

ラック……『L・U・C・K』……幸福？

風の音がする。

とても強い風の音。

自分を守ってくれた風

「ラック……！」

また、だ。

声がした。

自分と呼ぶ声。

深いバリトンの響き。

誰？

おれを呼ぶのは誰？

育ててくれたヒト？

違うよ。そのヒトはもういなくなってしまった。だから世界を壊そうとしたんだろう？

じゃあ誰？ おれを呼ぶのは。

強い声で呼び戻すのは。

ねえちゃんを失った世界に繋ぎとめようとしているのは。

そうだ。ラックはおれの名だ。ねえちゃんが幸せになりますようにってという願いを込めてつけてくれたおれの新しい名前。

『グレイシャーⅡルシファⅡグリフィス』

辛い事ばかりだったその名はもう捨てたんだった。

だってずっと閉じ込められていた。リュシフェルと契約するため

だけに育てられたから。抵抗しないように。余計な事を知らないように。

それが辛い事だと知ったのはずっとずっと後の話だったけれど。その頃はだつて辛いなんていう言葉だつて知らなかった。

自分の世界の全てだった塔の一室から初めて出たのは15の時。窓からしか見ていなかった空はこんなにも広がったのかと感動した。でも、それは一瞬で。

すぐリュシフェルの召還で地下の暗い部屋に連れて行かれた。

その後は……？

ああ、覚えていない。

そこだけ頑丈な鍵をかけられたように記憶の扉が開かなかった。次に覚えているのは優しい笑顔と猫のような金色の瞳。ストリートブロンドがキラキラとさざめいてまるでお日様みたいだと思ったのを覚えている。

ずっと、一緒にいた。

小さな街の片隅で、ねえちゃんの隣にいられば幸せだった。

でも、ねえちゃんはまだ

いない。

永久に失ってしまった。

おれの世界は崩壊した。

閉じられた瞼と真つ赤に染まった体を思い出して胸のうちが抉り取られる感覚に襲われた。

もう優しく頭を撫でてくれる事も微笑みかけてくれる事もない。

メゾソプラノの声で自分を呼んでくれる事だつてないんだから。

ねえちゃんじゃないなら、誰が呼んでくれているんだ？

少しずつ感覚が戻ってきた。

一面の闇に浮かんだのは美しい紫水晶。
それから真紅。

ぞわりと背筋が震えた。

口の中で鉄のにおいがした。唇にぬるぬるとした感触がある。この感覚には覚えがある。

やめろ、ラーズ！

心臓が止まりそうに震えた。

このヒトは、この紫の瞳のヒトは……！
胸がかつと熱くなる。

「半端モノ お前ノ血 嫌いじゃない」

にやりと笑って、自分の体で口元の血をうぐう。

完全にラーズと共有し始めた感覚は、自分が目の前のヒトを傷つけたことを示している。

やめて。やめて。

お願いだから。

このヒトを傷つけないで！

だってこのヒトは ！

ばちん、と大きな音がした。

凄まじい衝撃に頭を揺さぶられて、思わず目を閉じる。

「なんだ ルーク 起きチャッタの力」

ラーズの声がした。

ただ、これまでと違って自分の隣から。

「あーア つまんナイ ぐずグズしてる間ニ メタとろんも 消えたシネ」

「ひひ！ 追い出されてやんの！」

「五月蠅いヨ ハルファス」

すう、と体が軽くなった。

ラーズは自分から出て行ったようだ。

周囲の闇の空間がかすれていく。

ぼろぼろになった城塞都市トロメオと決られた戦場が姿を現した。

「マ いいヤ 楽しカッタし また呼ンデ」

最後にそんな言葉を残した殺戮と滅びの悪魔は、ほとんど崩壊し

たトロメオの前で溶けるように消え去った。

その瞬間、自分は悪魔の加護を失った。

が、落下しようとする体を右腕一本で支えてくれたヒトがいた。

「……アレイ、さん」

「この馬鹿が……！」

抱きかかえられるようにして支えられ、紫水晶が目の前にあった。
アレイさんはひどく息を荒くしていた。

その理由はすぐに分かった。

触れた左肩から生暖かい液体が流れ出していた。

自分がつけた傷だ。

左手はだらりとぶら下がって、全く動いていなかった。

「……ごめんなさい」

そう言うのが精一杯だった。

理屈ではなく涙があふれてきた。

「ごめんなさい……ごめん……なさ、い……」

世界を壊していいことなんてなかったのに。

大切なヒトはまだまだたくさんいたのに。

自分は、一番してはいけない事をした。

「戻る、ぞ……ねえさんもすでに……フェルメイが……」

バリトンの声が少しずつ小さくなっていく。

さつと血の気が引いた　さつき失ったヒトの最後と一緒だった
から。

ふつと耳元の羽根が消え失せる。

背に回されていた右手から力が抜けた。

がたがたと全身が震えた。

加護を失って、二人一緒に地面に落下した。

SECT・12 別れの日

地上に激突する寸前、かろうじて悪魔の名を叫んだ。

「アガレスさん！」

ふわりと体が浮いて、全身に重圧がかかる。それでも、抱きしめるようにしてアレイさんを全身で支えた。

ゆっくりと体勢を整えて地面に降りると、そこには何もない地面が広がっていた。

いや、何もないわけではない。

ところどころ抉れた地面とかすかに残る爆発痕が凄惨な闘いの影響をのぞかせていた。

ヒトの気配がない。

地面にふわりと降り立って、覆いかぶさったアレイさんをぎゅっと抱きしめた。

だいじょうぶ。

だってまだ、温かい。心臓の音がする。

安堵のため息を漏らした。

「グリモワール軍がどこにいるか分かるかな？ 戻らなくちゃ」

金目の鷹を上空に飛ばしてから覆いかぶさった体の下から這い出す。

膝の上にアレイさんの頭を乗せて、頬を撫でた。

腰まであった長い黒髪が肩の辺りでなくなっている。途中から消失したようにばっさり切れていた。戦いの中で切れたんだろうか。いつも羽織っていた闇色マントも、肩の辺りにほんの少し布が残っているだけだ。

左肩の怪我がひどい。今も血がにじみ続けるその傷は……ラースの牙でつけたものだった。

自分の服の一部裂いて傷口に押し当てる。簡単だが、止血しなければ命の危険に直結してしまう。

涙がにじんできた。

視界がぼやけていく。

「うつ……」

嗚咽が漏れた。

ダメ。泣いちゃダメだ。

唇をかみ締めた。

どうしてこんなことしちゃったんだ。

ぼつりと涙がアレイさんの頬に落ちた。

「ごめん……ごめんね。ごめんね……」

痛かったと思う。すごく辛かったと思う。

そんな目に遭わせたくなかったのに。

自分の周りのヒトが傷つくところなんて見たくないのに……！

涙を零さないように見上げた空は、大好きな初夏の真つ青な色に彩られていた。

金目の鷹は、味方を連れて戻ってきた。

「ウォル先輩！」

青ざめたフェルメイが馬を駆って来た。

その後ろに『^{アウェイク}覚醒』と兵の一団を連れている。

自分の前で急停止したフェルメイは馬から飛び降りてすぐ横たわったアレイさんの傷を確認した。真剣な顔で脈を取り、呼吸を確かめて全身の傷をチェックした。

後ろから来た『^{アウェイク}覚醒』と兵は自分たちを通り過ぎて、ほとんど外壁が崩れてしまったトロメオに侵入していく。

「すぐに運びましょう。セフィロト軍はカーバンクルまで退きました。このままトロメオを制圧します。グリフィス女爵は兵団と共にトロメオに向かってください。まだセフィラが残留していたら突撃隊が大きな被害を受けてしまいます」

「でも、おれ……」

アレイさんの傍を離れなくなかった。

でも。

考え直す。

きつとアレイさんはそんな事望んでいない。グリモワール軍のために突撃隊の援護する事を望むだろう。だから、自分は今出来る事をする。

ぎゅつと唇をかんだ。

「アレイさんをお願い」

一度だけ頬に触れてから、フェルメイにアレイさんを渡して立ち上がる。

そしてアガレスさんの加護を受けて空に飛び上がった。

本当はもうとくに挫けそうになっていた。

だってねえちゃんはどうもない。

アレイさんは自分のせいで大怪我して、取り戻すはずだった城塞都市トロメオは半壊している。

何もかも放り出して逃げ出したかった。

全部嘘だと思ったかった。

軍に戻ったらねえちゃんが笑って待っていてくれるんじゃないかって、アレイさんがイジワルな声で迎えてくれるんじゃないかって期待していた。

どうしておれはここにいるんだ。おれはここで何をしているんだろう……？

何度も何度も泣きそうになり、何度も何度も崩れ落ちそうになった。

それでも無理やり手足を動かして、『アウェイク覚醒』のメンバーと共に城塞都市トロメオを次々取り押さえていった。

セフィロト国は本格的にトロメオから退去したらしい。

兵はほとんど残っておらず、あまりに呆気なくトロメオを奪還する事が出来たのだった。

一段高い位置にあるシェフィールドの屋敷から見下ろすと、遠くから黒い旗印のグリモワール本軍がトロメオに向かって来る所だった。

た。

その日のうちにシエフィールド公爵家の屋敷の一部屋に、騎士団長とレメゲトンが集められた　と言っても動けるレメゲトンは自分とベアトリーチェさんだけだった。

大きな天蓋付きベッドのあるその部屋には、一人の女性が眠っていた。

永遠に目覚める事のない眠り。

その顔をのぞくには相当な勇気と覚悟が必要だった。

「……ねえちゃん」

声が震えた。

完全に冷たくなってしまった手を握る。その手は固く、よく知っている温かい手とは全く違っていた。頬も青白い。瞼も硬く閉じられている。

服はレメゲトンの正装に着替えさせてあった。

それは初めて見る　遺体だった。

人間は、死んでしまうとこんなにも冷たく固くなってしまふんだ。それも、自分の大好きなヒトが……

部屋は暗い空気で満たされていた。誰も何も言えず、ただ沈黙が支配している。

動く気配のない魂の抜け殻を見て、少しずつねえちゃんがもういないのだということを実感していった。現実を拒否していた心が現実を納得するまでずっとねえちゃんの横顔を見つめ続けた。

「明日には棺を用意します。葬送を行った後、遺体は王都に送られる事になります」

「……ね、少しでもいいから……二人にしてもらっていい？」

フェルメイにそうワガママを言つと、悲しそうに微笑んだ彼は騎士団長さんたちを連れて部屋を出て行った。

ベアトリーチェさんも静かに部屋を後にした。

全員出て行ったのを確認してから、そつとねえちゃんの頬に一つキスをした。

眠れない夜ねえちゃんがいつもそうしてくれたように。

「ねえちゃん、何でもういなくなっちゃうの……？　まだまだ一緒にやりたいこと、いっぱいあったよ？　ずっとずっと、まだまだ一緒にいられると思ってたんだよ？」

ぼろり、と涙が零れ落ちた。

3年間ずっとねえちゃんに迷惑も心配もかけないように我慢していた。

ねえちゃんの前では絶対に泣かないって決めていた。

でも、もういいかな？

我慢せずに涙が流れるままにした。我慢をやめたら涙は次から次へと溢れ出してきた。

「どうして？　おれ、強くなっただろ？　これで一緒に……隣で戦えると思ったのに。どうして？　どうして……！」

何も出来なかった。

ねえちゃんと肩を並べて戦うことだけを目標にしてきたのに。隣で守る事だけを目指してきたのに。

これまでやってきたことは全部無駄だったんだろうか。

千里眼を使えたって、『風燕^{ふうえん}』を使っただって、ラースの力を使っただって。

自分は何も出来やしなかった。

喉から嗚咽が漏れる。

「嫌だよ。ねえちゃんがいなくなるなんて、嫌だよ……！」

もしねえちゃんが戻ってくるんなら、自分は何だってするだろう。世界の果てにも行くだろう。どんな強い相手にでも戦いを挑むだろう。

でも、何をしてもどうすることも出来ないと分かっている。
分かっているんだ。

理屈では。

「もつと心配してよ。おれはまだ一人じゃ何も出来ないよ。強くな
んてなれないよ。ねえちゃんがいらない世界で生きていくなんて嫌だ
よ。ねえちゃんが、ねえちゃんが……」

絶望の心に反応して左手が熱くなる。

また衝動に身を任せそうになって、ぞつとする。

こんな自分を見たらねえちゃんは呆れているだろうか。トロメオ
を半壊させたこと、ねえちゃんはどう思っているんだろう。ラース
を暴走させた事、怒っているだろうか。

もつ、全部分からないのだ。

「いけないで……ねえちゃん。いけないで……！」

涙と嗚咽の中で、愛しいヒトの死を少しずつ受け止めていった。
たくさんたくさん泣いて、たくさんたくさん言葉をねえちゃん
に向けた。

もつ、返事はないけれど。

こつそりと一人、ねえちゃんに別れを告げた。

決別する事はできない。だってねえちゃんはおれの世界そのもの
だから。3年前に拾ってもらって、ラックと言う名をくれたヒト。

おれが全てをかけた「ひとつだけ」に選んだヒト。

世界の終わりの日、空はこの上なく青く澄んでいた。

風はとても暖かった。

トロメオの周りに草木はなくなってしまったけれど、新緑の匂い
がどこからともなくただようように爽やかな初夏の晴天だった。

SECT・13 ブエル

涙が涸れてもまだずっとねえちゃんの横顔を見つめていた。

外は暗くなり、松明の明かりがいくつか灯っている。この部屋に明かりはなく冷やりとした空気が流れていたが、それでもここを動く気はなかった。

真夜中になってベアトリーチェさんが静かに部屋を訪れた。こんこん、という軽いノックに答えると、穏やかな声が響いた。

「少し、よろしいですか？」

「うん」

国家医師の資格を持ち、救護班の長を務めているベアトリーチェさんは負傷兵の手当てに追われていたはずだ。

その顔には疲労の色が隠しきれていなかった。手には医療用鞆を提げている。

ねえちゃんの顔を名残惜しく見てから、部屋を後にした。

廊下に出ると、ベアトリーチェさんはすまなそうに言った。

「お邪魔をしてすみません。ただ……クロウリー伯爵のご様子が芳しくありません」

「……っ！」

アレイさんが。

さつと血の気が引いた。心臓の音が耳元に響く。

ベアトリーチェさんはそんな自分をちらりと見て、困ったように笑った。

「あの、お召し物を替えないのですか？」

「ん？」

いわれて見下ろすと、ずっと着替えるのを忘れていた事に気づいた。

アレイさんの傷を止血するために服の裾を裂いたためにおヘソのあたりが丸見えだった。抱きかかえた時に付いたアレイさんの血も

そのままだったし、背中もすうすうするからきつといくらか燃え落ちてしまっているに違いない。

でも、いまはそんな事どうでもよかった。

「後でいいよ。アレイさんが先だ」

これ以上大切なヒトを失いたくない。

傷ついたばかりの心はそう叫んでいた。

大きなベッドに寝かされたアレイさんの顔は蒼白で、息も荒い。

巻かれた包帯には血がにじんでいた。

何より、部屋に入った瞬間　むせ返るような血の匂いがした。

「大きな血管を傷つけていないのが不幸中の幸いでした。もしそうなっていたら今頃は……」

ベアトリーチェさんの言葉に、心臓が止まりそうになる。

「ですが今も予断を許しません。鎖骨が砕けて、肋骨が3本、それ以上に腕骨が折れています。それだけでなく全身に深い切傷が多く見られます」

伸ばした手が震えた。

苦しそうな呼吸で傷の深刻さを知る。

触れた手は……ひどく冷たかった。

その手の先からざっと一瞬で全身が冷えた。がたがたと震える肩を抱き、泣きそうになるのをぐっところえる。

だいじょうぶ、まだ生きている。

助ける術がある。

ベアトリーチェさんはずっと持っていた医療鞆から小さな箱を取り出した。悪魔紋章が記されたその箱を開け、一つのコインを取り出した。

コインを手に乗せて大きく深呼吸したベアトリーチェさんは静かに悪魔の名を呼んだ。

「ブエル」

ふわり、と温かい空気が漏れた。

フラウロスさんやラースとは全く違うオーラにビックリした。

そして部屋に現れた悪魔の姿にも驚いた。

小さな、本当に小さな……手ですっぽりと包めてしまうような大きさの悪魔だった。一応人間型をしているが、足は指より細いし、顔なんて爪くらいしかない。車輪のようなものに腰掛けているようにも見えるが、いかんせんパンツが小さすぎる。

「ちいせえなあー」

そのまま口になると、その悪魔は小さな全身と乗り物の車輪のようなものをフルに使って自分の頭に突っ込んできた。

思った以上の衝撃が加わって頭がくらくらした。

思わず押さえて呻く。

「痛う……」

その悪魔は何かキーキー言っているようだが、高い音過ぎて聞き取れなかった。

「ミス・グリフィス、気をつけて。ブエルは怒りっぱいんです」

「癒しの悪魔なのか？」

また頭に衝撃。

「……っ!!」

同じ場所にぶつかるな！思わず悶絶した。

「ブエル、お願いです。そちらの男性の怪我を治してくれませんか」
第10番目、癒しの悪魔ブエル　ベアトリーチェさんが持つコインの一つだった。

その小さな悪魔はベアトリーチェさんの願いを聞いて、すう、と床近くまで降りてきた。

そして、次の瞬間には目の前に自分より大きな　それこそアレイさんくらいある男のヒトが立っていた。

「?!」

びっくりして思わず後ずさる。

オールバックの蒼髪は肩にかかるくらいできちんと切りそろえている。鋭い眼の縁にペイントが施してあり、さらに目つきを悪くし

ていた。何かを塗りたくっているかと思まごうほど白い肌に、紫に近い血色の悪い唇が目立つ。

きつちりとした詰襟カーキの服を着て、下もそろえた丈夫そうなカーキのズボン。テカテカに磨かれたブーツが眩しかった。

先ほどまで乗っていたと思われる車輪のようなものをチョーカーのようにして首にはめていた。

「このたわけ者めが 命が惜しくはないのか」

喋ると口の中の大きな犬歯が見え隠れする。

でも、凄んで見せてもこのヒトのオーラは怖くない。ラーズのように破壊する事もフラウロスさんのように内に炎を秘めたわけでもない。口は悪かったが柔らかない空気を纏っていた。

だからぜんぜん怖くなかった。

「お願い、ブエルさん。アレイさんを助けて！」

何の躊躇もなく詰め寄ると、その悪魔さんはぐつと詰まった。少しは怖がれよと言いたげなのがありありと見て取れる。

でも、おれはこのくらいの脅しじゃ怖がれない。なにしろあの滅びの現場を目撃してしまったのだから。

「お願い助けて。何でもするから！」

そう言つとオールバックの悪魔さんはやりと笑った。

「お主 黄金獅子の末裔じゃな」

「そつだよ」

「ならば 我に血を与うという 条件はどうだ？ さすれば その傷すべて癒してしんぜよう」

「……それでアレイさんを治してくれるんだね」

「うむ 嘘は言わぬ」

じつとその悪魔さんを見つめた。髪と同じ色のコバルトブルーの瞳は真直ぐにこちらを射抜いていた。

「いいよ。好きなだけ」

「ミス・グリフィス！ あなたの体調も万全とは言いがたいのですよ？！」

確かにそうだった。

朝からフラウロスさんを召還してゲブラと戦闘し、ラーズのコインで散々暴れまわった後も休まずトロメオの制圧に尽力した。

その後もねえちゃんの隣で夜中まで眠らずにいたのだ。

とても元気とはいえなかった。

でも。

「だいじょうぶだよ、ベアトリーチェさん。おれ、体だけは丈夫なんだ」

にこりと微笑みかけてもう一度ブエルさんに向き直った。大切なヒトをもう一度失うのは絶対に嫌だったから。苦しむ姿を見ていたくはなかったから。

オールバックの悪魔さんは紫色の唇に笑みを湛えた。

「遠慮なく 頂こうか」

口の中の犬歯が飛び出した。

「！」

もともと大きかったのに、さらに伸びた犬歯をむき出しにしてブエルさんの顔が近づいてくる。

何が起こるか分からなかったけれど、命を奪われることはないだろう。

そして。

つぶり、と皮が破ける感覚があった。痛みはない。まるでラーズのように首筋に噛み付いたブエルさんはそのまま舌を使って血を舐めた。

首元にうずまった蒼い髪の方こうに、ベアトリーチェさんが顔を青くしているのが見えた。

「やはり 極上じゃな」

嬉しそうな声が聞こえる。

味見を終えた悪魔は、本格的に首筋に噛み付いて血をすすり始めたのだった。

さすがに貧血でふらふらしてきた頃、ようやく悪魔は牙をはずした。

「満足した　グリフィスの血は　大変美味である」

その瞬間、立ちくらみで床に崩れ落ちる　ベアトリーチェさんが支えてくれなかったら床に頭を打っていたかもしれない。

満足した様子のブルさんは爪の長い大きな手をアレイさんの上にかざした。

その掌から癒しの光が漏れる。

まるで夢の中で見たリユシフェルさんの銀の光のように温かいそれは、確実にアレイさんの傷口を塞いでいった。

みるみるうちにアレイさんの呼吸が安定していくのが分かる。

頬に赤みも差してきた。

床を這うようにベッドに辿りついてアレイさんを覗き込んでみる

と、安らかな寝息を感じ取れた。

「ああ、よかった……」

手をとってみる。

温かい。

よかった……

安堵と共に眠気が襲ってくる。

血が足りないせいと今日一日の疲れでそのままベッドの脇で眠り込んでしまった。

アレイさんの手を握り締めたまま。

SECT・14 慟哭

手に温かい感触を覚えながら少しずつ覚醒した。

その手をぎゅっと握ると握り返してくれた。

ゆっくり顔を上げると、ずっと見たかった紫水晶アメジストが困惑しながらも自分の方を見ていた。

「……ああ」

思わず安堵のため息が漏れる。

じわりと眼の端に涙がにじんだ。

そのまま紫の瞳を持つヒトの胸に飛び込んだ。勢いでベッドに倒れこんだがお構いなしに抱きついた。全身で無事を確かめたかった。

「よ……… かつたあ………」

ぎゅっと胸に顔を埋めると、温かい体温と優しい鼓動が伝わってきた。

生きている。

震えるほど嬉しかった。とめどなく涙があふれてきた。

昨日ねえちゃんの前であんなにたくさん泣いたっていうのに、涙はまだ涸れていなかったみたいだ。次から次へと流れ出る雫は留まるところを知らなかった。

ねえちゃんだけじゃなく、アレイさんまでいなくなってしまったら。

自分は比喻でなく世界を滅ぼしてしまっていただろう。

世界は崩壊し、心を失って絶望に全てを明け渡し、止めるヒトもない世界を完全に破壊しつくしていただろう。

アレイさんが命を賭して止めてくれなかったら……

温かくて大きな手が肩に回された。

背にも手が触れた。火傷したはずだったのに痛みは全部引いていた。ブエルさんがついでに治してくれたんだろうか。

ところがアレイさんは自分を抱いたまま上体を起こした。

必然的に彼の腰の辺りに跨る格好になる。

いつもより近い、でもほんの少し見上げる位置にある紫の瞳を覗き込んだ。

すると、アレイさんは目を逸らすようにしてぼそりと言った。

ついでに両肩に手を置いて自分を遠ざけようとしている。

「頼む。離れてくれ」

どうして目が合わないんだろう。

じっと見つめたけれど、アレイさんはこちらを向いてくれそうになかった。

悲しくなった。

「何で？」

どうしておれを遠ざけようとするんだろう。

「もしかしてまだどこか痛い？ ブエルさんが全部治したと思うんだけど……」

「いや、平気だ。体は全く問題ない」

それじゃあもう自分と一緒にいたくはないと言っのだろうか。

ラースを散々暴走させてひどい怪我させて、怒っているんだろうか。もしかして嫌われてしまったんだろうか？

嫌われる……？

心臓が抉られるような不安が襲う。

また泣きそうになった時、コンコン、とノックの音がして部屋のドアが開いた。

「失礼します。ミス・グリフィス？ ウォル先輩の具合は……」

『アウェイク覚醒』の副隊長、フェルメイさんだった。

優しい笑顔のそのヒトは、なぜかこちらを見て頬を引きつらせた。どうしてだろう？ アレイさんが元気そうなんだから喜んでくれてもよさそうなのに。

喜ぶどころか軽く礼をして部屋を出て行ってしまった。

「待つ……フェルメ……イ……」

アレイさんが慌てて呼びとめようとするが、間に合わなかった。

紫の瞳の男性は大きなため息をついて頭を抱えた。

「アレイさん？」

首を傾げると、アレイさんはつい今しがたフェルメイさんが出て行ったドアを指差して叫んだ。

「俺はもう元気だ……着替えるから出て行け。それからお前も着替えて来い！」

あ、いつものアレイさんだ。

何だか妙にほっとした。

ようやく自分の中に張り詰めていたものが切れた気がした。ほんの少しだけ元気になれそうな気がする。

ひょい、と飛び上がって部屋の床に着地した。

「じゃあすぐ戻るよ！ 待ってて！ どこにも行っちゃダメだよ？」

大切なヒトがもうどこへも行かないように。

ずっと、ずっと傍を離れないようにしよう。

そう心に決めて部屋を後にした。

着替えを終えてアレイさんの部屋に戻ると、彼も着替え終わっていた。
いた。

「えーと……アレイさん？」

しかし、その姿を見て思わず首をかしげた。

アメジスト

紫水晶はそのままだったけれど、髪は短くなっておりいつものマントもない。その上、正装でも騎士服でもない比較的ラフな灰色のシャツを着ていた。それもサイズが合わず止まらなかったのかボタンが上2個くらい外れている。

けれど短い髪は端正な顔立ちのアレイさんにとってもよく似合っていた。

「ちよつと若く見えるよ」

そう言つと、アレイさんは頬を引きつらせた。

「誰のせいだと思っている、このくそガキ」

それでもそのヒトがいつもと変わらない台詞を言ってくれた事が

嬉しくて、思わず微笑んでしまった。

シェフィールドの屋敷に大きな棺が送られてきた。いったいどうやって準備したのだろう。立派な悪魔紋章が掘り込まれたそれは、まるでレメゲトンが殉職する事を見越して最初から用意されていたかのようなだった。

その棺はシェフィールド公爵家の中庭に安置された。

もう一度のぞいて、ねえちゃんの姿を瞼の裏に焼き付ける。

おれの最初の記憶はねえちゃんの笑顔だ。ブロンドの髪がまるで太陽の光みたいだと思ったのをよく覚えている。

どこかで『グレイシャー・リーグリフイス』の記憶が叫んでいたって、リュシフェルさんが自分の中にいたって関係ない。そんなものは夢の中の世界だった。

おれの人生はねえちゃんに拾ってもらった時に始まったんだ。

最初の頃の思い出はとても曖昧だけど、「探索者」に任命されてからの事ははっきりと覚えている。とても幸せな時間だった。

そのゆつくりとした時間の流れを抜け出したのは、ねえちゃんと一緒にいるためだ。

王都へ向かうねえちゃんを追って、王都に行った。

戦場に行ったねえちゃんを追って、戦場に来た。

でも、ねえちゃんはまた先に行ってしまった。もう追いかけるれない世界に。

まだ期待が捨てられない。

今にもねえちゃんが目を覚ますんじゃないかって期待してる。期待すればまた辛いつて分かっているけど止められなかった。

信じられない心と、現実を認識し始めた理性が葛藤している。

昨日の晩に泣きすぎて涸れた涙がこれ以上流れる事はないが、ただ心だけは涙を流していた。涸れる事のない涙はおさまるところを知らないかのような。

ねえちゃんがない世界。

自分は、生きていけるのか……？

突如吐き気に襲われた。

口元を押さえて、中庭で行われている葬送から抜け出した。

昨日いっぱい泣いて、もう大丈夫だと思ったのに。

屋敷の裏に回って、庭園の中に駆け込んだ。

その場に崩れ落ちる。胃が反り返るようだ。気持ち悪い……キモチワルイ。

フラッシュバックのときとは違う吐き気に、胃液をすべて吐き出した。ずいぶん長い間ものを食べていなかったから、それ以上出すものは残っていなかった。

喉の奥が酸っぱい。

それでもおさまりきらない吐き気が引く気配はなかった。

荒い息の中で何度も何度も吐いた。

もう二度と会えない。微笑んでくれる事もない。優しい言葉をかけてくれることもない。

それじゃあおれは一体この先どうやって生きて行ったらいい？
涸れたはずの涙がもう一度滲み出していた。

「うう……」

ねえちゃんはきつと怒るだろう。おれがこんなに弱い子になってしまつて。

いや、もう起こつてくれる事だつてないんだ！

喉の奥の酸っぱさに咳き込んだ。

苦しい。苦しい。寂しいよ。辛い。

自分の中が負の感情で満たされていく。左手が熱くなる
絶望に反応して。

「げっ……がはっ……ごほごほっ！」

苦しい。

苦しい。

助けて。

誰か、助けて。

願ったのに。助けてって祈ったのに。ねえちゃんを助けてってでも、誰も助けてくれやしなかったよ。誰も応えてくれやしなかったよ。

膝をつき、額を地面に擦り付けるように泣いた。

ねえちゃん。ねえちゃん。おれは一人じゃ強くなてなれないよ

……

「無理だよ」

だっておれはこんなにも弱い。

「ねえちゃん……！」

搾り出された声は、昨日と同じ初夏の晴天に吸い込まれて消えていった。

料理にも使われていたであろうハーブ園はすつとする匂いに包まれていて、少しずつ落ち着きを取り戻した。

真っ青な空が変わらず自分を見下ろしているのが不思議だった。

だっておれの世界はこんなにも変わってしまったのに。

「……ラック」

名を呼んでくれたバリトンの声に、ふと目を向ける。

黒髪の男性が立っていた。短くなってしまった髪に慣れるまでもう少しかかるだろうか。

彼はきつと心配して急いで追ってきてくれたんだろう。少し息を乱していた。

救いを求める者に施しを与えるように差し出された手にすがり付いて、自分はまた大声で泣き始めた。壊れた玩具のように。主を失った僕のように。

優しい腕の中で、世界で一番安心できる場所で。

思い切り泣いて泣いて泣きまわった。

SECT・15 逃亡

それでもここは戦場。

また敵との交戦がはじまるのだ。

何を失っても。どれだけ傷ついても。

一番大切だったヒトはいなくなってしまったというのに、後ろにはまだ守りたいものがたくさん残っている。気づかぬ間に広がった自分の世界は、大切なものに溢れていた。

それに自分は王様と約束した。

グリモワール王国を守るって。この国に住むヒトたちを傷つけないように、セフィロト国を撤退させると。

その王様から伝令が届いた。

最後のレメゲトンと漆黒星騎士団の半分が戦場にやってくるという知らせだった。

「……ライディーン」

ぼつりと呟いた。

ブラックルビー

半年間過ごした漆黒星で出会った、珍しい紅の髪に深い藍色の瞳、挫けぬ心を持つ少年騎士だった。力強い両手剣の型が想起する。

レラージュと契約してからすでに半年近くが過ぎようとしている。彼はまた強くなったのだろうか。

書簡を手にしたフェルメイが会議場で細かい指示を伝える。

「騎士団長のクラウド」フォーチュン卿は王都に残留し新設王族警護隊の隊長を兼任されます。従って騎士団の代表権は鷹部隊長ライガ「アンタレス氏、その元に鷹部隊と鷲部隊、それと鷲部隊の一部を派遣されるそうです」

クラウドさんは来ないけれど、ライガさんをはじめとする鷹部隊のヒト達や鷲のお姉さんたちがやってくる。

また、傷つき傷つけられるために

喪失感がまた戻ってくる。キモチワルイ。

吐き気をこらえて俯いた。

これ以上何も失いたくない。戦争でヒトが傷つき、死んでいくのをもう見たくない。でも、戦場から逃げてしまえば自分の手で大切なものを守る事すら出来なくなってしまう。

握り締めた拳が震える。

逃げたい。逃げたい。

苦しい。

「……グリフィス女爵に王都への帰還命令が出ています。漆黒星騎士団 鷲部隊^{さぎ}2名、鷹部隊^{たか}1名が到着次第帰還せよ、との事です」
フェルメイの言葉が耳に飛び込んできた。

「王都帰還……？」

言葉の意味が一瞬理解できなかった。

王都帰還という事は戦場を離れるという事だ。トロメオを奪還したとはいえ、まだ予断を許さない戦況だというのに。ケテルもホドも、あの銀髪のヒトだってまだ出てきていないのに。

それでも心のどこかで戦場を離れる事にほっとした自分がいたのは否めない事実だった。

アレイさんの大きな手がぽん、と頭にのせられた。

「おれ……ここを離れるの？ だって、セフィラはいっぱい残ってるよ……？」

紫の瞳を見上げて問うと、彼はゆっくりとたしなめるように言った。

「大丈夫だ。お前の代わりに新しいレメゲトンが来るのだろうか？」

俺は会った事などないが、ゼデキヤ王が任命されるくらいだ、きつと強いんだろう」

「うん、強いよ。ライディーンは強い」

それは分かっている。

短剣や格闘を交えない純粋な剣術ならば自分よりずっと強いだろう。破壊の悪魔と呼ばれたレラージュさんと契約しており、その強さは自分の身を持って体感している。そして何より強いのは挫けて

ももう一度立ち上がることの出来るその心。

きっとグリモワール軍に多大な貢献をする事だろう。

でも。それでも。

「でも……でも、おれがいなくなってもアレイさんはまた危険な目に遭うんでしょ……？」

それはとても嫌だった。

もう大切なヒトに傷ついて欲しくなかった。

「ねえちゃん、みたいに……」

その名を出すのはひどく勇気が必要とした。

きつとアレイさんも同じなんだろう、紫の瞳に灯る光が一瞬揺れた。

でもそれはほんの一瞬で、すぐに迷いのない光を灯した。いつも自分を導いてくれた、真直ぐな目だ。実直で正直で、素直でも優しい瞳。

「大丈夫、俺は強い。お前の前からいなくなったりはしない。絶対に、だ」

アレイさんの温かな微笑みを見てまた泣きそうになる。

でも深いバリトンが体の隅々まで響いて傷だらけの心の隙間に流れ込み、少しずつ痛みが引いていくような気がした。

ブラックルビー

2日後、漆黒星騎士団とライディーンが揃って到着した。ライディーンがレメゲトンになったことは既にみんな知っているのだろう、ライディーンの補佐をするように鷹部隊のファイさんが常に隣にいた。懐かしい金髪の青年の姿を見てほっとする。

しかしながら、ライディーンと話している時間の余裕はほとんどなかった。

騎士団長さんたちがいる前で簡単な引継ぎを行い、すぐその日のうちに荷物をまとめてトロメオを離れる事となった。

自分が戦場に赴いた頃、鷺部隊に配属されたヴィッキーとシア、

それに鷹部隊たかのリーダー、壮年騎士のキャスト・ディアスさんの3人が自分の護衛としてそのまま王都にとんば返りするらしい。リーダーの中では最年長のキャストさんはクラウドさんよりも長く漆黒ブラック星騎士団に所属している。思慮深く、経験も豊富で有能な参謀だ。荷物をまとめて愛馬のマルコに乗せ、3人と共に王都へ向かうことになる。

キャストさんは最後までライガさんと打ち合わせをしていた。忙しいはずなのにフェルメイさんとフォルス騎士団長が時間を割いて見送りに着てくれた。それとベアトリーチェさんとアレイさん。少ない見送りだった。

王都への道は急いでも一週間はかかる。グライアル平原を越えカランジェの街を通り、さらに街道をずっと西へ向かう旅だ。戦場を離れると決まって、いくらか心が安堵していた。

思ったよりずっと気が張り詰めていたらしい。

隣で栗毛の馬に乗るヴィッキーのオレンジの髪を見て懐かしく思い、漆黒星騎士団ブラックルビーにいたのがとつもなく過去のことだったように感じた。

あの頃はねえちゃんとアレイさんの背中を追いかけるので必死だった。

紫の瞳がこちらを向く。

マルコに乗ったまま両手を伸ばすと、アレイさんは導かれるようにマルコのすぐ傍まで来てくれた。短くなった髪にまた胸が痛む。

このヒトはまた傷ついてしまっただろう。

隣で戦いたい。でも……もう逃げ出してしまいたい。

もう、大切なものを作るのは怖い

大切なものを守ろうと努力して、でも出来なかった時の喪失感は何物にも変えがたい。それこそ、全てを破壊しても構わないと思うほどに。

そんな葛藤もこのヒトにはすべてお見通しなんだろう。だから何も言わずに自分を王都に送ってくれるんだ。

「死なないで。絶対。死なないで……」

そう言っ、自分より少し低い位置にある首に腕を回して抱え込んだ。

ねえちゃんがない世界で唯一自分を現実に繋ぎとめてくれたヒト。底抜けに優しく、自分を包み込んでくれたとてもとても強いヒト。誰よりなくしたくないヒト。

「行くぞ、ラック」

ヴィッキーの声でアレイさんを放し、マルコの手綱を取った。

泣きそつになるのをこらえて唇をひき結んだ。くるり、と見送りのヒトたちに背を向ける。

ねえちゃんをなくして世界を破壊しかけた自分は、戦場を後にした。

SECT・16 ラグレア

グライアル平原は緑の匂いに満ちていた。

海に近い平野に開かれた王都ユダと違って東の都トロメオはラッセル山を越えた所にある標高の高い平原の端に位置する城塞都市だ。山の麓にあるカトランジェと同じく、夏が訪れるのは王都より少し遅い。

石畳で舗装された街道以外は膝までしかない草が一面に生えて、そのところどころ思い出したように背の低い木が立っている。

所々見え隠れする橙の花はヤマブキだろうか。

空は相変わらず蒼かった　ねえちゃんがなくなった日と同じ。

「久しぶりだな、ラック」

「うん。元気だった？ ヴィッキー」

にこりと笑って答えると、ヴィッキーは深緑の瞳を困ったように歪めて笑った。

「私は元気だ。だが、お前は……大変だったようだな」

馬がゆつくりと歩を進める音が響いている。

ヴィッキーの言葉に答えられず、少し視線を落とした。

すると彼女もそれ以上追及せずに話題を変えた。

「先ほどの男性がアレイスター・クロウリー伯爵か？　噂どおりの勇壮な人物だな」

「うん、そうだよ。すごく、すごく強いんだ。強くて……すごく優しい」

その優しさは容赦なく彼を傷つけるほどに。

乏しい表情の裏でどれだけ血を流してきたか知れない。おれの傷にばかり気を配って、彼自身の傷には触れようとしていない。

そうだよ。だってねえちゃんが死んじゃって、アレイさんが傷ついているはずはないのに。

あのヒトは彼自身を盾にしておれを逃がしてくれたんだ。

ゲブラを撃破したとはいえ、天界の長ケテルと死霊遣いホドがほぼ無傷で残っているだろう。銀髪のヒトも総指揮官だというマルクトも出てきていない。

対してこちらは主戦力だったねえちゃんを失い、アレイさんも重症だったのをブエルさんに無理やり治してもらって万全な状態ではない。

その中では自分のように半人前のレメゲトンの力だって惜しいはずだった。

長だったねえちゃんの代わりを、悪魔を使った戦闘経験の浅いライディーンが務められるはずはない。おそらく、自分とライディーンの二人でねえちゃんの穴を埋める予定だったのかもしれない。

だけど、王様は自分に王都へ帰って来いって言った。

あの紫の瞳の優しいヒトは、一気に増大するであろうレメゲトンへの負担を全部一人で受けるつもりなんだ。

王様もきつと分かっていたはずだ。自分が王都へ戻ればどうなるのかなんて。軍のヒトたちの、とくに敵意を剥き出しにしているヴアルデイス卿の反感をかう事が分かっている、それでも自分のことを守ってくれたんだ。

自分はこの世界を完全に破壊しようとしたのに……！

隣にいるヴィッキーも、王都にいる王様やサンもクラウドさんやダイアナさんも。みんなみんな消そうとしてしまったのに

「王都へ戻るぞ、ラック。ゼデキヤ王がお前の帰りをお待ちだ。もちろん、クラウド団長も」

声を出したら震えてしまいそうだったから、ヴィッキーの言葉にはこくりと頷いて答えた。

胸の中にどうしようもない喪失感を抱えたまま。

王都への道のりは長い。グライアル平原を越えるだけでも数日はかかるだろう。

しかし、このゆっくりとした行程は自分の頭を冷やすのにちょうど

どよかった。

ねえちゃんを失った痛み。自身を盾に逃がしてくれたアレイさん。今も戦場で戦い続ける兵と騎士たち。そして 全てを捨てて逃げ出した自分。

麻痺した心はうまく働いてくれなかった。逃げる事が駄目だとか、一人戦場に残されたアレイさんを助けに行きたいとか、そんな感情はすべて硬直している。これから王都に戻ってどうするかなんてことすら頭に入ってこなかった。

ただ、この爽やかな風が吹き抜ける街道をマルコに乗ってゆつくりと進む……そうして少しずつ麻痺した心を癒していった。

いつしか見慣れた山の形が手の届く距離まできていた。

いや、知っている形を鏡に映したままの ラッセル山。

カトランジェの街からいつも見ていた山の反対側まで帰ってきた。広い広いグライアル平原を抜け、山の麓のラグレアまでやってきた。王都ユダと東の都トロメオとを結ぶ街道上にあるラグレアは、カトランジェより少しばかり栄えた都市と呼ぶには小さい、「大きな街」だった。城塞都市トロメオやその隣の交易都市カインに比べると小規模だが、王都の城下町をぎゅっと小さくしたような雰囲気を持つ歴史の深い街だった。

何よりこの街は、稀代の天文学者ゲーティア「グリフィスの生まれ故郷として有名である。何しろ数百年前の話なので本当かどうかは不明だが、街の中央広場には彼の銅像が立っており、生家があったとされる場所には記念碑が建てられている。

先日トロメオに向かった時は素通りしたこの街で一泊する事になった。

昼過ぎには到着し、キャストさんが宿を取ってくれた。

日暮れまで時間がある。

荷物を宿に置いて一息ついていると、ヴィッキーが部屋にやって

きた。

「この街、ラグレアはゲーティア「グリフィス生誕の地」として有名だ……お前の遠い先祖だろう。少し見て回るといい」

「うん、そうするよ。ヴィッキーも一緒に行こう」

「ああ」

橙の髪的女性騎士は穏やかに笑った。

「シアは？」

「彼女はどこかに出掛けてしまった。一応レメゲトンの護衛ということになっているのだから勝手な行動は困るのだが……困った奴だ」
白髪の彼女は相変わらずほとんど言葉を発する事がなかった。表情も乏しく、いつも何を考えているのかひどく分かりづらい。前髪が長く左目が隠れている事が多いのも一つの原因だろうか。

いずれにせよ、彼女の素性があまり知れないことに変わらない。

サブノックさんに貰ったショートソードだけを携えた。もちろん首からアガレスさんとフラウロスさんのコインを下げていたが、左手は封印するように包帯をきっちり巻いてあった。箒手は戦のどさくさで失くしてしまったし、マルコシアスさんとクローセルさんに貰った羽根は戦闘で焼け落ちてしまっていた。

外はあいにくの曇り空。もしかすると雨が降り始めるかもしれない。

厚い雲に覆われ、薄暗い街の中をヴィッキーと二人でゲーティア「グリフィスの生家」に向かって歩いていった。

「ゲーティア」グリフィスはまだ10をほんの少し過ぎた少年の頃に後のダビデ王、ユダ「グリモワール」にその才能を見出されたと聞かされた彼は、後に黄金獅子と呼ばれるようになるゲーティア少年と共に軍に多大な貢献をしたという。」

「それは、独立戦争の時の話だね。戦争は20年以上続いていたって聞くよ」

「ああ、そうだ。それは悲惨な戦争だったそうだ。トロメオからラ

ツセル山にかけてはセフィロト国の領土だった。当時もセフィラの力に対抗するのが難題だったらしい。そこへ現れたのが悪魔との親和性に並外れた才能を示す天文学者　ゲーティア少年だった」

「おれのご先祖様だね」

「そうだ。彼は１８になるまでに悪魔の召還方法、契約の仕方などの基礎を確立し、また自身も悪魔の召還者として戦に貢献した。他にもたくさん剣士や天文学者の努力が実ってグリモワール王国が建国された。初代王ユダ「ダビデ」グリモワールの名の下に」

雨の気配を感じ取ってか、街にヒトの気配はない。

それとも戦のせいで皆もつと西の方へと避難してしまったのだろうか。

「それがダビデ王３１歳、ゲーティア「グリフィス」が２４歳のときだったと言われている。ダビデ王の協力を得てコインを作ったのは建国後だ」

わずか２４歳　自分が今１８か１９だから、あとたったの５年で７２もの悪魔を呼び出し、コインを作るという偉業をなす力を手に入れたことになる。

「やっぱり……すごいね。おれのご先祖様は」

「そうだな。彼はコインの悪魔以外にも多くの悪魔と親交があったという。あの魔界の王リュシフェルさえ召還したのではないかと言われているほどだ」

リュシフェル、の名にどきりとした。

額がちりり、と焦がされる感覚を覚えた。

ゲブラの言葉を信じるならば、ご先祖様は自分をリュシフェルさんに差し出したのだという。力を借りる代わりに

でもリュシフェルさんはいったいどうするつもりなんだろう。自分の体を手に入れて。

それはずっと不思議に思っていることだった。

SECT・17 ゲーティア「グリフィス」

「ああ、ここだ」

ヴィッキーの声に顔を上げると、すでに家がまばらになるほど街外れまで来ていた。

そして、目の前にあったのは大きな石碑。

自分の身長より大きい漆黒の壁が目の前に立っていた。

「刻んであるのは……^{アルファベット}古代文字だな。読めるか？」

「うっ……苦手」

「キャスト先輩にも来ていただければよかったな。先輩なら古代語に堪能だったのだが」

白抜きで刻まれた、その石碑の文字を指でなぞってみる。

指で感じる文字を読み上げていく。

「H - I - S L - A - S - T W - O - R - D - S……」

単語の意味は分からない。もちろん、なんて書いてあるのか文章は理解できない。

それでも一つ一つの文字をなぞり、声に出していった。

「G - O - E - T - I - A G - R - I - F - I - S……ゲーティア「グリフィス」」

最後に刻まれた名まですべて読み上げ、石碑に額を預けた。

ねえ、ご先祖様。あなたはルシファさんと一体どんな話をしたの？ どうしておれをルシファさんと契約させたの……？

その時、ふと何かが感覚に触れた。

覚えのある感覚。

自分の左手と同じ、アレイさんの右手首と同じ、そして あの
手品師と同じ気配。

その感覚に導かれるように石碑の裏に回る。

「ラック？ どうした？」

ヴィッキーの不思議そうな声がしたが、返事をせずに石碑の裏部

分の地面を掘り起こした。

心臓がどきどきする。

なぜだろう。

無心に地面を掘り続け、足元に土の山が出来る頃。

土の中から一枚のコインを発見した。

後ろからヴィッキーが覗き込んでいる気配があった。

土にまみれた手でコインをこすると、鈍い黄金色をした悪魔紋章が出現した。

「それは悪魔のコインか？」

「うん、ロストコインだ」

詳しい悪魔紋章は覚えていなかったからのコインかは分からないが、縁に大量に刻まれた古代文字の中に悪魔の名が紛れているはずだ。

何故こんなところにコインが埋まっているのか。こんなたくさんのヒトが訪れる観光地に、しかも手で掘れるような浅い場所に。

誰が埋めたんだ？

が、はつとした。

違う。これは一度掘り起こされている。

この部分だけ明らかに土の色が違い、しかも軟らかい。つい最近埋められた証拠だ。

一体誰が……？

コインをぎゅつと握る。

「持って帰ってじい様に聞いてみよう。早く王都に戻らなくちゃ」
そういつて立ち上がると、ヴィッキーの背後に迫った人影に気づいた。

白髪に赤目……鷲部隊のシアだった。

「何だ、シア。どこにいたんだ？」

振り返ったヴィッキーが肩をすくめる。

ちようど空から冷たい雫が降ってくるところだった。

「とにかく宿に戻ろう。風邪をひいてしまつては仕方がない。シアも、ラックも行くぞ」

ヴィツキーがそう言つてぼん、とシアの肩に手を置いた。

シアはかすめるような声で言つた。

「見せて、欲しい。それ……」

シアが指差したのは自分の手の中にあるコインだ。

どうしてシアがこれを見たがるんだろう。

でも彼女が声を出すのは滅多にないことだし、願望を口に出す事なんてほとんど初めてだったから少し躊躇つた後コインを彼女に手渡した。

すると彼女はコインを一通り見た後、地面に紋様を描き始めた。円の中にダビデの星、周囲に描かれた古代文字、そして中央に悪魔紋章。

「シア？」

無表情のまま淡々と作業をこなした彼女はコインをその紋様の中央に据えた。

そして、静かな声で悪魔の名を呼んだ。

「ブーネ」

「?!」

その瞬間コインが粉々に砕け散つた。

驚きに目を見開いていると、シアが地面に描いた魔方陣が発動した。

黒い光が魔方陣から放たれ、その光の中からゆつと大きな頭が飛び出した。

てらてらと怪しげに光る緑翠のウロコに覆われた蜥蜴のような頭には大きな茶色の角が二本生えている。ぎょろりと大きな黒の目が飛び出しており、どこを見ているかも分からない瞳は大きな硝子玉のようだった。

口を開くと真っ赤な舌がちろちろと見え隠れし、黄ばんだ鋭い歯がのぞく。

「黄金獅子の末裔ならば 証を示せ」

大きく裂けた口から震える声が漏れた。

呼び出したのはシアなのに、なぜおれのことを呼ぶ？

しかし、ご先祖様の生家があった場所の地下から発見したコインだ。もしかすると、後世に何かリユシフェルさんに関する手がかりを残しているかもしれない。

サブノックさんに貰った短剣を抜いて手の甲を軽く傷つけた。

血のにじむその傷を差し出すと、ブーネさんと思われる悪魔は真つ赤な舌を伸ばしてそれを舐めた。

「合格」

悪魔の言葉と共に、もう一度黒い光が放たれる。

思わず目を閉じた。

「あー、長かった」

その場に響いた聞き覚えのない声に、恐る恐る目を開けると……

「初めまして、だな。グリフィスの末裔」

目の前に立っていたのは見た事のない青年だった。

年は自分より少し上くらいで、大きく利発そうな金の瞳が煌いて
いる。少し癖のある黒髪が象牙色の肌に映えており、口元に湛えた
笑みには大きな自信が表れていた 誰が見ても認めるであろう美
青年だ。それも近寄りがたい雰囲気はなく、人懐こい犬のような空
気を持つ人好きしそうな雰囲気を持っていた。

少し見上げるくらいの身長はクラウドさんと同じほどだろうか。

フードがついた漆黒の短いローブをかぶり、ゆるい麻のスボン、足
元は裸足だった。その簡素な服に似つかわしくない、綺羅めかしい
銀の腕輪を左手首につけているのが不似合いだった。

いったい何が起きたんだろう。

悪魔のブーネはどこに行っ たんだ？

先ほどの黒い光は？

そして目の前のこの青年は……

「誰？」

そう聞くと、その青年は楽しそうに笑った。

まるで太陽のように明るい笑顔だった。

「おれはゲーティアⅡグリフィス。おまえの名前も教えてくれるか？ おれの子孫」

一瞬理解できなかった。

もちろんゲーティアⅡグリフィスという名に嫌と言うほど聞き覚えがあった。

「何？ 今ブーネ使ったんだろ？ あいつは死者を呼び出すからな。ずっと呼び出されるのを待ってたんだよ」

「ああ、じゃ、やっぱりおまえおれのご先祖様なんだ」

「だからそう言ってるじゃねえか！」

突然現れたご先祖様は頬を膨らませた。
本物だ。

びつくりしたけれど、すぐに嬉しくなった。

「おれ、ラックⅡグリフィス。えと、初めまして？ だよね」

「ラックか。へへ、やっぱりおれの子孫だ。美人だな」

ご先祖様はすっと手を伸ばす。細長い綺麗な指が頬に触れた。その感触がくすぐったくて思わず笑う。つられるようにご先祖様も笑った。

「おまえには迷惑かけたな。ルシファに会ったか？」

「会ったみたいだけど、実はよく覚えてないんだ。4年前に全部記憶をなくしちゃって、契約した頃の事は分かんない」

「そうなのか？」

ご先祖様はビックリしたみたいだった。

頬に当てていた手を額にずらして、じっと見た。

「じゃあ何も聞いてないんだな。契約の事も、魔界の事も世界の理も」

「うん」

「まいったなあ。どういっつもりだ、ルシファ」

少年の響きを残した声もよく耳に馴染んだ。

よくよく見ると、このヒトの顔はいつも鏡の中で見る自分の顔にそっくりだった。

「あいつの事だからのっぴきならない事情でもあったんだろ。今隠れてるのにも理由があるんだろうな。んじゃおれは何も言わね」

「えっ！ 折角だからいろいろ教えてよ！」

しかし、答える代わりにぺろりと舌を出したご先祖様はふと首をかしげた。

「だが、何も分からないならなんでおれを呼び出せた？」

「それはおれじゃなくてシアが」

そう言っ隣に佇む白髪の彼女を指差すと、ご先祖様は目を大きくして驚いた。

SECT・18 シンシア＝ハウンド

そうしてご先祖様は一瞬シアを睨んで、肩をすくめた　　陰悪な
雰囲気がある場を包む。

「何でここに？」

「どうということ？」

そういえばシアは何者なんだろう。契約もせずにコインの悪魔を
呼び出して、しかもこうやってご先祖様を呼び出せるのが分かつて
いたかのように。

一瞬だけまじめな顔でシアを睨んだご先祖様は、すぐに笑顔に戻
って自分の方を向いた。

「ちなみに今、グリモワールは何代目だ？」

今の王様が何代目か分からず、となりのヴィッキーに助けを求め
ると、彼女は目の前の光景が信じられずに呆けていた。

「ヴィッキー、ゼデキヤ王って何代目なの？」

大きな声でもう一度聞くと、ヴィッキーははっとして慌てて答え
た。

「あ、ああ、22代目だ」

「そうか。ま、そんなもんだらうな。ルシファの言ったとおりだ」
ふう、と息をついたご先祖様はにこりと笑った。

「がんばれよ、ラック。おれに出来なかった事をお前がやるんだ。
この国を救える可能性を持っているのはお前と、レティの子孫だけ
だ」

「レティの子孫で、アレイさんのこと……？」

「アレイ？ その名は知らんが、おれの先見が確かなら、3つの希
望のうちグリモワールの末裔はファウストと二つに別たれて消滅し
たはずだ」

消滅。

その言葉にどきりとした。

きつとそれはねえちゃんのことだ。二つに別たれたっていう意味は分からなかったけれど。天使さんや悪魔さんの口からとてもよく聞く言葉だが、いまだにその真意を掴みかねていた。

「おれとレティとユダが国の存続をすべてお前たちに託したんだ。だいじょうぶ、ルシファとマルコがいる。メフィは微妙だが助けてくれるだろう。あとは……バアルはどうしている？ あいつならおまえを助けてくれるはずだが」

突然たくさん名前が出てきたために混乱した。

レティっていうのはアレイさんのご先祖様のレティシア「クロウリー」さんだろう。ユダはきつと初代ダビデ王だ。ルシファは自分の額に印を刻んだリユシフェルさんのこと。マルコはアレイさんの使うマルコシアスさんのことだろう。

じゃあ、メフィとバアルは誰だ？

眉を寄せると、ご先祖様は困ったように笑った。

「おまえは本当に何も分からねえみたいだな」

「ごめん、たぶん今聞いてもわかんないよ。それと、コインはずいぶんなくなっちゃった。ねえちゃんとアレイさんがずいぶん探したらしいけど、今は20個ちよつとしかないみたい」

「うわ、マジでか。そりや大変だ」

ぜんぜん大変そうに見えない表情のご先祖様はそう言って肩をすくめた。

「んーでもおれはもう逝くからなあ。輪廻を無理に外れてたからな、もうそろそろ戻らないといけねんだ」

「どうしたらいい？」

「とりあえずバアルを探して聞け。もしくはマルコでもいい。他に墮天がいたら詳しく聞いてみるといい。教えてくれるかは別だが」

そういつて満足げに頷くと、ご先祖様の姿が揺らめいた。

「もう行っちゃうの？」

「ああ、戻らないと。役に立てなくて悪かったな」

まさに刹那の邂逅だった。

知っていたらもつといろいろ調べてから会えただろうか。こんな慌しい時でなければたくさんのことを教えてもらえただろうか。

足元から少しずつ消えていくご先祖様　稀代の天文学者、ゲーティア「グリフィス。

彼は最期にずっと黙って会話を聞いていたシアのほうを睨んだ。

「どうしてここににいるか知らないが、こいつに手を出したらルシファが黙っちゃいないぜ」

それは脅しの文句。

どうしてシアに、と聞く前に不敵な笑顔が空気に溶けるように掻き消えていった。

すでにぼつりぼつりと雨が降り始めていた。本降りになるのは時間の問題だ。

「……シア、どうしてコインの使い方が分かったの？」

ポツリと呟いた言葉に返答はなかった。

いつものように全く表情を見せないシアはふわりと左目にかかる髪をかきあげた。

ヴィツキーがさつと動いて自分を背に庇うように立った。

「シア、答える。ラックに危害を加えようと企てているのは本当か？」

正体は分からなくとも、いまのご先祖様の言葉を信じるならシアはとても味方とは思えなかった。

緊張した空気が張り詰める。

シアは全く表情を変えなかった。抜けるような白い肌に紅梅のような色をした瞳、それと対比するような漆黒の騎士服。

睨み合うヴィツキーとシアの間にはまだ迷いがある。

自分だって今の状況が飲み込めない。

どうしてご先祖様はシアを敵視するような事を言ったんだ？どうして彼女はコインの悪魔を召還する方法を知っていたんだ？

「シア、お前は何者だ？」

厳しいヴィツキーの声はかすかに震えている。

ヴィツキーにだって信じられないだろう。だって、漆黒星騎士団
ブラックルビー
で2年間苦楽を共にした仲間だ。朝の鍛錬も鷺部隊への出稽古もず
っと一緒にこなしてきた大切な 混乱し、信じられない気持ちで
いっぱいのはずだ。

ところが、シアの口からは思いもしない言葉が飛び出した。

「謹慎を解いてやる。来い、ティファレト」

ティファレト。

さつと血の気が引いた。

その名は、だって……

「黄金獅子はどうやらオレの正体に気づいてここでは何も言わなかつたようだな」

言葉をすらすらと紡ぐシアの姿に、全身を衝撃が貫いた。

「2年もかけてグリモワールに入り込んだというのに、あの男にすべて無にされてオレは今機嫌が悪いんだ」

「シ、シア……？」

とても無口な彼女の言葉とは思えない。

しかも、いま白髪の彼女は何と言った？

グリモワールに入り込んだ、そう言わなかったか？

「お前、セフィロトの回し者か」

震えるヴィツキーの声。

シアの返答はない。

そして、考えうる限りにおいて最悪の事態が訪れようとしていた。

「ヴィツキー、逃げて。お願い、この街のヒトを避難させて欲しい」

「何だと？」

来てしまつ。あのヒトが来てしまつ。

心臓がばくばくいつている。

「早く！」

悲鳴を上げるように叫んで、ヴィツキーの後ろから飛び出した。
来る。

あのヒトが。

「銀髪のヒト」

ポツリと呟いた先に、凄まじい光と共に姿を現したのは背に6枚の翼を湛えた銀髪のセフィラの姿だった。

久しぶりに見る銀髪のヒトは尋常ではない威圧を放っていた。
今なら分かる。

天使の加護を受けると、あの二人は一つになるんだ。まるでカミエルさんがフラウロスさんに吸収されて蒼い炎と化したように、二人が物理的に一つに融合してミカエルさんの加護を得る。だから自分とはどちらが加護を受けたのかを見分けられなかった。

心臓がドキドキいつている。額が熱くなる　ルシファが、あの双子に加護を与えた天使ミカエルさんに反応している。

きっと、ミカエルさんはルシファの片割れなんだろう。

だからこんなにも強烈に引き合うんだ。

今なら呼び出せる気がする。

ご先祖様が言う事が本当ならば。

「ルシファ、力を貸して。いるんでしょ？　おれの中に！」

自分の内側に呼びかけた。

力の奔流が静かに、でもすごい速度で全身を駆け巡った。全身が温かい空気に包まれる。それと一緒に今にも爆発しそうな感情が自分の中に放り込まれて、息が詰まった。

その衝動を押さえ込んで銀髪のヒトを睨みつける。

大きく息を吐いて気を落ち着けた。

「やっと会えたな、レメゲトン！」

「ほんとだね」

会いたくて会いたくて焦がれた相手。

美しい銀髪に、高名な芸術家が造った彫刻のように整った顔立ち。そして覗き込む事を許さない深い群青の瞳　セフィラ第6番目、

ティファレト。

自分の中を駆け巡る感情を冷静に見つめる。

うん、やっぱりこのヒトに会いたかったのは、自分じゃない。

それでも暴走しそうな気持ちは自分に加護を与える悪魔から流れ込んでくる。

カマエルさんを前にしたフラウロスさんと同じだ。

「いいよ、ルシファ。外に出て。ミカエルさんと思う存分戦って」
そう言うと、自分の中から一気に何かが飛び出していった。初めての感覚に全身を稲妻に貫かれる衝撃が駆け巡る。

かすかに残る加護を確認してからふと自分の隣を見上げる。

夢の中で見たルシファさんの姿があった。

哀愁を帯びた顔はやはり銀髪のと酷似している。瞳は深いコバルトブルー、ゆるく波打つ銀髪が陶器のように白い肌を彩り、背には純白にほんの少し闇が溶けた色をした6枚の翼を湛えている。セフィラの神官服に近いかつちりとした純白の服を纏い、神々しいまでのオーラを周囲にはなっていた。

本降りになった雨が降り続けているというのにルシファは全く濡れていない。それどころか雨粒を弾いて銀の光を反射させ、煌いているようにも見える。

ため息をつくほど美しい姿から視線を戻すと、そこにも同じ姿の天使の姿があった。ただ、自分の隣にいる墮天の悪魔と違うのはその背の翼がまじりつけのない純白である事。

歪んだ鏡に映したような一対の天使　悪魔。

「やっと会えましたね　兄さん」

「そうだね　ミカエル　ずいぶんかった」

優しい顔をしたルシファはミカエルに微笑んだ。

息を呑むほどに美しい笑顔だった。それも悲哀を含んだ壊れそうに危うい微笑。

そしてミカエルさんは、シアのほうを向いて言った。

「サンドルフォン　兄さんは私に任せて　いただけますか」

「いいだろう」

シアが無機質な声で答える。

ぞわり、と背筋が凍った。

「サンドルフォン？」

自分の記憶が確かならば王国の天使サンドルフォンは第10番目マルクトが使役する天使の名だ。しかもアレイさんはマルクトが今回のセフィロト軍総指揮官だと言った。

目の前にいるのはずっと自分たちと同じ騎士団の仲間だと信じて

いた、白髪に赤目の少女。

それなのに

「紹介がまだだったな。オレはセフィロト国の神官マルクト。王国の天使サンダルフォンを使役する」

急に雄弁になってしまったシアに言葉が出なかった。

まさかシアがマルクトを名乗るなんて……でも本当だとしたら、じゃあ、今戦場で指揮を執っているのはいったい誰なんだ？

白髪の彼女の背後に金の光が閃く。ケテルと同じ金の輪を背負ったシアは、これまでと全く違う雰囲気纏っていた。

明らかな敵意が向けられて反射的に胸のコインを握り締めた。

心臓がバクバクなっている。叩きつける雨の音がただの背景になってしまふくらい強烈な心臓の音が耳元で鳴り響いた。

「何が目的なの？ 寮ではずっと同じ部屋にいたんだから、何でも出来たはずだよな？ それこそコインを盗るのだって……おれを殺すのだって簡単だったはずだ。でもシアはそうしなかった。じゃあ目的はおれの命でもコインでもないんだろう。じゃあ、何？」

もっと他のヒトを狙ってたの？それとも他のモノが欲しかったの？ いったい何がしたかったの？

が、唐突に気づいた。

「ルシファ……？」

もし狙いが自分の隣に浮かぶこの壮麗な堕天使だとしたら。魔界の王と呼ばれるこの悪魔が自分の中から出てくるのを待っていたとしたら。

理由は分からないけれどルシファを消そうとしているのなら。

全く分からなかったけれど、それだけはいけないと思った。この魔界の王がいなくなったらすべてが崩壊してしまう気がした。

それだけは避けなくてはいけない。

「させない」

魔界を創ったのはこのルシファらしい。

だとしたらこのヒトがいなくなってしまうたら、きつと何かとてつもない事が起きる気がした。それこそ世界が崩壊してしまうかもしれない。

自分の全部をかけて止めなくちゃ。

「フラウロスさん！」

灼熱の炎が自分の中に燃え滾る。が、すぐにその炎を支えきれず自分の外へ飛び出していった。

蒼い炎を纏った獣が大きく吼えながら出現し、地面を焼きながら着地した。オレンジの毛並みに触れる前に雨が蒸発していく。大きな蒸気が立ち上り、あたりが白い霧に包まれた。

凄まじい熱風に襲われ、思わずルシファの近くまで飛び退る。マルコシアスさんとクローセルさんの加護がとつくに焼け落ちてしまっていたのを忘れていた。

心臓が速い。

「邪魔をするなら容赦しない」

抑揚のないシアの声で、この空間を支配する重圧がさらに増した。魔界の王ルシファ、その片割れ美の天使ミカエル、峻厳の天使力マエルを滅ぼした灼熱の獣フラウロス、そして天界の長メタトロンと並び称される王国の天使サングルフォン。

凄まじい力のぶつかり合いがこの狭い空間で起きている。

その反発を感じ取ったのか、左手甲のコインが熱くなる。

だめだ。ここにラースを加えたらとんでもないことになる。それこそラグレアの街など簡単に吹っ飛んでしまうだろう。この時点で既に体中がはじけ飛んでしまいそんな感覚で今にも逃げ出したいっていうのに！

どうやらルシファさんの加護もフラウロスさんの加護もある程度自分の中に残っているようだ。この感覚でいくとおそらく千里眼も使えるだろう。

怒りと悲しみがごっちゃになった感情が全身を支配した。

その衝動に任せて両腰のショートソードを抜き放つ。

すぐ傍でフラウロスさんの炎を防ぐように浮いているルシファは漆黒の剣を手にしていた。揺らめくような刃はマルコシアスさんの持つ刀とよく似ている。きっと実体ではなく幻想として創られているんだろう。

それに相対するミカエルさんは銀色のブレイドを手にしている。

銀髪の人も同じ色のブレイドを持っていた。

シアの手に武器のようなものは見えないが、彼女は、サンダルフォンはどんな力を使うんだろう。

ルシファは悲しげなテノールで目の前の天使に告げる。

「ミカエル サンダルフォン 未だ戦闘は望まない 退いてくれな
いか」

「何を言うのです 兄さん」

同じ顔をしたミカエルさんは銀の髪を揺らして首を横に振った。

ブレイドをルシファに突きつけて、美しい涙を一粒流した。

「消え行く世界に加担し 幻想を抱き 未だ柱も立たず 揺らいで
いるというのに」

「希望がある 未だ残る末裔達が 先を見据えている」

「枷を掛けるのですか 重い十字を背負わせて あの エノクのよ
うに ここにいるエリヤのように」

ミカエルの言葉に、ルシファは最期の微笑を見せた。

胸を裂く笑みだった。

「黄金獅子ゲーティアの末裔ルーク すべてを貴方に託しましょう」

「何……？ おれ、何をしたらいいの？ ルシファ、おれに何をし
て欲しいの？」

「私が望むのは 世界の安定だけです」

ゲブラと同じだった。

このルシファという悪魔の望みはとも分かりづらい。一体何を望んでいるのか。それは俺に出来る事なのか。どうすればこの美しい悪魔の望みをかなえられるのか

どうして自分の周りにいるのは傷を隠そうとする人ばかりなんだろう。

悔しい。

いったいどうしたらみんなの笑顔が見られる？

「優しい子 だから貴方は 光^{ルック}の名を持つのです 全てを照らし救いを与える L・U・X」

「ルシファ？」

「この世界は長く持ちません あなたが支えてください」

温かい手が額に触れた。

この光に、指に覚えがある。

額が熱くなる。

「ミカエルは 私が止めましょう」

加護を受けた体は軽い。いまならどんなに強い敵でも負ける気がしなかった。

いつの間にか飛び掛ってきていた銀髪のヒトのブレイドを受け止めたのをきっかけに、ラッセル山の麓、ゲーティア・グリフィス生誕の地で人知を超える闘いが勃発した。

雨は留まる事を知らず、戦場に降り続いている。

フラウロスさんがサンダルフォンを召還したシアに向かっていく。蒼炎を吐く獣は、しなやかな体を生かして今にも折れそうな細身のシアに飛び掛った。

が、爪が届きそうになった瞬間、フラウロスさんの体は弾かれるように吹っ飛んだ。

「！」

獣はすぐに体勢を立て直して地面に着地する。凄まじい蒸気が上がって、吼えた獣は天に向かって蒼炎を高々と吐いた。

オレンジの毛並みに纏わり付く蒼い炎はひどく禍々しい。

「貴様の相手は俺だ！」

気をとられた一瞬、銀髪のヒトが打ち込んでくる。

両手のショートソードをクロスして受け止めると、加護を受けているにもかかわらず重い衝撃が全身に加わった。

「くっ……」

ヒトのことを見ている場合ではない。

シアはフラウロスさんに任せて自分は銀髪のヒトを何とかしないではいけない。

そう思った瞬間、体がふわりと宙に浮いた。どうやらルシファの加護で飛ぶことも出来るらしい。

「行くぞ！」

全身を高揚感が駆け抜けた。

そのまま両手に剣を構えて空から銀髪のヒトに向かっていった。

SECT・20 銀色の真実

風燕^{ふうえん} マルコシアスさんはおれの姿にそう名をつけた。地面から解き放たれた時、おれの剣術は真価を発揮する。

打ち掛かってくる銀髪のヒトに、はじまりの朝を思い出す。

自分が新しい世界に飛び込む直接の原因となった邂逅。

「もう、会いたいなんて言わないよ」

だってこの感情はルシファのものだったから。自分の感情と混同する事なんてもうしない。目の前にいる銀髪のヒトは、グリモワールを傷つけようとする敵国セフィロトの神官だ。ここで天使の加護を引き剥がさないといけない。

銀のブレイドをすれすれのところで避けながら、必殺の間合いをはかる。

天使の印はどこだ？

千里眼を使おうか いや、まだ早い。使える時間に限りがあるから、ぎりぎりまで使わないほうがいい。奥の手は最後までとっておくんだよ、とはクラウドさんの言葉だ。

本当に本当に最後の手段は出来れば使いたくないけれど。

そう考えると自分は強くなったと思う。

一年前に成す術もなくやられた相手と、一定の距離と理性を保ちながら戦う事が出来るのだから。しかも、たくさんの奥の手を残しながら。

「死ね！」

憎しみ全てを乗せて吐き出された言葉と共に向けられた刃をすれすれで交わし、上空から奇襲を掛ける。

両手の剣が弾かれた後、さらに踏みつけるような蹴りを放つ。

さすがに受け切れなかった銀髪のヒトは地を蹴って上空に飛び上がった。

上下逆転。

この高速移動の中では、右も左も、それこそ天も地も関係ない。空間を目いっぱいに使って、全身の感覚を最大限に開いて。

ブレイドとショートソードが凄まじい音を立ててぶつかり合い、その反動で吹っ飛んだ。

すぐ体勢を立て直して銀髪のヒトを睨む。

憎しみの籠った眼差しに貫かれ、思わず叫んだ。

「おまえがおれを狙うのは、おまえ自身の感情じゃないだろう?!」
自分と同じ、天使のミカエルさんから流れ込んできた感情のほずだ。それに気づけば、このヒトはこんなに自分を憎むことだってないはずだった。

ところが、銀髪のヒトはその言葉を聞いて口元で微笑んだ。

「グレイシャーIIルシファIIグリフィス、だろ? お前」

これまでの激情を撒き散らす台詞とは全く違う冷たい口調だった。エネルギーを秘めていた銀色の光が収束し、鋭く冷たい刃のように研ぎ澄まされた。

銀髪のヒトの裏に隠された二面性を肌で感じて冷やりとした。

「グリフィスの末裔……僕らを迫害したグリフィス」

「?!」

「忘れもしないよ。それに忘れたとも言わせない」

「何の話をしてるんだ?」

「君だっけ見たはずだ。僕らがいた、あの場所。森の中に隠した僕らの集う場所」

「森の中……?」

森。隠された。迫害。天使。
はっとした。

カトランジエの北、クラインの森の一角にひっそりと隠れるように佇む教会。銀髪のヒトたちが自分を監禁した場所。天使崇拜の人々がかつて集った場所。

「まさかお前」

そのすべての情報は、信じられない結論を導いた。

「グリモワール出身なのか？ ああ、カトランジェのレグナの住処

」

「ああ、よかった。忘れていないようだね」

銀髪のヒトは満足げに笑った。このヒトが笑うのは初めて見る気がした。

剣を持つ両手が震える。

銀髪のヒトは、あの捨てられたレグナの森で生まれ育った。天使崇拝のヒト達に囲まれて。でも、その結末は 自分は実際目で確かめてきた。

迫害。

それを起こしたのは、ラッセル山中に屋敷を構えていた今は亡きグリフィス家。

この銀髪のヒトたちは、生き延びてセフィロト国へ逃げ込んだのだろう。

「ミカエルの感情じゃない。これは僕らの復讐だ」

冷たい声に、背筋が思わず凍りついた。

一度冷たく収束した銀のオーラが、また爆発的に燃え盛る。

「貴様だけは殺す！」

包み隠さずぶつけられた憎しみに、足がすくんで動かなくなった。天使崇拝のヒトたちを迫害したのは、自分と同じグリフィスの名を持つ者たちだった。頭の中を衝撃が貫いた。

何てことだろう。あんなに心痛めた迫害を引き起こしたのが自分の家族と呼べるヒトたちが引き起こした事だったなんて！

足が震える。

憎まれても、仕方ない。

「……ごめん」

喉から漏れたのはそんな言葉だった。

それ以外の言葉を自分は知らなかった。

感情をむき出しにして怒り、恨み、殺意をあらわにするこのヒト

に向ける言葉を知らなかった。

震える手からショートソードが滑り落ちる。

かららん、と軽い音をたてて剣が地面に落ちた。

「自ら命を捨てるか！」

高らかに笑う銀髪のヒトを真直ぐに見られなかった。

きつと大切なヒトをたくさん失ったんだろう。誰を恨んでいいかも分からなかったんだろう。ねえちゃんをなくした自分が世界を壊そうとしたように、絶望に包まれて……

全身が震えた。

「ごめん」

語尾も震えていた。

最高位の天使と悪魔が入り乱れるこの空間で自分だけが戦闘放棄していた。ルシファとミカエルさんの力のぶつかり合いも、サンダルフォンに向かうフラウロスさんの炎の勢いも。

すべてがぶつかり合う中で俯いた。

「ならば死ね！」

銀髪のヒトのブレイドが迫っていた。

すべてがはじまった、あの朝と同じだ。死を覚悟した。

しかし、いくら待っても痛みは襲ってこなかった。

おかしいな、と思って目を開ける。

最初に目に入ったのは黒いシルクハット。

「本当に、何をしているんですか」

そして聞こえたのは、ここにいるはずのない人物の声。

視界に入るのは黒いステッキ、白い手袋、細身のシルエットの燕尾服。

「こんなところで諦めたら、もう一人の大切な人も失う事になりますよ？」

「ゲブラ?!」

目が覚めた。

なぜ加護を失ったはずのセフィラがここに？！

「仕方ない人ですね、これで僕はセフィラに攻撃した反逆者だ。もうセフィロトに戻れなくなっちゃったじゃないですか」

困ったように笑う手品師^{マジシャン}は、黒いステッキで銀髪のヒトのブレイドを弾いた。

たったそれだけで、ぴいん、と高い音がして銀髪のヒトの体が後ろ向きに吹っ飛んだ。

「……何で？」

「何故だと、思います？」

にこりと笑った手品師はずっと嵌めていた白い手袋をはずした。すると、黒々した刺青状の悪魔紋章が姿を現す。

「僕が悪魔に魅入られてしまったたからですよ」

手品師はにこりと微笑んだ。

その微笑に声を失った。

天使と悪魔、両方と契約していたこのヒトの葛藤は計り知れない。いったいどんなことがあつてこうなったのかは分からないが、きつと苦労したはずだ。大切な人もたくさんなくしたんだろう。

「こんなところで命を落とさないでください。悲しむ人がたくさんいるのを忘れましたか？ あなたがあ金の瞳の瞳の女性を失って絶望したように、あなたを失えばたくさんの方が光を失うでしょう」

そう言われてはつとした。

紫の瞳の優しいヒトを思い出す。

「あなたは守りたいんでしょう？ この国を。たくさんの人を。だつたら、ここで彼らの復讐を遂げさせてはいけません。ここで復讐を許せば、復讐の連鎖は途切れることなく続いてしまう事になる」
まるであの紫の瞳を持つ優しいヒトのようにこうやって優しく諭してくれるこのヒトが望む世界の安定が、グリモワールもセフィロトも安定する事を差していたら。

自分と同じことを願ってくれていたとしたら。

「人を傷つけない気持ちに分かります。でも、あなたは生きる限り何かを選択しなくてはいけないのです」

あの紫の瞳のヒトも、一番大切なものを選ぶ、と言った。欲しいもの全部手に入れようとするな、と。

だからおれは

「ありがとう、ゲブラ」

見失ってしまうところだった。

「おれは銀髪のヒトを倒して、戦場に戻るよ」

自分がずっと目指していた事　大切なヒトと肩を並べて戦うために。大切なものをこの手で守るために。

「負けない」

絶対に負けないため、戦わなくちゃいけない。

もう一度見つめた先に、銀のオーラを纏ったセフィラの姿があった。

SECT・21 過去との決別

「邪魔をするな！ ゲブラ！」
手品師に向かってそう叫びながら、銀髪のヒトが打ちかかってきた。

地面に転がっていたショートソードを拾い、そのままクロスしてブレイドを受け止める。
負けられない。

このヒトの憎しみを受け止めて、その上で天使の加護を引き剥がす。それこそがきつと自分に新しい世界を教えてくれたこのヒトへの礼儀だ。

銀髪のヒトからは、裏切った元セフィラに対する留まる事のない罵詈雑言が飛び出してくる。

ゲブラはそれを聞きながら少し悲しそうに微笑んだ。

「可哀想なティファレト。二人に別れたばかりか帰る故郷も失って」
手を出すつもりはないらしい。

しかし、シルクハットを深くかぶりなおした手品師は悲しげな声でポツリと呟いた。

「せめて、天使も悪魔も忘れて新しい生を受けて欲しいものです」
そうするにはきつと加護を引き剥がせばいい。どうしてそう思ったのかは分からないが、加護を失う事で全てがリセットできる気がした。

もう迷わない。

はじまりのきっかけになった銀髪のヒト、その加護を引き剥がしておれば次のステージに進んでみせる！

感覚を集中した。

もともと鋭いおれの感覚は、悪魔の加護を受けて人知を超えたものとなる。

千里眼

突如周囲の時の流れがぐんと緩やかになった。先ほどから降り続く雨粒が一粒一粒弾ける様子さえ見て取れる。感覚を支配する絶対時間。

雫を湛えた銀髪が一筋一筋まで緩やかに波打つのが見えた。銀のブレイドが迷いなくこちらに向けられている。

探すんだ、ほんの少しの違和感を。ねえちゃんと過ごした日々ずっとそうしていたように。

緩やかに動く銀のブレイドをすれすれでかわして懷に飛び込み、ショートソードの柄で殴打を加える。が、それは丈夫な手甲で防がれた。

その瞬間、何かが感覚に触れる。

距離を置きながら考える。

今、一瞬の違和感は何？

もう一度構えて今度は空から奇襲をかけた。

両手に体重をかけて思い切り振り下ろした。

金属のぶつかり合う音が頭に響く。慌てて聴力のレベルを下げながら一步引いて、今度は左の突き、ガードの開いた左脇に回転蹴りを放つ。

ところが、受け止めてしまえるような軽い蹴りを銀髪のヒトは怖がるようにしてバックステップで避けた。

左側を、庇っている？

庇う理由は一つしかない。そこに、傷つけられたくないものがあるからだ。

きっと先ほどの違和感の正体も、無理に左側を庇っていた事による不自然な動きだったんだろう。庇う動作はどうしても、どんなに気をつけても分かってしまう。

左側、どこ？

空から怒涛のような攻撃を仕掛ける。

足じゃない。手も違う。そうだったらこんなにも軽快で途切れる事のない攻撃は出来ない。

あとは、頭、顔、胸。

見つけた。

天使の刻印。

あれを切り離せば、ミカエルさんは天界へ帰ってしまうはず。そして、このヒトを

全身に加護が滾る。

もう残り時間は少ない。迷っている場合ではない！

渾身の力を込めて左手のショートソードを投げた。

驚いた顔をした銀髪のヒトが飛来したショートソードを弾いている間に左側頭に上段蹴りがヒットする。

今だ！

両肩に手を置いて、地面に押し付けるようにして馬乗りになった。同時に千里眼をとく。

急に目まぐるしく回転し始めた世界で、銀髪のヒトの体が凄まじい勢いで地面に叩きつけられた。右手に握っていたショートソードの柄が左肩に食い込み、ごき、と鈍い音がした。

土埃が辺りに舞った。

ずっと降り続く雨が、宙に舞った土埃を荒い去っていく。

「……最初の時と逆だな。やっぱりあの時殺しておけばよかった。君がこんなに強くなっちゃう前に」

冷静な声は、きつと半目の青いオーラのヒトの人格だ。

馬乗りになった状態で、銀髪のヒトの両肩を渾身の力で押さえつけた。

「はあ、はあ……」

息を整えながら右手に残ったショートソードを振り上げる。

そしてそのまま思い切り振り下ろした。

がざり、と鈍い音がして、手に衝撃が伝わる。

銀髪がはらりと地面に落ちた。

「どうした？」

陶器のような頬に一筋、赤い線が走っていた。その筋は雨に触れ、みるみる滲んでいく。

顔の真横に刺さったショートソード　かすかに頬を傷つけたその刃は、地面に突き刺さっていた。

分かっている。天使の刻印を傷つけないといけない事は。

しかし、心臓の上に刻印された天使の印を切り離す事はできない。もしこの印に刃を突き立てればそのまま命を絶ってしまうだろう。

殺せない。どうしても、命を絶つことだけはできない。

ねえちゃんを殺した敵国のセフィラだというのに。すでにこの手でどれだけ命を奪ってきたか知れず今さらと思うのに

「殺せよ。貴様の勝ちだ」

あのときからずっと変わらない、深くてよく通る声が響いた。

深い群青の瞳。覗き込む事を許さない深淵の色。

「うあああああ！」

思わず大気を震わせて叫んだ。

感情が渦を巻いて外に飛び出していった。

「フラウロスさん！」

灼熱の炎を両手に纏って、思い切り胸に押し付ける。

「がああああ！」

その瞬間、銀髪のヒトの口から苦痛の声が響き渡った。

白い服が燃え上がり、じりりと肉のこげる音がした。

自分の下にある体からぐりと力が抜ける。

押し付けた両手からも煙が上がっていた。感じる痛みから、自分の手もダメージを受けたのはすぐに分かった。が、そこから手を離す事はできなかった。

かすかに両手に鼓動が伝わってきた。だいじょうぶ、死んでいない。ただ皮膚の刻印を焼いただけ。

それなのに視界がにじんだ。

この涙は、何？

「う……っ」

嗚咽が漏れた。

ぼたぼたと陶器の頬に雫が落ちる。雨か雫か。頬を温かいものが伝う。

「ごめん…… なさい」

これは一体何に対する懺悔だろう。

今この手で天使の加護を奪ったこと？グリフィス一族が迫害したこと？それとも、命を奪えなかった自分の弱さ？

いずれにせよ、この言葉が自己満足だということくらい分かっていた。

「泣かないでください、クロウリー伯爵に叱られてしまいます」
手品師の声が聞こえた。

いつしかこの場に静寂が訪れている。

ふと顔を上げると、サンダルフォンとミカエルの姿は消え、ルシファとフラウロスさん、それとシルクハットの^{マジシャン}手品師だけが佇んでいた。

涙を拭いて立ち上がる。

一瞬目を話した間に、銀髪のはきは折り返すように二人に分かれていた。まるで互いを守るように両手を伸ばしたその姿に、また胸が痛くなる。

震えそうになる肩を抱いた。それでも、自分は前に進むと決めたんだ。

「行こう。戦場に戻ろう」

ルシファさんを、フラウロスさんを、そしてゲブラを見た。

「大切なヒトを助けるんだ。もう……迷わないよ」

始まりの朝に出会ったヒト。あの朝を経たから自分はレメゲトンになり、悪魔さんたちと歩むことになったんだ。

新しい世界に飛び込むきっかけになったヒト。

おれはその世界を守るためにこのヒトを傷つけた。自分が勝手に選んだものを守るために。

「…………ごめん」

最後にポツリと呟いて銀髪のヒトたちに背を向けた。

凄惨な闘いの跡が残る中、静かに雨が降り続いていた。

SECT・22 ただいま

雨の中、オレンジの髪的女性騎士が駆けてきた。

あまりに凄惨な現場を見て、眉をひそめたのがわかった。ミカエルさんとルシファがどんな戦いを繰り広げていたのか見る事はなかったが、周囲の破損具合から見て相当飛び回っただろうことは明白だ。石碑は完全に粉砕し、地面も抉れ、周囲の草木は根こそぎ吹き飛んでしまっている。

フラウロスさんの炎もかなりの範囲を焼いてしまったようだが、ここが街の中心部でなかったのは幸いだった。隣の民家との距離があつたためほんの2・3棟焼いただけで済んだのは奇跡に近い。

「街の人間に被害は出ていない。ほとんどがすでに戦から逃れ北のほうへ移動した後だったようだ」

「そう」

笑おうとしたが、無理だった。笑顔がこわばってしまう。

ヴィツキーは落ちていた左手のショートソードを拾い、手渡してくれた。

「やはりお前は戦場へ戻るんだな」

「……」

答えることは出来なかったのに、ヴィツキーはどこか安心したような顔をしていた。

「初めて会った時、お前は言っただろう？ おれは早く強くなつて戦場に行かなくちゃいけないんだ、と」

剣を両方鞘に納めた。二人の悪魔さんの加護を受けていた籠手を失くした今、おれに残された武器はこの二本のショートソードだけだ。

「行け、ラック。ここは私とキャスト先輩で何とかしておく。もちろん、ゼデキヤ王にもクラウド団長にも言っておこう」

「ヴィツキー……」

「私もこの国が大好きなんだ。頼んだぞ、ラック　レメゲトン、ラック」グリフィス」

ぽんと肩に手を置いたヴィッキーを見て、唇をかみ締める。
首に下げた2つのコインをぎゅっと握った。

「分かった」

もう逃げない。

自分の持つ力全部ぶつけてやる。

左手にずっときつく巻いていた包帯をほどいた。赤黒く血管の浮いた、コインの左手甲があらわになる。

ほどいた包帯をヴィッキーに渡して、言った。

「マルコもお願い。あいつに乗って行きたいけど……それじゃ間に合わない」

「承知した」

ヴィッキーの返事を聞いたら満足した。

一つ、大きく深呼吸。

「じゃあ、行つてくるよ」

最初に契約した墮天の老紳士の名を呼ぶと、肩に金目の鷹が下りてきた。

「行こうか、アガレスさん」

ヴィッキーに手を振り、空に飛び上がる。

叩きつける雨が冷たい。

気がつけば隣にゲブラが浮いていた。同じ時間雨の下にいるはずなのに、その服もシルクハットも全く濡れていなかった。

天使の加護と悪魔の加護を持つ手品師。このヒトはいつたいどんな人生を歩んできたんだろう？

「やつぱりおまえ、おれの味方だったんじゃないか」

「違いますよ。僕は誰の味方でもありません。貴方を助けたいのは僕ではなく僕の悪魔」

白い手袋の下に残された悪魔紋章を見せて手品師は笑う。

今も手品師を包む悪魔の加護は半端なものではない。それこそ力

マエルさんを吸収したフラウロスさんやラーズ並の力を持つはずだ。
「名前、教えて？ 誰？ どの悪魔さんなの？」

そう聞くと、手品師はにこりと笑った。

これまでの悲しそうな笑顔とは少し違う、晴れやかな笑顔だった。
「さあ、じゃあ僕の手品で姫さまをひとつ飛びに戦場へお送りしましょう」

自分の疑問を完全に無視したその言葉に、思わず唇を尖らせてしまった。

「ゲブラッ！」

「がんばってください。これからが、大変ですから。揺らがないでください。あなたが迷えば世界が揺らめきます」

「答えになってないよ！」

マジシャン
手品師がステッキを振る。

これは手品。種も仕掛けもある、不思議な

「待てよ、おまえ！ おれまだ何も……せめて悪魔の名前くらい」
ステッキの先が光る。

手品師はそのステッキをくるりと回し、おれに光の粉を振りかけた。

「僕の悪魔はかつてコインで召還しました」

手品師は一本だけ指を立てて唇の前に置いた。

秘密のサイン？ いや、違う。これは……

「第1番目のコインの悪魔？」

目の前に光のヴェールが降りて、景色が薄れていく。

「……バアル」

思わずポツリと呟いた。

その名は、先ほど稀代の天文学者ゲーティア・グリフィスが探せ、
と言った悪魔だ。きつとお前の力になってくれるから、と

「ゲブラ……っ……バアル！」

手を伸ばしたけれど、届かなかった。

手品師の顔もその後ろに浮かぶ優しい瞳の悪魔の姿も、霞むよ

うにして消えていった。

次に視界が晴れると、目の前にはなんとセフィラの神官服を纏った二人がこちらを驚いたように見ていた。

あらら、どうもゲブラは気を利かせて戦場のど真ん中に飛ばしてくれたようだ。

「ん？ どこだ？ ここ」

思わず間拔けな声を出してしまうと、後ろから驚いたバリトンが響いた。

「……ラック」

ああ、自分が一番聞きたかった声だ。
今度こそ、もう隣を離れたりしない。

くるりと振り向くと、驚いた紫の瞳がこちらに向けられていた。

「ただいま、アレイさん」

にこりと笑うと、困惑した顔でじっと見つめられた。

それでもこのヒトにまた会えた事が嬉しい。思わず微笑んでしまった。

「ごめんね、遅くなっちゃった」

「お前……なんでここに」

「言っただじゃん。おれはここで戦うためにずっとがんばってきたんだ」

二人と別れてから。

それだけを目標に厳しい稽古に耐えてきたんだ。

「アレイさん……おれはアレイさんの隣で戦うって言ったよ？」

これはある意味での告白だった。

でも、アレイさんが願っていてもいなくても……隣にいたかった。
知らない場所で、危険な目に遭わないように。

「本当は　ねえちゃんも隣にいるはずだったけど」

もちろんねえちゃんのことを思い出すだけでまだ塞がっていない

傷口はずきずきと傷んだ。

しかし、もう自分は戦える。

絶望に支配される事はない。ラースに飲まれることだってもうない。

ヒトは、大切なものを失ってもまた新しく大切なものを見つけて立ち上がるんだろう。悲しい事だけれど、そうしなかったらきつとねえちゃんはずっとおれのことを心配し続けなくてはいけない。

前に進みなさい。大切なものを見失っちゃ駄目よ？

きつとねえちゃんはそう言うだろう。

だからおれはここに戻ってきた。

もう一人の大切なヒトを失わないように。このイジワルで底抜けに優しいこのヒトに、傍にいてもいいか問うために　心の底から願うから。

紫の瞳を真直ぐに見つめた。その瞳はまだ驚いているようだった。しかし、背後にセフィラが控えている今、説明している時間はないだろう。

「詳しいことはまた言うよ。それより先にシアを……」

そういえばシアは？

と、思って見上げると、そこには金冠を背に湛えたシアとそれを追う紅髪の騎士が目に入った。

「ライディーン！」

思わず叫ぶと、ライディーンは一瞬振り返った。

強い意思を含んだ藍の瞳にどきりとする。

「ラック！　シアは俺に任せろ！　お前はシアに攻撃なんて出来ないだろう？！」

強い口調で言われてぐつと詰まった。

確かに、シアに攻撃をしろといわれたら躊躇ってしまうだろう。だって、ずっと一緒に同じ部屋で生活していたのだ。ヴィッキーと共に。メリルと4人で

今だってまだ信じられない。シアがマルクトだなんて。ルシファ

を狙って騎士団に入り込んでいたなんて。自分たちを裏切ってセフイロトに戻ってしまうなんて。

そんな心の葛藤を見抜いたかのように、ライディーンはにこりと笑った。

ほんの少しだけ悲しそうに。

「先輩、後は頼んだよ?」

アレイさんに向かってぴつと指を突きつけたライディーンは、シアの姿を追って飛び去っていった。

SECT・23 幻想

周囲を見渡すと、周囲をぐるりと深い溝が取り巻いているのが分かった。ここはまるで台地状に隔離された闘技場だ。戦場の真ん中に突如現れた決戦の場所。

そしてこの土の台地に残されたのは二人のセフィラと自分たち二人だけしかない。

一人目の宣戦布告をした淡い茶髪のセフィラは、背に大きくアーチを描く金冠を背負っている。それはサンダルフォンを召還したシアと同じだった。狡猾そうな笑みを湛え、細いフレームの眼鏡を押し上げる。

隣にいるのは自分より年下だろうと思われる大きな黒縁眼鏡の少年だ。小さな体を6枚の翼に埋もれられるようにしてぼんやりと佇んでいた。その手にはからだの大きさに不釣り合いな大きい硝子球が乗っている。

あの赤い羽根の詰まった硝子球は見た事がある気がするけど、どこで見たんだっけ？

思い出せない。

ずっと羽織っていたマントを脱ぎ捨てた。

首にかけてコインをぎゅっと握り締め、静かに名を呼んだ。

「フラウロスさん」

黒々とした魔方阵が発動し、灼熱の獣が空中に飛び出してくる。

凄まじい熱風に襲われた。

蒼い炎を従えたオレンジの豹は地面に降り立って一つ大きく咆哮を上げた。

だが、これはさすがに熱い。それに隣で戦うアレイさんたちにも被害がでかねない。

「もう少し温度下げられるかな？ おれも熱いんだけど」
するとフラウロスさんは掠れた声で抑揚なく返事をした。

「難解 だが 努力する」

言葉と共に炎の勢いが弱まる。これで何とか火傷せずに済むだろう。何より、周囲に発散している分の炎を攻撃に回せばフラウロスさんはもつと強くなれるはずだと思った。

どうしてそう思ったかは分からない。

ただ分かるのは、銀髪のヒトに連れ去られた次の日や、一人でゲブラとネツアクに立ち向かった時と同じように頭が冴え渡っているという事だった。

アレイさんを見上げると、背後には幼い顔をした生意気そうな子供の姿が浮かんでいた。あれは戦の悪魔ハルファスだ。風を操る力も持つとアレイさんが言っていた。

それから、アレイさんの握る長剣からは禍々しい気配が漏れている。間違いなくあれはサブノックさんの持っていた剣と同等の能力を持っている。天使の攻撃を裂き、斬った傷を腐らせるという刃の狂剣だろう。

それに対し、敵は二人。

「ひひ！ フラウロスも来たか！ カマエル倒したみたいだな！」

甲高い声がアレイさんの背後のハルファスから漏れた。

フラウロスさんがしゃがれた声で答える。二人は知り合いなんだろうか？

「ハルファス 契約 珍しい」

「いいだろ！ 俺こいつ好きだ！」

ストレートな悪魔の言葉に思わずどきりとした。

フラウロスさんは一言で切り捨てる。

「理解不能」

自分もこんな風に素直にアレイさんに好きだといえたらいいのに。悪魔の率直さに思わず目を丸くしてしまった。

「すごいね、アレイさん。大人気じゃん」

するとアレイさんはきゅっと眉を寄せた。

「お前が言うか？」

「だってフォルスさんもフェルメイさんも、ルーパーだってライディーンだって、ゲブラも……みんなアレイさん大好きだよ？」

そう言うアレイさんは深いため息をついた。

いつか、言えるだろうか。

とてもとても好きなんだと。ずっと傍にいて欲しいし、おれはずっと傍にいたいのだと。だから隣にすることを許して欲しい、と見つめていた端正な横顔が引き締まった。

「ケテルは俺が引き受ける。でないとハルファスが承知しないからな」

「ひやは！」

ハルファスはどうかやら幼い声のとおり到我らしい。もしかすると、仲良くなれるかもしれない。

「んじゃあおれは……あいつだ」

翼にくるまれた眼鏡の少年を見つめた。

あれがホド。栄光の天使ラファエルを使役し、物理攻撃の通用しない幻想という傀儡を操る死霊遣い。ネクロマンサー

眼鏡の少年が大きな黒いフレームの眼鏡の奥でにやりと笑った。

「バカだな……今回の破壊人形は前回の比じゃないぞ？」メファイア・ドール

するとアレイさんは緊張した声で返した。

「ほんの数日で何が変わる」フラウス

「変わるぞ。強力な幻想に力を裂いていたのが無くなるからな」フラウス

強力な幻想……何かがぴんときた。

冴え渡っている今だからなのか。

「もしかしてシアがグリモワールにいた間、マルクトの幻想で軍を誤魔化していたのか？」ブラックルビー

シアは少なくとも二年間 漆黒星騎士団にいたはずだ。それではその間セフィロト国ではマルクトのいない現実をどう誤魔化していたのか。

その答えがきつと幻想だ。

フラウス

幻想とは血を使ったヒトと同じ姿をした傀儡のこと。

「勘がいいな。レメゲトン」

眼鏡少年のホドはにやりと笑って赤い硝子球を掌から地面に落とす。

地面に触れた瞬間、大気を振るわせる音を弾いて硝子球が砕け散った。

「行け、僕の破壊人形」
メファイア・ドール

中に詰まっていた赤い羽根がぱつと飛び散る。

それは徐々に収束してヒトの形を作っていた。

腰まで流れ落ちるストレートブロンドが現れる。

心臓がどくりと一つ脈打った。

まさか。

真紅のドレスに身を包み、ブロンドを風に靡かせて。

「……ねえ、ちゃん」

思わず呆然と声が出た。

ホドが作ったという最高傑作、
メファイア・ドール破壊人形。

金色の瞳がこちらに向けられた時、思わず叫んでいた。

「ねえちゃん！」

鼻の奥がツンとしてじわりと目の端に熱い雫が浮かんだ。

どうして。どうしてここにいるんだ。

「ねえちゃん、何で……？」

意識がとんだ。

目の前にいるのは幻想だと分かっていたのに、大切なヒトの姿に何もかもが吹き飛んでしまっていた。金の瞳から目が離せない。優しく微笑んでくれたはずの笑顔は無表情のままだったけれど。

後ろから何か声がした気がした。

同時に強い風が自分を包み込んだ。その風は強く優しく自分をふわりと浮かす。

ねえちゃんに向けて伸ばした手は届かない。

風に巻かれて遠ざかるねえちゃんに、必死で手を伸ばした。

「ねえちゃん!!」

行かないで。もうどこにも行かないで……!

心が叫びだす。

理性と関係なく感情が溢れ出る。

風が止んで地面に降りる事が出来た。

刹那駆け出そうとするが、腕が伸びてきて自分を抱くように押し留めた。

体中が震えだす。

落ち着いて、落ち着いて。あれはねえちゃんじゃない。ただの幻想だ。

もう行かないで。どこにも行かないで。おれの傍にいて。

違う、あれは偽物だ。

駆け寄りたい。抱きしめて欲しい。頭を撫でて、優しい言葉をかけて、そして笑って……

「落ち着け、ラック! あれは、ねえさんじゃない!」

頭の上から怒号が降ってきた。

思わず振り向くと、すぐそこに紫の瞳があつた。頬に赤い筋が入っている。

バリトンの響きが木霊する。

ねえさんじゃない。ねえさんじゃない……ネエサンジャナイ

「そんなはずない。だってあれはねえちゃんだ!」

「違う! あれはホドの創った幻想だ!」

幻想だ。幻想だ……幻想だ

すべては幻想。

ねえちゃんは、もう……!

絶望が想起する。

「嫌だよ……違うよ……ねえちゃんだよ。ねえちゃんは……」
固く閉じられた瞼と真っ赤に染まった体。

あの時、ねえちゃんは

「お前だつて分かつてるはずだ」

真剣な声で、しかし悲痛な叫びで目の前の男性が告げる。

「ねえさんは死んだ！」

死んだ。

もう会えない。

追いかけることの出来ない世界に行つてしまった。

「あれは、敵だ。ホドの創り出したただの傀儡だ。ねえさんの血を
持つだけの、ただの……破壊人形だ」

そんな事は分かっている。最初から、分かっている。
全身の力が抜けた。

そのまま地面に座り込んでしまった。

SECT・24 肩を並べて

優しいバリトンが響く。

「ラック、お前はそこにいろ」

そして、遠ざかる足音がした。

代わりに灼熱の獣が自分を守るように擦り寄ってきた……驚くほど熱くない。

初めて触れた時はひどい火傷を負ったのに。

その炎の向こうには大きな背中が見えた。

遠ざかるその背は決意に満ちている。

ああ、まただ。またあのヒトは自分を盾にするつもりなんだ。

とても優しいヒトなんだ。相手を傷つけたら自分も傷ついてしまうくらいに。

やめて。もう誰も傷つくところなんて見たくないよ……！

おれが戦うから。

肩を並べて、自分の使える力全部使って戦うから。

だって誓ったじゃないか。

「待つて、アレイさん」

声が震えたのは仕方がない。

でも、ここで膝をついている場合じゃない。

「あれは、おれが倒す」

真直ぐにねえちゃんの姿を見据える ねえちゃんの姿をした偽^{フラ}物を。^{ウス}

「ねえちゃんの『偽物^{フラウス}』なんて、おれが許さない！」

偽物を見せるなんて ひどいと言ってしまえばそれまでだ。

絶望と迷いは吹っ切れて、心の中を怒りが支配した。

死んだ者の姿を幻想に見せるなんて。それもグリモワールを侵略する駒の一つとして利用するなんて……！

ユルサナイ

絶対に、許さない！

「フラウロスさんはケテルをお願い。倒さなくていい、こっちに介入できないように足止めして」

サンドルフオンを足止めできたフラウロスさんなら、きっとケテルを封じる事が出来る。

ケテルは最後だ。

先に、あの許せない相手をやっつける！

偽物をぎりりと睨みつけた。

「あいつはおれがやる。アレイさんは、ホド本体をお願い」
許さない。許さない。

熱い感情が新たな力呼び覚まそうとしていた。

ケテルに飛び掛っていったフラウロスさんが、諸共凄まじい蒼炎の柱に包まれて消える。

今のうちに、自分は……あの、『フラウス偽物』を消す！

左手に右手をかさね、深呼吸した。

「ラース！」

殺戮と滅びの悪魔、グラシャ・ラボラス。

ずっと、呼び出すのが怖かった。また絶望に支配され意識を乗っ取られるのが怖かった。

でも。

ラース、おれの言う事を聞いてくれ……力を貸して。あの幻想を打ち払うために。

滅びの力が外に飛び出さないように内に収束させる。爆発しそうな力に抵抗し、支配に飲まれそうになる感情を抑えた。それでも、今にも暴走しそうな力が身内で狂っている。

何とかエネルギーを納めて、息をついた。

両腰のショートソードを抜き放ち、いつも自分を守って庇ってくれていた大きな背中に歩み寄る。

これでようやく隣に立てる。

「……無理だけはするなよ」

「ありがとう」

肩を並べて。

自分の持つ力全部を使って。

「行くぞ！」

「うん！」

同時に地を蹴り、ラーズの加護を全身に満たして『^{フラウス}偽物』に飛び掛った。

ねえちゃん、大好きだよ。おれがこの先どんなヒトに出会ったとしても、ねえちゃんが大切なのは絶対に変わらないよ。

おれはまだ18歳だからこのあとまだ何十年も生きていくと思うんだ。

でも、ねえちゃんと過ごした3年間で本当に幸せだったこと、ずっと忘れない。

カトランジエの街の片隅で、優しいヒトたちに囲まれて大事に大事に育ててくれたねえちゃん。

大怪我して行き倒れていたおれを拾って、「探索者」という職まどくれた。いつでもやさしく撫でてくれて、眠れない夜には頬にキスをして落ち着けてくれた。

新しい世界でもずっと一緒にいるはずだったのにね。

グリモワール国の歴史を話してくれた。悪魔さんたちのことをたくさん教えてくれた。

おれは王都に行つてからたくさんのヒトに出会ったよ。たくさんの大切なものを見つけたよ。初めて自分の手で大切なものを守りたいと願うようになった。

だからおれは強くなるために稽古を重ねた。ねえちゃんから遠く離れたところで、一人でもがんばれるって信じてた。このまま強くなればいつかねえちゃんに追いつけるって……それなのに、これか

らだつて時にねえちゃんは逝ってしまった。

いっぱい泣いたよ。それこそ、吐くほど泣いた。もう駄目かと思つた。だつてこの戦場から逃げられると聞いた時、すぐくほつとしたんだから。あんなに望んで来た場所だつたっていうのに。

それでも、またたくさんのヒトに支えられて戻ってくる事が出来た。

あの手品師すらおれを助けてくれたよ。ご先祖様にも会っちゃつた。ほとんど話せなかったけど。

おれはこれからも生きていけるよ。ねえちゃんのいない世界でも、大切なものと大好きなものに溢れているこの世界で

初めてジュデッカ城の牢獄でラースを召還した時はただ支配されるだけだつた。助けを求めるだけだつた。

でも、今は違う。

ラースに力を借りて、自分の手足で戦っているんだ。それはずっとずっと自分が稽古を繰り返し、戦闘経験を積んできたから出来る事だつた。

悪魔に支配されるのは、心に隙がある時だけだ。特にラースは絶望を好む。ヒトの絶望を食って力にし、開いた隙間に入り込んでくるのだ。

しかし自分の中に吹き荒れている感情は怒り、だつた。怒りの目盛りが振り切つて、冷静になるくらいに怒っていた。

二本のショートソードを同時に振り下ろす。

スリットの入った真紅のドレスを纏う女性は、その攻撃をふわりと避けた。

その視線に胸が熱くなる。ねえちゃんと同じ目でこっちを見るな。ねえちゃんと同じ顔で、体で……！

背に膜翼が広がる。自分では見えないが、犬歯が伸びたのが唇の感触で分かつた。

「うおおおお！」

唸りを上げて偽物フラウスを追尾する。

そいつは表情も変えずに太股に括ってあったナイフを両手いっぱい
に持ち、追いかける自分に向かって投げつけてきた。目の前に大
量の刃が迫る。

これまでなら目を閉じてしまっていたかもしれない。

でも、もう今までとは違う。

目を逸らさずに迫ったナイフに真っ向から向かう。集中して、す
べてのナイフを叩き落した。

ふう、と息をついて一旦距離を置いた。

フラウス

偽物はどうやら天使や悪魔の力を使うわけではないようだ。これ
なら、それほど苦戦せずに倒せるだろう。

「一気に行くぞ！」

気合を入れて剣を構えたときだった。

瞳に光がなくなると無表情だった相手が、一言も発しなかった『
にせもの
偽物』に変化があった。

無表情だった顔が動く。口角が少し上がって目じりが下がる。

ばら色の唇がゆっくりと動いた。

メゾソプラノの声が漏れる。

「……ラック」

紛れもない、ねえちゃんの声だった。

SECT・25 決着

心臓が震え上がるような衝撃が走る。

だめだ。揺らいではいけない。揺らいではいけない。

あれはねえちゃんじゃない。あれはただの偽物で……
フラウス

「フフ ルーク 隙を見せたら 乗っ取ルよ？」

ラースの声が頭の中で響く。

左手がかつと熱くなる。ショートソードを取り落としそうになつて慌てて強く握り締める。

「ラック」

ねえちゃんの声がする。

違う、ねえちゃんの声じゃない。

「私のかわいいラック」

思わずぎゅっと目を閉じた。

その瞬間、左太股に鋭い痛みが走る。

体勢を崩して膝をつく、太股にナイフが刺さっていた。ねえち

やんが、投げたナイフ ねえちゃんがおれを傷つけた。

耳元で心臓の音がする。それにあわせてずきりずきりと左足に痛みが走る。

敵を眼前に目を閉じるなんて論外だ。

最悪の状況だった。

足をやられたということは、自分の最大の武器である機動力を半分封じられたようなもの。いかにラースの加護で膜翼があるとはいえ、足を庇いながら勝てる相手ではない事がすでに分かっていた。

どうする？

どうしたらいい？

この幻想を壊すのは難しくない。きつとラースに頼めば一瞬で破壊してくれるだろう。

でも、それじゃ意味がない。

おれがこの手で決着をつけなくちゃ、自分の手足で戦ってあの偽物^{ウス}を止めなくちゃ何の意味もないんだ。

でも、もしその意地がグリモワールを危機に陥れるとしたら？
いったいおれはどうしたらいい？

「ラック」

ねえちゃんの声が響く。

地に膝をつきうなだれた時、助けてくれるのは……いつだってバリトンの響きだった。

「その名を呼ぶな、幻想^{フラウス}。心を持たないお前が軽々しく呼んでいい名ではない」

いつしか自分を庇うようにして立つ黒髪の男性がいた。

その肩にはハルファスと思しき羽の生えた幼児が乗っている。その姿はこの場に不似合いなくらいに微笑ましかった。

が、その場に突如熱風が吹き荒れる。

はっと見ると、ケテルと戦っていたフラウロスさんの蒼炎柱が天を刺してうねり狂っていた。

そして次の瞬間、その炎柱は凄まじい轟音を立てて爆発した。

爆発の煙が去って現れたのは、天使の姿だった。

ミカエルさんと同じように6枚の翼を湛え、濃い藍色の髪を揺らして佇んだラファエルと思われる影。黒いシャツをほとんどボタンも留めずに羽織り、細身の黒いパンツに編み上げのブーツ。さらにはキラキラ光る銀や金のネックレス、腕輪、チェーンにいたるまで様々な装飾を身につけていた。

その隣に立つのは淡い茶髪のセフィラ……王冠の天使メタトロンを役とするセフィラの長ケテル。

そしてその足元にフラウロスさんがよろよろとしながら立っていた。

うそ、だろう？

「フラウロスさん！」

フラウロスさんがあんなにダメージを受けるなんて！
はやく魔界に戻って回復して！

その気持ちに通じたのかフラウロスさんの姿が消えた。

ほっとした途端に痛みが襲ってくる。左太股に刺さったナイフは、抜いてしまうと出血してしまう。このままにしておくしかないだろう。

痛みを耐えて立ち上がる。

ずきりずきりと痛む足を引きずって、いつも自分を庇ってくれる
ヒトの隣に立った。

戦闘に参加しないホドを抜いても敵は3人　天使が一人、天使
の加護を受けたセフィラが一人、そして破壊人形。^{メフィア・ドール}それに対しこち
らは負傷した自分とアレイさん、それに彼の肩に乗っているハルフ
アス。

自分の手で決着をつけたいと思っていた。悪魔の力じゃなく、自
分の手足で戦いたかった。人知を超えた悪魔の力でたとえヒトを傷
つけるのが嫌だったから。

でも、そんな変な意地で大切なヒトたちを危険にさらしてもいい
？本当にそんなふうにして、おれは納得できるのか？

相手も悪魔と並ぶ天使の力を召還しているというのに……？

「ラース、出てきて」

答えはすぐに出た。自分の意地なんかよりずっと大切なものがある。

ふわりと体が軽くなる感覚があり、黒い霧が自分の全身から飛び
出していった。口元にあった犬歯の違和感が消失する。

「いいのカイ？　僕ハ　容赦しナイよ？」

膜翼を背に湛えた大きな黒い狼が幼い声で答える。

うん、だいじょうぶ。何より大切なものを見失いたくない。だっ
て、おれの『一つだけ』は

「いい。躊躇ったら今度はおれの大切なものが失われてしまう」

「ソウ」

ラーズは嬉しそうに犬歯をむき出しにした。

「じゃ　メタとろんは　僕が貰ウヨ」

ラーズはそれだけ言い放って、ケテルに向かって駆け出した。

殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラスがメタトロン本体でなくただ加護を受けただけのケテルに負けるわけがない。

もう一度ショートソードを構えた。

「あれだけはおれが倒す」

ねえちゃんフラウスの偽物だけは。

痛みで息が荒くなる。それでもここだけは退けない。

「ひひ！　じゃあやつぱりラファエルだな！」

アレイさんの肩に座った幼い悪魔が叫んだ。

だいじょうぶ。紫の瞳をしたイジワルで底抜けに優しい彼がいる限り、おれは負けない。

ねえちゃんの姿をしつかりと視界に捕らえる。

もう目を閉じたり背けたりしない。

「さよなら、だよ」

何度そう決めても揺らいでしまうのは仕方ないのかもしれない。

だってねえちゃんはおれにとって創造主なんだから。

「今度こそ偽物をやつつけるよ」

確認するように何度も繰り返し呟く。

まだラーズのかごが残る体は、強く願うとふわりと宙に浮いた。

これなら機動力はそれほど変わらない。

左手のショートソードを鞘に収め、一本の剣を両手で強く握る。

そうだよ、短剣を使って戦う方法を教えてくれたのはねえちゃんだったよね。

「ねえちゃん……」

世界を断ち切ろう。

だっておれはもう新しい世界を見つけた。

「さよなら」

その言葉を最後に、自分の感覚は人知を超えたものになる。

千里眼

ご先祖様が使った力。何度も自分を助けてくれた力。

ひどくゆつくりと動き出した世界で、自分は、剣を強く握って偽^{ウソ}物の懷に飛び込んだ。

この傀儡をとめるのはこんなに簡単だ。

ただ、自分がずっと躊躇ってできなかったただけだ。

今度こそねえちゃんに別れを告げるよ。

刃がねえちゃんの肩口に食い込む。

本物の人間とは違って簡単に裂けていく体はやはり生き物の感触を伝えない。

時間がゆつくりと流れる世界で、右肩から斜めに入った刃が胸の中央を通り、左わき腹へと抜けるのがはつきりと見えてしまった。

すぐに千里眼をといてぱっと離れる。

「ラ……ク」

偽物^{フラウス}の口から最後の言葉が漏れた。

ねえちゃんと同じ、メゾソプラノ。

「……ごめんね」

やっぱり自分の口から出たのはこんな言葉だった。

切り裂いた口からばあ、と真つ赤な羽根が飛び散る。

今までねえちゃんの姿をしていたそれは、何千何万枚もの羽根に姿を変えた。

はらはらと舞う赤い羽根はまるで血の海のように地面に赤い円を作り、その場に沈黙が訪れた。

SECT・26 ねえちゃん

幻想が羽根に帰した瞬間、自分の太股に刺さっていたナイフも消失した。

「！！！」

ぱつと鮮血が散る。

がくりと膝をつき、手で傷口を押さえる。滑り落ちたショートソードが地面に転がった。

吹き出した血は止まらず、地面に見る見る赤い血溜まりを作っていく。目の前の真っ赤な羽根の山に似た色をした染みはじわじわと広がっていた。

すぐに服を裂いて足に巻きつけた。が、その布もすぐに真っ赤に染まっていく。どうやら大きな血管を傷つけてしまったようだった。

「くっ……」

痛みに耐え、息を整えながら転がっていたショートソードを鞘にしまう。

血の滲んだ腿に手を当てて右足に体重をかけて立ち上がった。

金属音に上空を見上げると、アレイさんとハルファスがラファエルを追い詰めていた。ラーズは少し離れた場所で茶髪のケテルと対峙している。

アレイさんとハルファスが負けることは考えられない。そう判断して足を引きずってラーズの元へ向かった。血の道がずるずると地面に伸びていく。

ようやく辿り付いた時、既に勝負はつきかけていた。

「終わったのカイ？ ルーク」

大きく裂けた口元から熱い息を漏らし、嬉しそうに笑うラーズは、^{ガーネット}炎妖玉の瞳をぎろりと煌かせた。すべての人間が恐れるであろう殺戮の悪魔の姿だ。

「コつちも もう 終ワルよ」

にやりと笑ったラーズの視線の先には 右腕を失い、肩の辺りから血を吹き出したケテルの姿があった。

まるで噴水のように鮮血が飛び散っている。

終焉の断末魔をあげたケテルが地面に突っ伏した。

「フフ 次ハ ドコを消シテホしい？」

絶叫の中でも静かなラーズの声が響く。
ぞくりとした。

思わず殺戮の獣の首に抱きつくようにして止めた。

「やめろラーズ！ もういいから！」

「なニ？ 今更 止メルの？」

「もう、十分だ……！」

ケテルからは途切れない金切り声が響いている。胸を裂くその悲鳴は自分の心をもずたずたに引き裂いていた。

右腕を根元から失ったケテルは既に戦闘不能だ。これ以上痛めつける理由はない。

「キミは アイ変わらず 甘イネ」

ラーズはそう言うのと、しぶしぶ闘気をおさめた。
ほっとして首から手ははずす。

「アア 勿体ナイな 血が流レテル」

ラーズは自分の腿に赤い舌を這わせた。

未だ血を流す傷口はずきりと痛む。

「今日は コレで 許してアゲル」

「そう」

ブエルさんといいフラウロスさんといいラーズといい、おれの血はそんなにもおいしいんだろうか？

舐めてみようかと迷ったけれど、痛みと出血でそれどころではなかった。

ラーズはしばらく自分の上に押し掛かるようにして腿に舌を這わせていたが、しばらくすると満足したのかふと顔を上げた。

ガーネット

炎妖玉の瞳に貫かれた。殺戮の牙が近い。口からは大嫌いな血の匂いがした。

悪魔は不機嫌でも上機嫌でもない当たり前の口調でこう言った。

「ボク 帰る」

あまりにあっけない言葉に拍子抜けする。

「うん、ありがとう」

「また 呼んデ」

「分かってる」

前回と同じ台詞を残して、殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラスは魔界へと帰還した。

それを確認し、すでに地面に突っ伏して悲鳴を途絶え動かなくなったケテルを一瞥してからもう一度立ち上がった。

舐めとってくれたラースのお陰か、太腿の傷口から血が滴ることはなかったが、失った血と深い傷の痛みは自分の意識を薄らぐのに十分すぎるくらいだった。

その時、その場に突風が吹き荒れた。

天を仰ぐと、そこには凄まじいまでの風の渦が生じているのがわかった。

「！」

アレイさんの姿もハルファスも、もちろんラファエルの姿もその豪風にかき消されている。

地面にもその影響は大きい。

先ほどまでねえちゃんを形作っていた大量の赤い羽根が空に舞った。

「……あ」

思わず羽根に手を伸ばした次の瞬間には立っていられないほどの豪風が地上にも吹き荒れた。

咄嗟に身を低くして耐えた。

耳元を轟音が駆け抜けていく。頭部を庇い、地面にうつぶせになった状態でどれだけ耐えただろう。とても長い時間だった。

顔を上げたのは、頬につめたい雫が落ちてきたからだ。

ふと天を仰ぐと分厚い暗雲が立ち込めてそこから涙のような雨粒がぱらぱらと落ちてきていた。

戦場の真ん中、台地状に作られたフィールド内だけが沈黙に包まれていた。周囲は戦の喧騒が激しいが、ひどく遠い音だった。降り始めた雨は徐々に土の色を変えていく。

ケテルは倒れこんだまままでホドの姿はなく、この地面に立つのは自分ひとりだ。

そんな台地にふわりと降り立ったヒトがいた。

背に漆黒の翼を湛え、短い黒髪からは角が二本飛び出している。

黒衣に包まれた長身はまるで戦神のようにすらりと引き締まっていた。端正な、愁いを帯びた横顔はどこかあの褐色の肌の戦士を思い出させて、なぜかどきりとした。

左手に握られた長剣をきん、と鞘に収めると漆黒の翼と角が消え去った。

紫の瞳がこちらを向く。

「アレイ、さん」

全身から力が抜ける。

へなへなと崩れ落ちた自分に心配そうに駆け寄ってきた彼は自分を抱くようにして膝を折り、横抱きに寝かせるようにして体の下に手を回した。

その腕に体重を預け、全身の力を抜いた。

温かい腕の中で安堵する。

「大丈夫か？ 傷は……」

「平気。やられたのは足だけだよ」

そう言つとアレイさんは真つ赤に染まつた足に目をやって眉をひそめた。

どこが大丈夫だ、と怒られるかと思つたがひとつため息をついただけだつた。

「ケテルはラースが倒したよ。ラファエルさんは？」

「……ハルフアスが吸収した」

そうか。よかった。

これで全員だ。

自分は何とか大切なものを守りきる事が出来たみたいだ。

安堵すると力が抜けた。

が、目の前に何かがふつてきた。

雨ではない。もつとゆつくりとした速度で舞い落ちるそれは

先ほどの豪風で舞い上げられたねえちゃんの血を吸つた赤い羽根だつた。

ひらり、と自分の胸元に落ちたそれを掌に包む。

「ねえちゃんが……」

肩を抱く大きな手がピクリと震えた。

見上げた紫水晶アメジストは悲痛な色を隠せないでいた。

「おれが壊したんだ。二つに切り裂いて、殺したんだ。偽物。一瞬だつたよ……」

ああ、どうしてこんなことになつたんだろう。

自分の手で大切なヒトを屠るのはこんなにも辛い。失つたときと同じくらい、辛くて苦しい。

上から覗き込むアレイさんの顔越しに、天から次々と雫が降ってきているのがわかつた。それはひどく冷たくて、まるで幻想とはいえねえちゃんを殺してしまつたおれを責めているかのようだつた。

目の端が熱くなる。

「どうしてこんなことになつたのかな？ おれは……ねえちゃんとずっと一緒にいたかつたのに……」

何を捨てても守りたいと思っていたのに、おれは何も出来なかった。ずっと育ててくれたねえちゃんにお返し一つ出来なかった。

もう二度と会えない。

現実が重く押し掛かる。

「辛いね、アレイさん。大切なものがなくなるのは、すごくすごく悲しいね……！」

声が震えた。

紫色が滲んでいった。

「こんなにづらいんだっただけ……もう『一つだけ』なんていらないよ……！」

涙が止まらない。

守る事なんてしたくない。だって大切にしているものを失くしてしまっただけ、こんなにも苦しくてこんなにも辛くて、こんなにも……悲しい。

大切なものを選んで、それを失うのがこんなにも辛い事なのだとしたら、大切なものなんて最初からいらない。

既に自分はぼろぼろだった。

一番大切なねえちゃんを失って、仲間だと思っていたシアは裏切って、ラースの支配を逃れるために精神力を使い果たし、その上自分の手で大切なヒトの姿をした幻想にとどめを刺した。
フラウス

何もしたくない。もう……ねえちゃんと同じ世界で眠りたかった。涙は涸れる事を知らないように湧いてくる。遠くなっていく意識の中で、ただただ育て親の姿を瞼の裏に描いていた。

SECT・27 繋がり

それでも、ただ泣き崩れた頬に触れる手があった　温かくて大きな手。

「アレイさん」

にじんだ視界に紫の瞳が映った。その瞳は真剣だった。

「ラック」

紫水晶から目が離せない。

大きな掌が頬に当てられて、流れた涙を拭っていった。

アレイさんは強い意思を瞳に灯して真直ぐにおれを見つめた。

「それなら……俺を『一つだけ』に選べ」

一瞬理解できなかった。

驚いて目を見開くと、アレイさんはおれを地面に座らせ、自分も目線を合わせるようにして膝をついた。

そして、両肩に手を置いて言い聞かせるようにはっきりと言葉を紡いだ。

「俺は死なない。お前の傍からいなくなるならない。そうやって悲しませる事なんて絶対にしない」

衝撃で麻痺していた頭に、深いバリトンが響き渡った。

悲しみの中に光が舞い降りた。

「俺はずっとお前だけ見ていた。どうやって何を学んできたか、苦しんでいた事だって悩んでいた事だって全部知っている」

いつだってこのヒトは迷い悩む自分を導いてきてくれた。

おれが望むように支えてくれた。

「そのすべてが、愛しいと思う。だから……」

優しく響く声が悲しみにくれた心を溶かしていった。

アメジスト

紫水晶に吸い込まれそうになる。

「すぐ決めなくていい。でも、覚えていてくれ。俺はお前を　愛している」

その言葉は、確実に自分の胸を貫いた。
不思議な事に全く不快ではなく、むしろ震えるほどに嬉しかった。
愛している

言葉の意味は知っていた。ベアトリーチェさんが教えてくれたから。

それでも、こんなにも深く感情が理解したのは初めてだった。理屈ではなく涙が溢れてくる。

どうしてだろう、心は歓喜に躍っているのに。

「アレイさん」

答える代わりに両腕を伸ばしてぎゅっと首筋に抱きついた。
きつと伝わるはずだと思った。

「ラック……？」

大きな手のひらが髪に触れた。

もつと触れて欲しい。抱きしめて欲しい。優しく囁いて欲しい。
泣きそうな位に切ないのに、狂おしくらいに満たされている。
なんて……温かい感情なんだろう。

耳元でそつと呟いた。いつも彼がそうしてくれるように。

「もうどこにもいかないで。お願い。おれアレイさんが、いちばん、好きだから」

自分の一番はアレイさんだったのに。気づくのがこんなに遅かった。

新しい世界をくれたヒト。ずっとずっと傍で支えてくれたヒト。
イジワルで優しく。大好きなヒト……そんなことずっと前から知っている。

アレイさんは腕を緩めて目を覗き込んだ。

「本当に……？」

不思議そうな声に、こくりと頷く。

「ほんとだよ。ずっと一緒にいたいよ。アレイさんに傍にいて欲しいって言われたかったよ」

それに気づいたのは本当に最近だったけれど。

だって、自分の隣にはずっとねえちゃんがいるから。ねえちゃん以外に目を向ける事なんてなかったから。

一番大切なものを失って、それでも人は新しく世界を選ぶんだらう。

「ラック」

アメジスト
すごく近くにある紫の瞳は、さらに自分が映るくらい近づいた。紫水晶の中には自分だけが映っていた。

他に何も見えなくなった。

唇に柔らかいものが触れる。優しい気持ちと温かな心がそこから流れ込んできた。額と手の甲へのキスは尊敬、頬へのキスは愛情、そして唇へのキスは

大好きな人が微笑う。

すぐ近くで。手の届く場所で。

それは何て幸せな事なんだろう。

大きな腕の中に全てをゆだねて目を閉じた。

心地よいバリトンが響いている。

「愛している。愛している……ラック」

戦場の真ん中で。

ぼろぼろになるまで傷ついた心に優しいバリトンが染み渡っていく。少しずつ、少しずつ癒されていく。心臓の鼓動が落ち着いていく。

空から落ちてくる雨が全身を打ち始めていたけれど、それを感じないくらいに満たされていた。

「傍にいて。今度こそ、もうどこにも行かないで」

ワガママを言つと、彼はますます抱きしめる腕に力を込めた。

「安心しろ。嫌がっても……放さない」

どうしよう。そんな言葉がすごく嬉しい。本当に自分はおかしくなってしまったようだ。

「いつまでも傍に……」

バリトンが、途切れた。

刹那、胸の辺りが焼けるように熱くなって、それからすぐに激痛が襲った。

一体何が起きたかわからなかった。

ただ、自分を包んでいる優しいヒトの体から力が抜けた。
支えきれず床に崩れた。

「ひははああ！ 死ね！ レメゲトン！」

視界の片隅に血に染まった剣を振り上げた男の姿があった。右腕から鮮血を撒き散らしたあの男は狂気に埋もれて刃を振りかざしていた。

ケテルによって二人同時に剣に貫かれたのはすぐに分かった。

「アレイさん……？」

声を出すと焼けるように痛かった。

返事がない。

痛みと共にジワリと生暖かいものが流れ出してくる感触があった。

やばい

これまでの危機とは桁が違う、死の感覚が近付いているのがリアルにわかった。どうにも避けられないことだとなぜか理性が理解していた。

どうしてだろう。これまで何度も死にかけて、その度に何とか生き延びてきたっていうのに。心臓を貫かれた今、目の前に迫る「死」という現実を避けられる気がしなかった。

「返事して。アレイさん。おれ……おれアレイさん、がッ……！
げぼげぼッ！」

喉の奥から血が湧き出てくる。

ラースが首筋を噛み切ったときみたいだ。

ああ、最悪だ。自分がケテルに止めを刺さなかったばかりにアレイさんまで……お願い、誰か、このヒトだけでも助けてください。
助けを呼ぶ力すら自分には残されていなかった。

それに自分は知っている。この世界は、助けを求めたつて応えてくれる事などないということを。

それでも、最後の力を振り絞って微笑む。最後にでもいい、伝えたい。

口の中は全部血の味がした。

「愛してる……」

はるか古代のヒトはこの感情に名前をつけた。

自分はやっとその名を知ったというのに。

「アレイ、さん……」

ああ、瞼が重い。痛みが遠ざかっていく感覚は、まるでラースに左手を喰われた時みたいだ。

でも、今回ばかりはだめかもしれない。喉の奥から次々と血が湧き出してくる。

自分はこのまま死んでしまうのかな。

痛みが和らいで意識が沈んでいく。

心の中に暖かな気持ちを残して。

戦場にケテルのけたたましい笑い声が響き渡っていた。

グリモワール軍とセフィロト軍のぶつかり合う東の都トロメオの門前、レラージュの作った特設フィールドで。

おれは、すべての意識を手放した。

やっと分かったから。

ねえちゃんが好きだっていうのとは違う気持ち。

ねえちゃんの隣にいたいのに、アレイさんには隣にいて欲しい理由。

ワガママ全部を彼にだけ見せる訳。

愛してる

ここにいます。

すぐ傍に、一ミリのすきだっ

ぽら、ここに感じている。

薄れ行く意識の中に恐怖はなかった。安堵と灯が導いてくれる。
沈んでいく感覚の中に、ただ銀の光が溢れていた。

- - - おわり - - -

グリモワール王国建国から466年目の夏、後にグライアル合戦^{ベッルム}と呼ばれるこの戦いで、グリモワール軍は甚大な被害を被った。

天下分け目と呼ばれたその戦での戦死者は万に上る。平原を焼きつくし、決りつくしたその凄惨な闘いは周辺各国からも批難を受けた。ここにきて隣国クトウルフはグリモワールの難民受け入れを決定し、北の大国ケルトは戦場となったグリモワールの一般人への食糧支援を申し出た。

被害はそれだけではすまなかった。

何より大きかったのは、王国創立以来多大な貢献を続けてきたレメゲトンが壊滅的な損害を被ったのだ。

総指揮官、当時の炎妖玉騎士団長フォルス^{ガーネット}^レバーディア卿から王都へ向けた手紙にはこう記してあった。

メフィア^{II}R^{II}ファウスト 死亡

ベアトリーチエ^{II}アリギエリ 生存

ライディーン^{II}シン 敵方捕虜

アレイスター^{II}W^{II}クロウリー 行方不明

ラック^{II}グリフィス 行方不明

戦力であつたレメゲトンをはば失つたグリモワール軍はそれから程なく降伏を決めた。

王都ユダ^{II}イスジデツカはセフィロト軍の占領下に落ち、第2代国王ゲーティア^{II}ゼデキヤ^{II}グリモワール以下王族はみな捕らえられ、また高位に在つた貴族もセフィロトの捕虜となつた。

一部の有力な貴族は唯一の皇太子サン^{II}ミュレク^{II}グリモワールを秘密裏に国外へと逃がした。その行方は中心的に働いた漆黒星騎士団長クラウド^{II}フォーチュン他数名にしか知られていない。

クラウド^{II}フォーチュンもその後姿を消した。

セフィロト国は、皇太子サン^{II}ミュレク^{II}グリモワールはじめ逃れた高位の貴族たちに懸賞金をかけ、降伏から1年が経つ頃にはグリモワール全土をセフィロト国が支配し、悪魔崇拜を全面的に禁じる運びとなる。

こうして、悪魔を崇拜した王国グリモワールは467年に及ぶ歴史の幕を閉じ、悪魔は現世界から姿を消した。

多大な伝説を残したレメゲトンたちと共に

あとがきのもの

(あとがきは・head・tail・共通です)

ここまで付き合いただき、ありがとうございます。
最初に書いておきます。

「まだ続きます！」

ここで第一幕は終了となりますが、幕間をはさんで第二幕を書く予定です。

もともと書き始めるときはここで終わる予定だったわけですが、作者がハッピーエンド好きなので悲劇で終わるわけにいかないなあというのが続編のはじまりです。

ですからここで「LOST COIN」シリーズは終了です。
バッドエンドでいいという方、またトラジェディー好きだという人はここまですべて完結としてください。

でも、もし「ハッピーエンドじゃないと絶対いやだー！」という人がいたらもう少しお付き合いください。

ただ、ここからはぼんやりとした構想しかないので、更新はこれまでにより格段に遅くなると思われます。

完結記念にHP(PC用)を作りました。(小説部分はこと繋

っています)

依頼して描いていただいた挿絵なども展示してあるのでぜひどうぞ
[http://sky.geocities.jp/lostc
oin|ht/](http://sky.geocities.jp/lostc
oin|ht/)

また、絵を描いてくださる方は常に募集集中です。

ここまでお付き合いいただいてありがとうございます！

また、これからもよろしくお願いします。

(以下作者の感想?的なひとりごとです)

書き始めた当時はこんなにも長い話になるとは思わず、結局8章(8万字ほど)にも及ぶ長い話になってしまいました。

本当はラックの相手は銀髪の彼らだったとか、ライディーンがレメゲトンになる予定じゃなかったとか、誰かさんが　るのを忘れたとか……たいした話も書いていない割に予定外のストーリーに右往左往してしまいました。

それでも8つに分けて書いたせいもあるでしょうが、アクセス数は8章合計で70000人を達成しました（12/29現在）

ありがとうございます。

たくさんの人に読んでいただけて本当に嬉しいです。

天真爛漫でいつも一生懸命なラック。

彼女は作者の分身です。悩んだ事、苦しんだこと、経験してきたこと、考え方の変化……すべてファンタジーと関係ない日常で自分が学んできたこととリンクしています。とにかくかわいく！がコンセプト。

それなりに気にいっていただけたようで、満足です

無愛想だけれど本当は誰より優しいアレイ。

つんでれ、へたれ、へんたい。三重苦です（え）なんか見た目と自身のギャップがある人。を目指しました。近しい人にだけわかってもらってるよ的な。

恋愛レベルは中学生くらい。なぜか男にもてる男。

誰より強く絶対に揺るがないミーナねえさん。

これは作者の理想です。絶対的な信念を貫く、かつこいいおねえさん。なんでもできちゃうけど子煩悩。

彼女はたくさん裏事情を知っていても敢えて口を閉ざします。ラックとアレイがかわいいから。彼女だけでなく悪魔の大半はそうの

ようですが。

爽やかな笑顔の下は誰より黒いクラウドさん。

実はとてもお気に入り。もっと話に絡んで欲しかった。悪魔の力を抜けば王国最強の騎士です。年齢不詳。幼女からマダムまですべての女性を虜にしています。ラックも例外ではありません。

謎の行動で敵か味方が分からない手品師ゲブラ。

この人はいろいろかたりかたくてしょうがないのですがあんまり書くこと墓穴を掘るのでやめておきましょう。

勇壮な褐色の肌の戦士マルコシアス、天使のような外見で口の悪いクローセル、穏やかな老紳士アガレス。

墮天3人組です。みんなやさしいです。とくに主人公格の3人には甘々です。

灼熱の獣フラウロス、狂戦士ハルファス、破壊の化身レラージュ、殺戮の牙を持つラース。

この4人は仲良しです。あと一人悪魔を足すと、風、炎、水（氷）、土、闇の5種が揃います。そのうち？

他にも思い入れの強いキャラクターばかりでした。もっと活躍させたい人もいっぱいいたんですが無理でした。

今回は一人称小説の性……書ききれない事が多すぎました。
特に戦闘場面！

ラックとアレイがそれぞれ敵を相手にすると、他の戦闘を全く描写できずこいつはいつの間にかどうやって勝ったんだよ、という事が結構ありました。

ああ、これ書きたいのに、どうにかしてどっちかに見せられないかなあとか。

いろいろ考えながらも自分の構成力と文章力のなさが露呈されていくばかりでした。

何より戦闘描写が苦手です。

動きを言葉にするって、何て難しいんでしょう（笑

幕間の後、第一幕を全般的に推敲してみる予定です。

世界観、文章力、構成力、登場人物の個性など、まだまだ直すべき点はまだまだ多くあります。

これからも少しずつ精進していけたら、と思います。

短編でいろいろな人の過去を少しずつ書きたいものです。特に触れる機会の少なかったセフィロトサイドで。

全員がそれぞれ口に出せぬ過去を秘めています。いつか語ることに

なるでしょうか。

それでは、ここまでお付き合いいただいておりますが、とうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0921d/>

WORST CRISIS -head-

2010年10月8日13時27分発行